

---

# 渦巻く滄海 紅き空

樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

渦巻く滄海 紅き空

### 【Nコード】

N0388W

### 【作者名】

樹

### 【あらすじ】

齢四つの頃に木ノ葉の里を抜けたひとりの子ども。彼の存在を知る者は三代目火影以外おらず、火影自身死んだものだと思っていた。しかし中忍試験を受けるため、その子どもは木ノ葉の里へ舞い戻る。音忍としてやって来た彼の名は——うずまきナルト。

NARUTOの原作再構成です。兄のうずまきナルト、妹の波風ナルという双子の兄妹が主人公です。妹ー波風ナルが原作ナルトの立ち位置です。性格・口調もナルトそのものです。兄ーうずま

きナルトがスレナルです。ちなみにもう一つ書いてる「同士との邂逅」のナルトとは別人です。スレナル最強・ナル至上主義、シカマル最弱で話を進めていきます。時間軸は中忍試験前。原作で亡くなった人が生きていたり、オリジナルの術が出てきますのでご注意ください。

## 序章

——むかし 妖狐ありけり

その狐 九つの尾あり

その尾 一度振らば

山崩れ 津波立つ

これに因じて人ども

忍の輩を集めけり

僅か一人の忍の者

生死をかけ これを封印せし

めるが

その者 死にけり

その忍の者 名を 四代目

火影と申す——

九尾の妖狐襲来。

数多の犠牲をふせぐために、四代目火影は一人の赤子に九尾を封印した。

赤子の兄——己の息子に恨まれながら彼はこの世を去る。

——四代目火影には二人の子供がいた。

双子の兄妹だったが、【生まれたばかりの赤子】という条件から妹が妖狐の器となった。

己の代わりに九尾を封印された妹——彼女を守るために双子の兄は決意する。

―のちに九尾を封印された赤子は九尾と同一視され、木ノ葉の里民に暴力を振るわれる。  
その子が本当は九尾を封じられてなどいなく、ましてや双子の兄だとも気づかずに。

彼は妹の姿に変化し、三代目火影すらも欺いた。  
しかし妹が四歳になった時、火影に真相がばれる。

彼は火影に妹を任せると里を抜けた……………夢を実現させるために。

## 一 嵐の前の静けさ

——深い霧が立ち籠もる湖畔。

不気味でありながら神秘的にも思える場所——。

己以外で人の気配を感じられないと、白は濃霧の中で白い息を吐き出した。

「寒いか」

唐突に澄んだ声が響き、同時に彼の気配を読みとれた白は心の底から安堵した。

「大丈夫です。それで…今回の仕事はなんでしょうか」

未だ姿をみせない声の持ち主に、白は敬愛の念を抱きながら問いかける。

「再不斬と共にガトーの用心棒として雇われる」

「それは…ッ、あなたらしくない仕事内容ですね…」

白と再不斬は仕事仲間だ。もともと彼に最初に出会ったのは、白が先だった。そのため白は再不斬以上に、彼を敬愛し必要としていた。

「ガトーはどうでもいい。問題は対立相手のことだ。ガトーが今居座っている波の国は海運を奴に独占され、非常に貧しい。そのため波の国民たちは、国境を越える橋を完成させることに躍起になっている。一方、ガトーはヤクザや忍びを雇って力尽くで橋の建設を妨害している。…そろそろ、その橋造りに最も力を入れているタズナ

という男が、橋を完成させるまでの護衛をほかの忍びに依頼するだろう。波の国と同盟を結んでいるのは火の国……。火の国での忍びといえば、木ノ葉の里だ。よってガトーに雇われれば、木ノ葉の忍びと対立するのは必然。……お前たちには相手の力量を見極めるために、木ノ葉の忍びと闘ってもらいたい。」

「……………あなたには未来が視えるのですか……………」  
一気に言われた内容に、白は目を丸くする。

「違うな」

霧の中で、クスリと笑う気配だけがした。

「世界の先を読んでいるんだよ」

波の国での一件——白と再不斬との対立は第七班の下忍たちに変化を齎していた。

七班担当上忍のカカシは生徒たちの成長に目を細めながらも、白が

言っていたあのことはがずっと気にかかっていた。

「僕はあの人の道具です。あの人は優しい方なので、僕を過小評価するなど仰ってくださいるけれど…。僕はあの人のためならなんでもします。あの人の力になることが…僕の生き甲斐なんです…。」

白が言った【あの人】。ガトーではないだろうし、傍にいた再不斬のことだろうか？しかし傍にいる者をわざわざあの人などと呼ぶだろうか。白と再不斬が死んだ今、確かめようがないのだが…。

思考の渦に巻き込まれていた力カシは、すぐに現実へと引き戻された。

己を呼ぶ金髪少女の明るい声によって。

「力カシセンサー！」

たんぽぽの綿毛のような金髪と真つ青な空を思わせる碧眼。

両頬にある髭のような三本の痣。

そして、己の師であった四代目火影とそっくりの面影。

波風ナル。七班のドタバタ忍者である。

ぴょんこぴょんこ跳ねる彼女に合わせて、ツインテールで結ばれた見事な金髪がゆらゆら揺れる。

その隣には七班員でありナルの友人でもある、桃色の髪の少女・春野サクラ。

同じく同班の、慥然とした態度を常に崩さない黒髪の少年・うちはサスケ。

力カシは目を細めながら、己の教え子たちのもとへ歩みを進めた。中忍試験の志願書を手渡すために。

五大国の一国、火の国。

各国にある忍の隠れ里の中でも木ノ葉隠れの里は中心に位置している。

崖に彫られた歴代火影の彫刻が、落陽に赤く染まる街並みを見下ろしていた。

鴉の声が滲み渡るほどの静寂が木ノ葉の里を包み込む。

しかしながらその静寂は、街角の一角で起こった小さなイザコザによつて破られた。

イザコザとは、曲がり角から飛び出した小さな男の子が通行人の少女にぶつかつたという、ほんの小さなこと。

しかし、男の子も少女も実に大人気なく礼儀知らずだったのが、些細なことを喧嘩に発展させていた。

「痛いだろうが、クソが」

鮮やかな赤い髪の少女がぶつかつてきた男の子——木の葉丸を軽々と持ち上げ、鋭い瞳で睨みつける。

彼女の口からは、見た目に反して暴言が吐き出された。

「は、放すんだな、コレ！」

木の葉丸は少女の隣にいた白い髪の少年に助けを求めたが、彼は素知らぬ顔で佇んでいる。どうにか彼女から逃れようと目く鼻く彼を見て、桃色の髪の少女——春野サクラが慌ててその場を治めようとした。「ちよつと！あなた達何やってるの！？」

「うつせーな、なんだこのクソ女」

舌打ちまじりで赤い髪の少女は木の葉丸を投げ捨てる。すると、それまで我関せずと沈黙を貫いていた白髪の少年が彼女に呼びかけた。  
「そこまですておくんだな、多由也」

「テメエもうつせーぞ、君麻呂！」

薄手の白い着物を着こなした白髪の少年――君麻呂は、多由也と呼んだ少女の暴言に眉をひそめ、溜息をついた。

「――なんだよ」

「いや。君のような品のない奴と組むなんて、ナルト様のご命令でなければ願い下げだと思つてね」

「喧嘩売つてんのか、コラア！ウチだつてナルトの頼みじゃなかったらテメエなんかとチームにならねえよ！！」

「……君程度の実力で軽々しくナルト様を呼び捨てにするな」

「テメエこそ、自分だけがナルトを理解していると思つてたら大間違いだぞ、クソホモヤローが！！」

なんだか怪しくなる雲行きに、木の葉丸とサクラは呆氣にとられている。その時、場違いとしか言いようのない明るい声がその場に響いた。

「木の葉丸、大丈夫だつてば？」

「ナ、ナル姉ちゃん……」

たんぽぽの綿毛のような金髪をツインテールに結った少女がその場にいた。

内輪揉めをしていた多由也と君麻呂は、その声の主を目に映すと驚愕の表情を浮かべる。

その少女の容姿は、彼らが慕っている少年とあまりにも似通っていたのだ。

「ナ、ナルト様……？」

「ナ、……んなわけねーだろ。あいつは男だ。それにこんなバカ面

「じゃねえー」

「バ、バカ面つてなんだつてばよ！」

木の葉丸を助け起こした金髪少女―波風ナルは、初対面に失礼なことをいう二人につつかかろうとした。

その時、ヒュツと飛来してきた小石が、ナルと多由也達の間にかツンと音をたてて跳ね返った。

「よそんちの里で何やってるんだ、てめーは」

傍の木の上から聞こえてきた声に、その場の者が一斉に見上げる。

木の枝には、小石を弄ぶように手の中で転がしている黒髪の少年の姿があった。

「失せろ」

「きゃー、さすがサスケ君かっこいいー！」

高圧的な態度をとる黒髪の少年―うちはサスケに、春野サクラは歓声を上げる。

（サスケ…こいつが？）

（大蛇丸様の器候補…）

器と必要以上に接触するのは現段階では早すぎる。

そう判断した二人は、「中忍試験会場に来れば、嫌でも顔を合わすことになる」といった言葉を残して、その場から消えた。

尤も、多由也と君麻呂がその場をすぐに離れた理由の大半は、傍の木の上で隠れている忍びの視線が煩わしかったからである。

「どう思う？」

着衣に『死』という不吉な文字を縫い付けてある男が、顔面を包帯で覆っている男に尋ねた。

「まあ…大した事無いけどさ…木ノ葉の忍びは…。それより多由也と君麻呂がいたことに驚きだよ…」

「あの人達が来るなんて聞いてないわよ」

長い黒髪の少女が眉を顰めながらそれに答える。

三人の額には、多由也と君麻呂と同じく『』の印が刻まれた額あてが締められていた。

「なににせよ、中忍試験。楽しみだよ」

「——過小評価するな、と言った筈だ」  
「すみません……」

鬱蒼とした森の中で、人の声が響く。

巨木に囲まれた大木の幹の上には、木陰と共に三つの人影が映っていた。

「大体、再不斬も再不斬だ。死ぬ一步手前になるくらいなら命を優先しろって、前に俺言ったよな」

「…悪かった」

少年の批判の声に反論することもなく、大柄な男の影が身を縮ませる。

「で、でも、よくあの状況で僕たちを助けられましたね」

大柄な男―再不斬を見るに見かねて、一瞬女性かと見間違う端正な顔立ちの少年―白が間を取り持つ。

「ああ、簡単なことだよ。白が腹に穴空けられる寸前に、俺の影分身に変化させただけ。再不斬も同様。二人の死体も影分身だよ。まあ、あんまりチャクラ練り込まなかったから、地中に埋められて二週間くらいしか保たないと思うけど」

（十分凄い（ですよ））

白と再不斬は心中同じことを思ったが、口には出さなかった。彼の力は未知数だ。

「で、だ。もう二度と今回のような失態はするな。俺は簡単に命を犠牲にする奴は好きじゃないよ」

その言葉に、二人はビクリと身を震わせた。

空気を変えるため再不斬が慌てて口をはさんだ。

「そ、それで、今度はどういった内容だ？」

「……二人には中忍試験が始まるまで、この場で待機してもらおう」  
「待機って、この『死の森』で、ですか？」

「ああ。事前に情報操作と細工を施しておいた。必ずこの森が第二試験会場となる。試験が始まったら動いてくれ」

「どのように？」

「その時になれば俺が指示する。それまではここで身をひそめておけ」

「はい」「わかった」

三つの人影は一瞬にして消え、  
後には静寂だけが残された。

## 一 嵐の前の静けさ（後書き）

執筆中の小説がまだ書き終わっていないのに新規でまた書きちゃいました…。

スレナルによるNARUTOの原作再構成です。原作に忠実ではないので原作ファンの方々には許容できないような内容になると思います。ご注意ください。

また、妹の波風ナルは原作ナルトそっくりなので別にオリジナルキヤラのつもりはありません。違うといえば性別が女の子でいろいろの術のナルコみたいに髪をツインテールにしてるぐらい…。（大きな違いか）

## 二 試験の幕開け（前書き）

「渦巻く滄海 紅き空」第二話です。 原作再構成なんで思いつき  
りネタバレです。波風ナルはナルトそっくりですが若干四代目に似  
て人を褒めるのが上手いです。女の子にも気に入られてほしいな  
ーと思ってたらこんなフェミニストに…。すみません。  
おそらくナルちゃんは逆ハーレムになる気がします…。そういうの  
が苦手な方はご注意ください。

## 二 試験の幕開け

中忍選抜試験会場となる、木ノ葉隠れの里忍者アカデミー301教室。

そこには各国から集まった多数の受験者がひしめき合っていた。

担当上忍はたけカカシの激励を受けた、第七班の少年・少女達は301教室へと足を踏み入れた。

「……」

「な…なによ…これ…」

忍びの多さに圧倒される三人。同時に戦慄を感じていた彼らは、黒髪の少年に近づく影に気づかなかった。

「サスケ君おっそーい？」

黒髪の少年―うちはサスケの背中におぶさるように抱きついてきたのは、長い髪の勝ち気そうな少女。七班と同期の下忍―第十班の山中いのである。

「サスケ君から離れーっ！ーいのぶた！」

「あゝら、サクラじゃない。相変わらずのデコリぐあいね。ブサイクー？」

「なんですつてー！！」

彼女につっかかるのは、先ほどまでサスケの隣にいた桃色の髪の少女―春野サクラ。

二人がサスケを巡る恋のライバルであることは、一目瞭然である。そしてこの騒動に、完全に蚊帳の外となった金髪少女に声をかける者がいた。

「なんだよ、こんな面倒くせえ試験…お前らも受けんのかよ」

「シカマル!?……それにチョウジも!?」

金髪少女は嬉しそうに、いのと同班であり幼馴染でもある少年達に近づいた。

「…よお、ナル。久しぶりだな」

「元氣だった?」

「おう!」

金髪少女―波風ナルは、ニシシと笑う。少女らしくないが懐かしいその笑みに、黒髪を頭のとっぺんで一つに結っている少年―奈良シカマルと、お菓子を食べ続けているポツチャリした少年―秋道チョウジは嬉しそうに目を細めた。

ほのぼのとした雰囲気の中に、ナルに向かって突然人影が跳び付いてきた。

「ひゃっほーみーっけ!」

いのと同じようにナルの背中におぶさってきたのは、犬を頭に乘せている茶髪の少年。

「キバ!」

「これはこれは、皆さんお揃いでえ」

茶髪の少年―犬塚キバは、ナルにおぶさるように寄り掛かったまま、へらへらと笑った。

「どーでもいいけど、いい加減離れるよ。メンドクセー」

手慣れているのか、シカマルが顔を顰めながら、ベリツとキバをナルからひっぺがす。

「こ…こんにちは…」

「……」

キバに続いて声をかけてきたのは、同じく同期であり第八班の下忍達である。

黒髪の引っ込み思案な様子の少女は、日向宗家の跡取りとして生まれた―日向ヒナタ。

丸いサングラスをかけ、無口で何を考えているかわからない少年―油女シノ。

ちなみに、キバから解放されたナルはキバの忍犬―赤丸を構っている。

「何だ…お前らもかよ！…ったく」

シカマルが如何にも鬱陶しそうに言い放つ。

「くゝ成程ね。今年の新人下忍9名、全員受験ってわけか！」

調子よく言うキバは、サスケを挑発する。

「さて何処まで行けますかねえ、オレ達…。ねエ、サスケ君？」

「フン。えらく余裕だな、キバ」

自信たつぷりに振舞うキバに、サスケは鼻で笑う。

「オレ達は相当修行したからな…お前らにや負けねーぜ！」

「うつせーてばよ！サスケならともかく、オレがお前らなんかに負けるか！」

キバの言葉に過剰に反応したナルはキバに吠える。赤丸がキバの傍へと行ってしまったのが、彼女が不機嫌になった理由ではないだろう…たぶん、おそらく、きっと。

「ご、ごめん…ナルちゃん…。そんなつもりでキバ君も言ったんじゃない…」

キバの後ろで控えていた少女―ヒナタが、彼女に小声で謝る。

「お！ヒナタア！久しぶりだつてばよ！」

すぐに機嫌を治したナルが、ヒナタに満面の笑顔をみせる。

憧れの人であり、初めての親友でもあるナルの笑顔を見たヒナタは、顔を真っ赤にして俯いた。

「シノも久しぶりだつてば。元気だった？」

「ああ…久しぶりだな、ナル…」

表情の変化が読めない・何を考えてるか解らない、ということからシノを苦手と思う者が多いが、ナルだけはシノといると落ち着くため、さほど苦手ではない。

むしろ唯一シノの表情を読める下忍である。

八班と仲良く会話している最中に、ようやく一段落ついたのか、い

のとサクラが割り込んできた。

「ナル」。前々から思ってたけど、なんでこんなダボダボの服着てんの？」

「そうね。いのと違ってあんた可愛いから、もっと女の子らしい服にしたらいいのに」

「さりげなく人を馬鹿にすんじゃないわよ、デコリン！」

再び喧嘩を勃発しそうな状況は、ナルの一言によって回避された。

「…可愛いのはサクラちゃんやヒナタのことをいうんだってばよ？」

「あら、わかってるじゃない」

「ナ、ナルちゃん…／＼」

可愛いと言われて満足げに頷くサクラと惚けるヒナタを、じと目で見ながら、

「ちよつと、私はあゝ」といのはナルを睨んだ。

「いのは綺麗なんだってば。三人とも将来美人さんになるってばよ！」

につこりと屈託のない笑顔で言い切るナルに、その場の下忍仲間は一癒される。

「おいおい、こいつら褒めたって、なんもでねえぜ…グエツ」

余計な茶々を入れたキバが、瞬時にナルを除く女性群に沈められた。  
（はあゝあ。ナルが男じゃなくてマジ良かったぜ…）

地に沈んだキバに「ご愁傷様」とつぶやきながら、シカマルは心底そう思った。

女でもこのフェミニストぶりである。男だったら…、あまり考えたくない。

「おい、君達！もう少し静かにした方がいいな…」

キバの二の舞を恐れるあまりに、会話が途切れたちよつどその時、声がかかった。

「君達が忍者アカデミー出たてホヤホヤの新人9名だろ？可愛い顔してキャツキャツと騒いで…まったく。ここは遠足じゃないんだよ？」

「誰よ！アンタ？エラそーに！」

いのが、声をかけてきた幾らか年上の青年に不満の声を上げる。

「ボクは、カブト。それより辺りを見てみな」

「辺り？」

カブトの言葉に、サクラは恐る恐る辺りを見渡す。

すると、すぐ傍にいる、四本の縦線が刻まれた額当ての忍び達がちらを睨んでいる。

「君の後ろ…アイツらは雨隠れの奴らだ。気が短い。試験前で皆ピリピリしてる…どつかれる前に注意しとこうと思ってね」

気の短い奴らの視線に、押し黙ってしまったサクラ達を見て、カブトは苦笑した。

「ま！仕方ないか…右も左も分からない新人さん達だしな、昔の自分を思い出すよ」

「カブトさん…でしたっけ…」

「ああ…」

「…じゃあ、あなたは二回目なの？」

「いや…」

サクラの問いに、カブトは首を振った。

「…七回目。この試験は年に二回しか行われないから…もう四年目だ…」

「へー。じゃあこの試験について色々知ってた…！？」

「まあな」

カブトは少し誇らしげな表情を浮かべると、忍具ポーチから数枚のカードを取り出した。

「へへ…じゃあ、可愛い後輩にちよつとだけ情報をあげようかな。この認識札でね…」

聞き慣れない忍具に、サクラが首を傾げて尋ねる。

「認識札？」

「簡単に言えば、情報をチャクラで記号化して焼き付けてある札のことだ」

そう言いながら、カブトは数十枚の認識札を床に置いた。

「この試験用に情報収集を四年もかけてやった…札は全部で200枚近くある」

彼は一枚の札をクルクルと回転させ、チャクラを注ぎ込む。

「…何やってるのー？」

「見た目は真つ白だけだね…この札の情報を開くにはー」

すると、軽い破裂音と共に白煙が撒き上がった。

「ボクのチャクラを使わないと、見ることが出来ないようになってる…例えばこんなのがある…」

認識札からは、隠れ里の位置などの地図が棒グラフとして立体的に浮き出ている。

「今回の中忍試験の総受験者数と総参加国、それぞれの隠れ里の受験者数を個別に表示したものさ」

認識札に興味をもったのか、サスケが尋ねる。

「…個人情報詳しく入ったものはあるのか…？」

「フフ…気になる奴でもいるのかな？」

さも当然であるかというように、カブトは口角を上げた。

「勿論、今回の受験者の情報は完璧とまではいかないが、焼き付けて保存している。君達も含めてね。その気になる奴について、君の知ってる情報を何でも言ってみな…検索してあげよう」

「木ノ葉のロック・リーって奴だ」

サスケが口にした名前は、中忍試験会場に向かう途中で、彼が負けてしまった相手であった。

「なんだ、名前までわかってるのか…それなら早い」

すぐにカブトは二枚の認識札を引き出した。

「見せてくれ」

ロック・リーの情報に、サスケ達は耳を傾ける。

聞き終わったあとの彼らの表情は、少々強張っていた。

「木ノ葉・砂・雨・草・滝・音…。今年もそれぞれの隠れ里の優秀な下忍がたくさん受験に来ている。ま、音隠れの里に至っては近年誕生した小国なので情報は余り無いが…それ以外は凄腕の隠れ里だ」

「な…なんか自信無くなってきましたね…」

不安げに眉を下げたヒナタが呟く。

「つまり…此处に集まった受験者は皆…」

「そう！各国から選りすぐられた下忍のトップエリート達なんだ。そんなに甘いもんじゃないですよ」

そう締めくくるカブトの言葉に、サクラ達は、エライ場所に自分達は来てしまったんじゃないかと緊張し始めた。

一方その頃――

「なにをしている、多由也」

「ナルトを探しているに決まってるんだろ」

周囲を注意深く見渡す深紅の髪の少女――多由也に、白髪の少年――君麻呂は呆れたような目を向けた。

「…ナルト様は時間通りに来るお方だ。遅刻など万に一つもない」

「そりゃそうだろうーけどよ」

多由也は険悪な目で君麻呂を睨むと（やっぱりコイツは気に食わねえ…）とぼやいた。

その時、教室の隅にいた騒がしい集団の中から、一際大きな声が教室中に響き渡った。

「オレの名前は波風ナル！ てめーらにやあ負けねーぞ！」

教室内にいる下忍達全員を指差しながら吠えるのは、あのナルト似の金髪少女。

その目立ちっぷりに、君麻呂と多由也は頭を抱えた。

（なまじ似ているだけに、キツイな…）

（あのバカチビ…中身はまったく似てねえな…）

内心失礼なことを考えていた二人は、騒がしい集団の中に顔見知りがあるのに気づいた。

「あれ…カブトが今叫んでたガキ共に接触してるぞ」

「ふむ、額当てからして木ノ葉の忍びだが…。器候補・うちはサスケの情報収集じゃないか？」

小声で話しながらも、多由也と君麻呂の両眼は先ほど啖呵を切った金髪少女を捉えている。

「さて…やりますか…」

そのような喧騒の中でも、顔面を包帯で覆った男の小さな呟きを二人は聞き洩らさなかった。

一応同じ音隠れの下忍三人が、音隠れの里を小国扱いしたカブトが気に食わなかったのか、なにかしら行動を起こそうとしている。

「あのヤロー共、何する気だ…」

「カブトさんが音のスパイだと知らないのだろう」

そうこうする間に、教室天井ギリギリの高さまで跳んだ音隠れの一人―ザクが、カブトに向かってクナイを投げた。

—その時 一条の金の矢が奔った。

### 三 邂逅

波風ナルは、カブトの言葉に押し黙ってしまった同期をなんとか励まそうと考えた。彼女は生い立ちから、人の感情の変化に敏感であった。（好意以外であるが）

彼女は己が賢くないことを十二分に理解していた。知識がある人ならば、彼らを励ます術を考え付いたかもしれない。しかし、波風ナルは彼女なりに考え、出した結果が教室内の下忍に喧嘩を売ることであった。自分が馬鹿をやれば、皆は緊張を解してくれるんじゃないか―と期待を込めて彼女は吠えた。

「オレの名前は波風ナル！ てめーらにやあ負けねーぞ！」

ナルのいきなりの宣言に、我に返った三人がそれぞれに反応を返してくる。

「フン」

「てめーらにや負けねーぞってか…言うねェー！ よっ！ 目立ちまくり！」

「あの馬鹿…一瞬にして周り敵だらけにしやがって…」

僅かに笑みを浮かべるサスケ・再びナルの背中に抱きつく勢いで笑うキバ・キバを牽制しながらも、呆れと心配が入れ混じった溜息をつくシカマル…。

他の同期の面々も、ナルを呆れながらも笑って見ている。

彼らのいつも通りの態度に安堵して、ナルはニシシと笑った。

「何ふいてんのよ、アンタ！…皆さん、冗談です…この子、かなりの馬鹿でして…」

ナルの宣言に、春野サクラは期待以上に反応した。…首を絞めると

いったオプシヨン付きで。  
ガミガミとサクラの説教を受け、しゅんとしたナルは当面の危機に  
気づかずにいた。

「さて…やりますか…」

何処からか小さな呟きが聞こえた。  
直後に殺気を感じた木ノ葉の下忍達は、三人の忍びが此方に向かっ  
て来るのに気づく。

その内の黒髪の男が教室の床を強く蹴り、高く跳ぶ。  
そのままの流れで、彼は何か黒いモノを此方に向かって投げつけて  
きた。

それがクナイだと把握したその時、

—— 一条の金の矢が奔った。

何が起こったのかわからなかった。  
気づいた時には、喧騒たる教室が静寂に包まれていた―ある少年の  
介入によって。

眩い金髪と、水晶のように透き通った碧の瞳。

両頬に髭のような三本の痣があるが、それすら愛嬌に見えるほどの  
端正な顔立ち。

絹のような白い肌に、黒いハイネックと白い着物を重ねている。

男にしては華奢な造りであるため女でも違和感が無い。

着物の上から音隠れの額当てを結んでいるので、クナイを投げつけ  
てきた黒髪の少年と同じ里の忍びだとわかる。だが襲撃した三人と  
はまるで雰囲気違った。

少年を纏う異様な雰囲気。

一言であらわすなら【無】だ。

まるでその場に存在していないのかと見間違いそうになる。しかし  
同時に少年は儚い美しさを印象づけた。そしてそれ以上に彼が静か  
に発する研ぎ澄まされた気配が、幻想的な少年の存在を確かに物語  
っていた。

「はい」

時を忘れた教室は、その原因である少年の言葉で動き始めた。

「君のだよね、このクナイ…」

そう言って少年は、先ほどクナイを投げた張本人―音隠れのザクに  
クナイを手渡した。

状況についていけず、しばし呆けていたザクは慌てて受け取り、驚  
愕した。

「あんた…どうやって…」

確かにそのクナイは、カブトに向かって自分が思い切り投げつけたモノだった。しかもクナイを匣にして超音波攻撃をしたはずなのに、目の前の少年は平然としている。何の変化も見られないカブトの様子から察するに、クナイを渡してきたこの少年が何かやったのは一目瞭然である。だが超音波を瞬時に打ち消すような素振りなど目の前の少年は一切していないはずだ。

「ナルト！」 「ナルト様！」

呆然とするザクを突き飛ばし、多由也と君麻呂は金髪の少年の許へ駆けつけ、

「今まで何処に行つてやがった!?」 「今までどちらにいらつしやったのですか!？」

同じ質問を同時に問いかけ、お互いを睨みつけた。

「テメー、ウチが先に訊きてえんだよ! すっこんでな!」

「僕が先にお尋ねしたんだ。君は口を閉じていろ」

「…二人とも静かにしろ。木ノ葉の忍びさん達が驚いてるだろ」  
金髪少年の諫めに、二人は押し黙った。

すぐに少年は、愕然としている木ノ葉の忍び達と向き合った。

「うちの里の者が失礼をした。すまない」

「い、いや…大丈夫だ」

彼の謝礼に、とっさに反応できたのはシカマルのみだった。

なぜなら、木ノ葉の同期達は揃いも揃って、驚愕の表情を浮かべていたからだ。

特に女性群は、未だ彼に見惚れたままだ。唯一、ナルだけは驚異の目を向けている。

それに内心ほつとしながら、シカマルは少年をじつと観察した。

驚くほど、己と幼馴染であるナルと似ている。男と女の違いを含めても、容姿が瓜二つである。背丈もナルと大して変わらない。しかしながら、外見のみで評価したとしても二人には決定的な違いがあるとシカマルは瞬時に打ち立てた。

ナル似の少年―彼は大人びすぎている―。

「テメー、何じろじろ見てんだ」

検討するかのように見ていたことで業を煮やしたのか、多由也と君麻呂が少年を庇うように前に出る。

その二人を制して、ナル似の少年は優しい声で話しかけてきた。

「その、金髪のツインテールの子」

「へあつ!？」

急に声をかけられたナルが、素っ頓狂な声を上げる。

「うん、君の名前教えてくれる？」

「…人に名前を聞く時は、自分の名前から先に言うべきだってだよ」

「はは、そりゃそうだ」

ナルの言葉に気を悪くした様子もなく、彼はクスクス笑った。

「俺の名前は…うずまきナルトだ…」

「オレってば、波風ナル!」

互いに自己紹介を終えた二人は、正反対の顔つきだった。うずまきナルトと名乗った少年は、にこにこ笑顔を絶やさずにいる。

対して少女・波風ナルの方は、挑戦的な眼を彼に向けている。

「…そろそろ始まりそうだな。席に着こう、君麻呂 多由也」

ナルトの後ろで、親の敵のように木ノ葉の忍び達を睨んでいた二人は、彼の声で我に返り、いそいそと席を取りに行った。

その二人の後を追う素振りを見せたナルトは何を思ったか振り返り、

「君の、名前は？」と、シカマルに向かって尋ねた。

「お、俺ツスか？」

「うん」

「…奈良…シカマル」

困惑気味に答えるシカマルに、満足げに頷いたナルトは

「じゃあね。ナル、シカマル」

とふわりと笑い、その場から離れて行った。

木ノ葉の下忍達は、試験官の「静かにしやがれ！どぐされヤローどもが！」という怒声が教室に響き渡るまで、呆けたように突っ立っていた。

突然黒板の前で白煙が巻き上がり、複数の忍びが現れた。

その中でも先ほど一喝した大男が、鋭い眼光を下忍達に向ける。

「待たせたな…『中忍選抜第一の試験』…試験官の森乃イビキだ…」

その風貌と眼光の鋭さに、受験生である下忍達は気圧される。

「そこのお前ら！いつまでも突っ立ってないで、とつと席に着きやがれ！」

イビキの怒号によつて、木ノ葉の下忍達は慌てて席に着いた。

全員が席に着いたことを確認したイビキが、試験の説明を始める。

「では、これから中忍選抜第一の試験を始める。志願書を順に提出して、代わりにこの座席番号の札を受け取り、その指定通りの席に着け。その後、筆記試験の用紙を配る」

「ペツ…ペーパーテストオオオオオ!!」

ナルは悲痛な声を上げた。

試験官から答案用紙を配られる。

サスケやサクラ達とは席がバラバラになってしまったナルは、かなり焦っていた。

（うあゝ、シカマルやイノ達とも離れちゃってるし…ヤバいってば…）

（ナルにとつちや、最悪の試験ね…フフ、へこんでるへこんでる）ナルの考えなどお見通しなのか、彼女の席の後方に座ったサクラは内心含み笑いをした。

「ナルちゃん…」

頭を抱えているナルに、隣の席から声がかかった。

「あ！ヒナタ」

「お…お互い頑張ろうね…」

「勿論だつてばよ！一緒に中忍になろうな！」

ナルは昔から変わらない笑顔で、ニシシと笑った。

ヒナタは憧れの彼女の笑顔を、若干頬を染めながら眩しそうに見た。

イビキの説明が終わり、試験開始の号令がかけられる。

受験者の下忍達が問題の難しさに汗をかいているちようどその時、試験開始から僅か5分で、全ての答えを自力で埋め終わった三人の受験者がいた。

イビキが最後の問題を出題するまで時間が余った彼らは、特殊な術を使って堂々と会話をする。

『それで、今までどちらにいらつしゃたんですか？』

『ああ。ちよつと計画のことだな』

『さっきのザクの表情から、ナルトのことを知らねえみたいだったが、あのクソヤロー共は計画に入っていないのか？』

『いや、一応表向きには入っているが、俺のことは知らないだろうな』

『そうみたいですな。先ほどからずっと視線が此方に向けられてますし』

『うつとうしいな。ウチと君麻呂のことを知ってるぶん、ナルトにばっか眼を向けてやがる』

『彼らとは面識ないからね。俺は下忍自体やってなかったし。俺のこと知ってんのは大蛇丸・カブト・音の四人衆と君麻呂……ぐらいかな？』

ナルトの言葉を聞いて、多由也と君麻呂は口端が上がる。特に君麻呂などナルトに心酔している分、心底歓喜していた。

(…音忍の中での話だな…)

ナルトは彼らの喜びなど知らずに、心の中で呟いた。

そして、木ノ葉の里に入ってからずっと気にかけている存在に目を向ける。

(——波風ナル。よくここまで純粹に成長したものだ。)

ナルトは事前に得た情報をもう一度振り返った。

（——姓を波風と名乗っていることから、四代目火影のご息女だとは里に広まっている。しかし、未だ彼女を忌み嫌う者は後を絶たない。アカデミーの成績が芳しくないことから、本当に四代目の子かと疑う者も増えている。暴力は若干減ったようだが、陰口は酷くなる一方だ。いくら三代目火影が気にかけても、人はそう簡単に考えを改めない。…陰口や迷惑を恐れてか、同期の下忍や担当上忍にもまだ心を開ききっていないようだ。信頼できるのは三代目と幼馴染か。男言葉なのも幼馴染の影響だろうな…）

そう結論付けていたナルトの視線の先では、バンツと机を手に叩き付ける少女の姿があった。

「なめんじゃねー！オレは逃げねーぞー！受けてやる！もし、一生下忍になったって、意地でも火影になってやるから別に良いってばよー！」

声高らかに、少女の声が教室中に響き渡る。

ナルトが心にかけていた人物―波風ナルが、手を机に叩きつけながら吠えていた。

いつの間にか45分後に出題される10問目のルールが説明されていたようだ。

つい思索にふけてしまったことを反省したナルトは、状況を把握するため頭を働かせる。

（——10問目を受けるか、受けないかの選択を強いられているのか。『受けない』を選んだ場合、失格。ただし来年も受験可。『受ける』を選んだ場合、正解できなかつたら一生下忍ね、……誘導尋問だな）

瞬時にイビキの意図に気づいたナルトは、教室内の暗い空気を蹴散らした少女に目を向けた。

「もう一度聞く。人生をかけた選択だ…やめるなら今だぞ…」  
「真っ直ぐ自分の言葉は曲げねえ…オレの忍道だ！」  
男口調ではつきりと言い切るナルの言葉は、他の受験生に変化を齎した。

彼らの不安や焦りをあっさりと消し去ったナルを見て、ナルトは微笑を浮かべた。

（…波の国で、白をぶつけたのは正解だったな。それにしても…火影になる…か…）

「良い決意だ、では…此处に残った全員に…『第一の試験』合格を申し渡す…！」

残る受験生達に合格を言い放ったイビキが、試験の目的の説明をし終わった後に第二試験官の女性が派手な登場で現れた。

「アンタ達！喜んでる場合じゃないわよ！！私は第二試験官！みたらしアンコ！次行くわよ、次イ！！ついてらっしゃい！！」

彼女の高いテンションについていけない受験生達。イビキがぼそりと彼らの代弁をした。

「空気読め…」

彼女の元師の姿が脳裏に浮かび、ナルトは思わず空を仰いだ。



#### 四 暮色蒼然（前書き）

「渦巻く滄海 紅き空」 第四話です。  
今回オリジナルの術が出てきます。ご注意ください。

#### 四 暮色蒼然

中忍選抜第二試験の担当試験官、みたらしアンの案内により第二試験場に着いた受験生達は、目の前の光景を眼にすると息を呑んだ。  
…一人の少年を除いて。

眼前に広がるのは、鬱蒼とした不気味な森。その奥からはギヤアギヤアと喧しい鴉の鳴声に雑ざって猛獣のような唸り声が聞こえてくる。

「此処が『第二の試験』会場、第四十四演習場…別名『死の森』よ！」

愉快そうに笑みを浮かべるアコとは対照的に、受験生達は蒼褪めている。

「…何か、薄気味悪い所ね…」

ナルと同班である春野サクラが、誰ともなしに呟いた。

「フフ…此処が『死の森』と呼ばれる所以、すぐ実感することになるわ」

サクラの呟きが聞こえたのか、アコはますます笑みを深める。ニヤリとした冷笑だがどこか色っぽさを感じさせる笑みである。

「だーいじょうぶだってばよ！サクラちゃん！怖くなんかないってば！ー！」

サクラを慰めるように、強がりながらナルが声を張り上げた。

「そう…君は元気がいいのね…」

ナルの態度を見てニツコリ微笑んだアコは、おもむろに袖からクナイを取り出す。下忍には速すぎるスピードでそのままソレを彼女に投げつけようとした。

の瞬間――体が凍りついた。

そ

（なにつっ！！！）

体の全機能、心臓までもが止まるような凄まじい殺気がアンコを襲った。

声どころか息もできず、殺気の出所も全く把握できない。しかも、彼女以外の人間が平然としていることから、アンコただ一人に向けられたモノだと理解できる。

実際殺気を感じたのはほんの数秒だったが、アンコにとっては未来永劫に続くかのように感じられた。

そのお蔭で手元が狂い、投げつけたクナイはナルに傷一つ負わずともなく。

気づいた時には受験生である草隠れの下忍に、投げたクナイを返されていた。

第二試験の説明を受け、『死の森』に繰り出していく受験生達の後ろ姿を見送りながら、アンコは先ほどの殺気の出所について思案に暮れていた。

（あれほどの殺気…普通の下忍が出せるような代物じゃない…一体誰…ッ）

殺気の余韻がまだ体の芯に残っており、震える身を抱き抱えるようにしながら彼女は顔をしかめた。

「なににせよ、今回の中忍試験…嫌な予感がするわ…」

アンコは『死の森』を、一人見据えて呟いた。

「これから俺達は単独行動に移る」

『死の森』に入っすぐナルトが口にした言葉に、多由也と君麻呂は啞然とした。

これから五日間ナルトと共に行動できると期待していたために、彼らが受けた衝撃は計り知れない。

「どうということだ」

不満を隠しもせずに、多由也が仏頂面でナルトに尋ねた。

「多由也にはドス達三人を見張ってほしい。彼らは器候補・うちはサスケを狙って木ノ葉忍びを襲う手筈になっている。だがドス達の力量では、返り討ちに合う可能性が高い。そこで多由也。しばらくは様子見、雲行きが怪しくなったところでドス達の回収。だが、あくまでこれは計画の一端だから、木ノ葉に手は出さないでくれ」

「そういうことか…わかった」

しぶしぶ納得した多由也に一瞥を投げ、ナルトは君麻呂に向き合った。

「君麻呂には砂忍を見張ってもらいたい。ただし、ある程度距離をとった上でだ。砂は音とつながっているとはいえ、信頼はできない。それに砂の切り札は情緒不安定のようなだし…、あまり殺戮されても困る。ただ、本当に見張るだけにしておいてくれ。切り札は砂をオートで操るらしいからな」

「わかりました」

君麻呂は素直にナルトに従った。

「ナルト様は…どうなさるおつもりですか…？」

「俺は他にやることがある。巻物は俺が揃えておくから、次に会うのは塔の中ということになるな…。だが、万が一君麻呂・多由也の身に何かあった場合はそちらに向かうよ」

「それこそ、万が一にないぜ」

多由也は不敵に笑った。

君麻呂と多由也がそれぞれ別方向へ向かって行くのを見送ったナルトは、視線をそのままに、頭上へと言葉を投げかけた。

「聞いていたか？」

「はい」「ああ」

すぐさま返事が木々の合間から返ってきた。

さわさわと揺れる新緑が、姿が見えない人の存在を醸し出す。

「悪いが、二人には第二試験の課題――巻物を集めてもらいたい」

「巻物？…もしかして、先ほど森に入ってきた下忍さん達が持っているモノですか？」

察しの良い少年――白が、眼下のナルトに問いかけた。

「ああ。『天の書』と『地の書』の巻物がそれぞれ一本ずつ下忍の班に配られている。五日以内に森の中心にある塔まで、『天地』の巻物二種類を揃えて持つて行くのが、試験課題だ。そこで、再不斬は『地の書』。白には『天の書』を集めてほしい。なるべく多くな」  
「だが、どのチームがどちらの巻物を持つてんのかわかんねーんだろ？」

大柄な男――再不斬の尤もな意見に、ナルトは考える仕種をし、その場を見渡した。

傍で咲く黒白の百合に目を止めた彼は、それぞれの花卉を二枚ずつ手に取り、指に挟む。その状態で、ナルトは尋常ではない速さで印を結んだ。

【黒白翩翩 耀従之術】

次の瞬間、生を持たぬ、ましてや動くことなどできぬ花卉が空を舞い始めた。

まるでそれは、黒き蝶と白き蝶。

二枚の花弁が重なり合い、呼吸するようにひらひらと金髪少年の傍で踊る。

さながらその光景は、優美高妙な絵画かと魅せられる。

「再不斬は黒を追え。そいつは『地の書』の巻物に反応する。白は白い方を。『天の書』に反応する。巻物を持つチームが半径10メートル以内にいる場合のみ、動きを止める。それから、二人には巻物を奪う際に、二つ条件があるんだが…」  
そこで一端、ナルトは言葉を切った。

「一つは、顔を見られる前に相手を昏睡させること。試験受験者以外の部外者だとバレたら不味いからな。二つは、音・木ノ葉・砂の忍びには手を出すな。黒と白が反応しても、これらの忍びの場合は見逃せ。」

彼の言葉を反芻した二人は、面倒な条件に嫌気がさしながらも、しぶしぶ承諾した。

「…殺さなきゃいいんだな？」

「それで…集め終わったら、どうやってナルトさんに渡せばいいんですか？」

「俺が二人の許へ行く。…頼んだ」

白と再不斬の去り際に、ナルトは一言声をかけた。

「…それから、草忍の髪の長い奴には気をつけろ…」

疑問を返すことなく、黒白の蝶にせかされて二人はかき消えた。

気配が完全に消えたことを確認した少年の姿もまた、音も無く消える。  
人がいたことなど微塵も感じさせないその場には、不自然な百合が咲き誇っていた。

夕闇が迫る。

密集した森林に、僅かながらも差し込んでいた日差しが、ますます狭まっていた。

闇の世界へと同化しつつある林は、僅かの日光により山吹色へ染まる。

そんな中、木立の合間を全力で疾走する人影があった。

（まずい…っ。早く見つけないと…ッ！）

強張った表情で死の森を駆けるのは、中忍第二試験官みたらしアンコ。

彼女は、先ほど見つけた三体の死体から犯人をすぐに推測したため、柄にもなく焦っていた。

三体の死体の内一人は、試験が始まる直前、アンコが投げたクナイを返してきた草忍。

（あの時、既に入れ替わっていた！？…死体から顔を奪う術…【消写顔の術】。それができるのは、間違いなくアイツ…ッ）  
暗部の出勤を要請しておいたが、彼らが来るまでには己が時間を稼がなければ…そしてできることなら引導を渡してやる…忌まわしき過去に決別を。

（…それがあなたの部下だった…）

「私の役目よね…大蛇丸」

「無理よ」

静かに紡いだアンの言葉に、大木から返答が返ってくる。  
木と同化していた人物が、するりと彼女の前に現れた。

「【潜影蛇手】！」

アンは、目の前の人物―大蛇丸に向かって攻撃を仕掛ける。無数の蛇が大蛇丸に襲い掛かるが、大蛇丸は笑顔を絶やさない。それどころか、余裕の表情でアンを木に叩き付ける。  
しかしアんとて負けずに体勢を入れ替えた。彼女はクナイを取り出し、己の手の甲と大蛇丸の手のひらを木に縫い付ける。

「へっ、捕まえた！…いくらアンタでも片手だけじゃ印を結べないでしょ…！」

勝利を確信し笑みをみせるアんに、後方から絶望の音が響く。

「…影分身よ」

目の大蛇丸が白煙になると同時に、背後の本体が印を結んだ。途端に、アンの首筋を激しい痛みが襲う。

全く歯が立たない実力差。

「…今更…何しに来た…ッ！まさか…、火影様を…暗殺でもしに来たの…っ！？」

痛みに耐えながらも途切れ途切れに問うアンコを、見下しながら大蛇丸は笑った。

「いーやいや！…里の優秀そうなのにツバつけと思うてね…」  
冗談めかしたその言葉には、部下集めの目的が感じられる。しかし、それだけのためにわざわざ抜け忍である彼が帰ってくるだろうか…。アンコは大蛇丸の真の目的を聞き出そうとしたが、首筋に浮かび上がった痣の痛みに耐えられず、木の幹に爪を立てた。

「ぐっ…う…ッ！」

「…さつき、ソレと同じ呪印をプレゼントしてきたところなのよ」  
欲しい子がいてね、とアンコの首筋の痣を嘗めるように見ながら大蛇丸は語る。

「くっ、勝手ね…。まず死ぬわよ、その子…」

「生き残るのは十に一つの確率だけど、お前と同じで死なないほうかもしれないしね…」

「えらく…気に入ってるのね…その子…」

息も絶え絶えに紡いだアンコの言葉を、大蛇丸は愉快そうに一笑した。

「…本当は、その子よりもっと欲しい子がいるんだけどね…」

それは俺のことか？

突如として現れた人物に、大蛇丸は表情を強張らせた。

「い、いつからそこに…ッ？」

最初からだ

鈴の鳴るような澄んだ声が大蛇丸に返事を返す。

声は特徴の一つのはずなのに、男とも女とも、または子どもの声にもとれる。俺という一人称から男かと推測するが、己をオレと言う女もいるため当てにならない。

アニコは大蛇丸をも狼狽えさせる声の持ち主の姿を見ようとすが、なぜか第三者の声が割り込んだ瞬間に体が硬直しうつ伏せになってしまった。

呪印の痛みに加え、大蛇丸以上の威圧感がある場に張り詰めている。その重みに彼女の体は耐えきれず、指一本動かすことすら叶わなかった。

「まさか…あなたがこの中忍試験に来るなんてねえ…」

別に俺は賛成も反対もしていない。あいつらには荷が重すぎると思っただけだ

「まあねえ…。でも冗談抜きで、手伝ってくれることに変わりはないのよね？」

今回だけな

「…私としては、一生傍で仕えてほしいんだけどねえ」

それこそ冗談だ。俺はどこにも属さない。初めからそう伝えたはずだが？

「それでも…私は君が欲しい…」

返り討ちにされなくなかったら止めとけ

アニコはうつ伏せの状態で、二人の会話を一字一句逃がさぬように聞き入っていた。

大蛇丸の誘いを一蹴したことから、彼と対話している者は大蛇丸以上の實力を持っていることが窺える。なぜなら、大蛇丸は心底欲しいモノがあれば実力行使で奪う者。それを彼の元弟子だったアニコ

は嫌というほど知っている。

大蛇丸が実力行使でも手に入れられない理由、つまりそれは彼が敵わないということになる。

彼女は冷や汗をかいた。

ところで…そのくノ一、まだ意識があるようだがいいのか？

謎の実力者に視線を投げられ、アンの心臓は飛び跳ねた。

（殺される…ッ）

元々相討ち覚悟で大蛇丸に挑んだので、彼女は死ぬ覚悟ができていた。しかし、声の持ち主に殺されることだけは、なぜか避けたい思いで一杯になる。

「ああ…。釘をさすだけだから別にいいのよ」

大蛇丸は、アンの存在を今気づいた風に装いながら笑う。

「くれぐれもこの試験、中断させないでね…」

その言葉を最後に、アンは今まで保っていた意識を手放した。

辺りはすでに闇に暮れ、横たわるくノ一の姿を月の光だけが照らしていた。

## 五 砂上の少年（前書き）

「渦巻く滄海 紅き空」第五話です。

今回時間がバラバラです。前半は試験開始から五十分頃の話、後半は大蛇丸とアンの会話の翌日となっております。

我愛羅vs雨隠れは端折りました、申し訳ありません。また、サスケ馬鹿の香燐が好きな方はご注意ください。

## 五 砂上の少年

第二試験開始から五十分ほど経った頃。試験会場である森を軽快に駆ける三つの影があった。

木の葉の様子が施された額宛が、密林の枝葉の間から洩れる陽光にてキラリと光る。

「おい！二人とも止まれ」

子犬と共に筆頭を走っていた少年——犬塚キバがくんと鼻を動かした。突然掛けられたその言葉に従い、後ろを走っていた二人は素直に足を止める。

「ヒナタ！あっちの方角——先、見えるか？」

「う、うん……。見てみる……」

一般人より嗅覚が格段に鋭い彼の言葉に従い、気弱そうな少女——日向ヒナタが瞳を大きく見開いた。

木の葉の名門・日向一族に伝わる血継限界——白眼。その特異な瞳術で遙か先、それこそ——先を見た彼女はおずおずと口を開く。

「あ……あっちで誰かが戦ってる……」

「よっしゃあ！見に行くぜ！」

ヒナタの言葉を聞くなりその戦いを見に行こうとするキバ。勢いに乗って今にも駆け出そうとする彼を、もう一人の無口な少年——油女シノが抑揚の無い声で窘める。

「キバ、何を言ってる？それは駄目だ」

「試験官は『天地』一組の巻物を持ってこいって言うただけだ。それ以上奪うな、とは言っていないぜ。ここで俺達が余分に頂けば、その分他のチームが脱落するわけだろ……まずは様子を見るだけだ。ヤバけりや無理に闘いはしないって！」

自信ありげに言い切るキバの意見に促され、彼らは——？先の場所へ

向かった――後に後悔するとも知らず。

宣言通りに血の雨を降らせた赤毛の少年が不満げな顔で周囲を見渡す。彼が背負う大きな瓢箪からはしゅるしゅると大量の砂がまるで生き物のように空を舞っていた。

つい先ほどまでこの場には六人の人間がいた。しかしながら今立っているのは瓢箪を背負うその少年と、彼と姉兄らしき二人だけ。その理由は地面に広がる赤い泉が物語っていた。

先ほどまで生きていた雨隠れの男達は皆跡形も無く、あるのは地に広がる血飛沫のみ。

血の海にぽつんと落ちている巻物を、歌舞伎のような姿の少年が拾う。巻物を手に、その少年――カンクロウは、赤毛の少年――我愛羅に声を掛けた。

「都合よく『天の書』じゃん。よしこのまま塔へ行くぞ」  
「……黙れ」

しかし兄である彼の言葉など聞く耳を持たず、我愛羅は表情を険しくさせる。

「まだ…物足りないんだよ…」  
そう言い放つと彼は傍の茂みに視線を投げた。

（ヤ…ヤバイ…気づかれたか…？）

視線の先、茂みに隠れているのは三人の木ノ葉の下忍——犬塚キバ・日向ヒナタ・油女シノ。

—？先である目的の場所にて身を顰めた彼らは戦いの様子を戦々恐々と窺っていた。そして目にしてしまったのだ。我愛羅が、たった一人で雨隠れの下忍三人を何の躊躇も無く殺したその様を。

砂の柩で捕らえた雨隠れの下忍を砂の圧力で押し潰す。潰された相手はまるで花火を打ち上げたように真っ赤な花を咲かせた。

今まさに起こった殺戮を見てしまった三人の木ノ葉の忍びは、どくどくと動悸する心臓の音を更に激しくさせる。

ゆっくりとこちらへ歩みを進める我愛羅。

彼から一刻も早く離れなければ、と脳裏では理解しつつも恐怖により硬直してしまった三人。

逃げなければ逃げなければと焦燥感ばかりが募る彼らの耳に、第三者の声が割って入ってきた。

「待て」

我愛羅の背後から涼しげな声が掛けられた。茂みからゆっくりと現れたのは、薄手の白い着物を着こなした白髪の少年。

「お前は……」

訝しげに眉根を寄せる我愛羅に代わり、彼の姉であるテマリが目を

丸くする。

音も無く静かに我愛羅達の傍までやって来た白髪の少年は音隠れの忍び——君麻呂だった。

「あまり無闇に殺戮するな。砂隠れ」

血の海と化しているこの場を見ても泰然自若な態度を崩さず、彼は我愛羅に咎めるような言葉を投げる。

「俺に…指図するな」

君麻呂の態度に気を悪くした我愛羅は目を細めた。静まり掛けている砂が再びザワザワと宙を舞い始める。

「おいおい、我愛羅。音はまずいって」

「我愛羅！」

ぎよつと身体を強張らせたカンクロウとテマリが慌てて諫めるが、我愛羅は射殺するような視線で彼を睨み続けた。茂みにて身を潜めている木の葉の下忍達は皆、今にも戦闘が始まりそうな成り行きに戦慄する。

そんな中で、君麻呂はやれやれといった風情で肩を竦めた。

「あの方の仰った通り、君は情緒不安定だね。呆れるよ」

「なんだと……」

「あの方…？」

熱り立つ弟に怯えながらも、カンクロウとテマリは君麻呂の言葉に疑問を抱く。彼らの眼には、その言葉を口にした際に君麻呂の表情が若干やわらかくなったかのように映った。けれど直後に彼はまるで能面のような感情の窺えない無表情で話し出す。

「君達には関係ない。巻物が揃ったのなら早く行け」

有無を言わせない君麻呂の言葉に、我愛羅の堪忍袋の緒が切れた。

「貴ツ様ア！！」

砂が君麻呂の足に絡みつく。それを見たカンクロウとテマリから血

の気が引いた。

「やめろ、我愛羅!!」

姉兄の制止の声を振り切り、我愛羅は先ほど雨隠れの下忍三人を殺したものと同じ忍術を発動させる。

「【砂縛枢】……—【砂瀑送葬】!!」

しかしながら真っ赤な花火や血の雨を降らせた雨隠れの時とは反して、今度は何も起こらなかった。砂の枢には誰も入っていなかったのだ。

「なに!？」

テマリとカンクロウ、そして術を発動させた本人までも驚くなか、涼しげな声が辺りに響く。

「僕には勝てないよ、砂瀑の我愛羅」

何時の間にか我愛羅の後ろに立っていた君麻呂が見下したように笑っていた。

「砂隠れ。さっさと行け。二度は言わない」

「我愛羅……行こう」

姉と兄に促され、我愛羅はしぶしぶ砂を瓢箪の中に戻す。憎々しげに君麻呂を睨みつけたまま、彼は塔に向かって歩き出した。

我愛羅達の後ろ姿を見送った君麻呂は傍の茂みに目を向ける。今までじつと息を潜めてきたキバ達は彼の気配に神経を尖らせた。人をあつさり殺した我愛羅の術を、これまたあつさりかわし平然とする君麻呂の存在に緊張する。

（砂隠れも…音隠れも…ヤバイ…）  
つうつとキバの顎を汗がつつたっていく。手にじわりと嫌な汗が滲んだ。

（どうするどうするどうする……っ）  
もしここで襲われたら殺されるかもしれない。そもそも戦いを見に行こうと言い出したのは自分である。自分が囷になって二人を逃がすか？けれど三人とも全滅する可能性もある…と恐怖に駆られるキバの葛藤は無駄に終わった。

なぜなら君麻呂は何をするでもなく、キバ達がいる茂みから離れて行ったからだ。完全に気配が消えた事に安堵した彼らはほっと息をつく。

「音隠れの奴に…助けられたな…」  
ぼそりとシノが呟いた。同じ心境なのか、キバとヒナタもその言葉に頷く。

「とにかく…何モンかは知らねえが、砂隠れと音隠れ……コイツらはヤバイな…」  
キバの切実な言葉が木立の中で空しく響いた。

試験開始から二日目の早朝。

大蛇丸と別れたナルトは生い茂る木々の中を上忍ましてや下忍には到底視界に捉えることの出来ない速度で走っていた。

（大蛇丸は確か……イタチの弟に呪印をつけたと言っていたな）  
先ほどのアンコと大蛇丸の会話から大蛇丸の意図を読んだナルトは、イタチの弟―うちはサスケがいる木ノ葉の第七班を探していた。

ナルトは今回大蛇丸が企てている計画の内容を聞いていない。  
当の大蛇丸もナルトがまさかこの計画に参加するとは思っていなかったらしい。

大蛇丸にとってナルトは、味方につけばかなりの戦力になるが同時に尤も敵に回したくない人物である。そのためあちらこちらに飛び回る彼とつかず離れずの態度をとっているのだ。計画もナルトが加われれば楽に事が進むのだが、計画の進み具合でいつ彼が敵に回るか読めないと判断した大蛇丸は計画の一切をナルトに知らせなかった。しかし計画の事を耳にしたナルトは大蛇丸に無断で君麻呂と多由也を携えて中忍試験に赴いた。

草忍に扮している大蛇丸が驚愕の表情を一瞬浮かべていたのを思い

出して、ナルトはくくつと喉の奥で笑う。思い出し笑いをしながらも走る速度が一向に衰えないのは流石といえるだろう。

「ん？」

ふと緑豊かな森には似つかわしくない赤が視界に入り、ナルトは速度を落とした。前方の幹を蹴って空中で後転し、巨木の枝に危うげなく着地する。

前方の木の枝上に誰かが倒れている。その人物の赤髪を見てナルトは思わず呟いた。

「多由也……？……いや違う」

下忍の少女が気絶している。なんとも曖昧な体勢で彼女は枝の端に倒れていた。少女の全体重を支えるには細い枝では難しいらしく、今にも折れそうである。

その時突風が吹いて少女の身体がグラリと傾いた。

「チッ」

ナルトは舌打ちすると少女の身体を抱き止めた。

（木ノ葉の忍びでも音忍でもないな……砂忍にも女がいたがあれよりは幼いか……）

考え事をしながら後ろ手にクナイを投げる。ザクリと何かが貫通する音が響いた。

（とりあえずコイツを下に降ろすか）

そう結論付けてナルトは少女を横抱きにしながら跳び降りる。

彼の立ち去った木の幹には、大きなムカデが一匹縫い付けられていた。

赤髪の少女——香燐は誰かに抱き止められた衝撃により意識を取り戻した。自身を抱える相手の存在を確認しようと薄く目を開ける。

そして彼女は恋に落ちた。

端正な顔立ちに、突き抜ける空に似た蒼い瞳。そしてまるでどこかの王子のように風に靡く美しい金髪。

自身を助けた男の、全てが眩しく感じられる。更に、背後から襲い掛かるうとしていた大ムカデを見向きもせずにくナイー本で仕留めた彼の手際に益々惚れた。

男の事を知りたいと、気絶しているふりをしてこの状況に甘んじる香燐。彼女はある意味、うちはサスケに盲目的な春野サクラと似通っていた。

## 五 砂上の少年（後書き）

我愛羅vs君麻呂の殺伐とした内容（vsというほどでもないですが）と香燐の恋……。えらい差でしたね、なぜこうなった。

香燐結構好きなキャラなんです。彼女、サクラとどことなく似てるな！と思うのは私だけ？ほら、サスケに盲目的なところとか盲目的なところとか、あと盲目的なところとか！……と言いつつ、この話ではナルトに惚れます。すみません。

今回はドス・ザク・キンら音忍vs木ノ葉の忍びですが、今回のように所々端折ってしまうかもしれません。

ですがなるべく原作を知らない方にも理解していただけるような書き方を努めますので、これからも「渦巻く滄海 紅き空」をよろしくお願い致します！

## 六 胡蝶の夢

軒並み背が高い木立。

その中でも一際巨大な木の根元で、桃色の髪の少女が三人の少年少女に追い詰められていた。辺りは土が掘り返され、激しい戦闘があったことが窺える。

おかつぱの少年が草の上で倒れており、少女の背後にある巨木の洞では金髪の少女と黒髪の少年が横たわっていた。

そんな彼らを庇うように、音忍の少年少女とただひとり対峙する少女。彼女の長かったはずの髪は無造作に短くなっており、桃糸が空を舞っていた。

顔を血濡れにしながらも凜として佇んでいる少女は木ノ葉の忍び

——春野サクラ。

同じ班である黒髪の少年——うちはサスケと金髪の少女——波風ナルの両者は、大蛇丸と名乗る人物に襲われて以来目が覚めない。

倒れた仲間を守ろうと一人決意を固めるサクラ。その矢先に彼女はドス・ザク・キンという音忍に襲われる。

防戦一方だったサクラの窮地を救ったのは、中忍試験前に告白してきたおかつぱの少年——ロック・リー。体術が普通の比でない彼はかなり接戦したが、ドスの音による攻撃により耳をやられ、振り出しに戻ってしまう。

けれど体を張って助けに来てくれたリーを、そして勿論サスケとナルを、サクラは守らねばと傷だらけで立ち上がった。

あれだけサスケのためにと伸ばしていた髪を自ら切って、少女は闘

う。

恋焦がれる少年のため、友達である少女のため、自分を好きだと言ってくれた仲間のため——大切な人を守るために。

我武者羅にサクラはザクの手に噛みつく。ひとえに彼女は倒れている仲間を守ろうという思いだけで闘っていた。

「このガキイ！」

手を噛みつかれたザクがサクラを殴り飛ばす。そのまま攻撃しようとした彼の眼前に、茂みから飛び出した一つの影が立ちはだかった。

「いの……」

「別にアンタを助けにきたわけじゃないけどね、サスケ君とナルが倒れてるもんだから」

言い訳染みた言葉をサクラに言い放つのは、同じ木ノ葉の忍び——山中いの。彼女はサクラを庇いながら猶も言い募った。

「それに倒れてるナルを見たシカマルが煩かったからね」

「うつせよ、いの！……とにかく息はしてるみてえだな」

いのの言葉に、何時の間にか巨木の洞でナルとサスケの無事を確認した少年——奈良シカマルが眉根を寄せながら答える。

そして二人に引き摺られるようにして茂みから飛び出してきたぽつちやりした少年——秋道チョウジ。

最初は渋っていたがザクの「デブ」という一言で怒りだした彼に続いて、いの・シカマル、木ノ葉の下忍第十班と音忍達の戦闘が切つて落とされた。

「ご苦労様。白、再不斬…」

人目につかないだろう薄暗い木陰で、突然声を掛けられた白と再不斬は内心飛び上がった。

「ナ、ナルト君。不意を突かないで下さいよ。ただでさえ気配が薄いのには本気で気配を消されたら全く気づけないじゃないですか」

少々批難の声を上げながら振り向いた白の眼前には、何時の間にかナルトが静かに佇んでいた。

「いや…ちよつと厄介な奴に会ってな…」

白の言葉に、ナルトは珍しく言葉を濁す。彼が気配を消していた理由はつい先ほどまである人物に追い駆けられていたからである。

木の枝から落ち掛けていた赤髪の少女をナルトは助けた。

おそらく巻物を手に入れようとして白か再不斬のどちらかが彼女を昏睡させたのだろう。けれどどうやら彼女の同班の二人は既に巻物を開いてしまったらしく何れも意識を失っているようだ。

規則に反し巻物の中身を見てしまった受験者は、巻物に書かれた口寄せの術式により現れた中忍によって気絶させられる仕組みになっている。

故に白もしくは再不斬は、開けられてしまった巻物を手に入れる事を諦め、少女を木の枝上に置いたまま去ったのではないかとナルトは推測した。

そこでナルトは、第二試験終了時刻まで気絶させられた彼らの傍にいても意味がないだろうと、彼女を『死の森』の入り口付近まで送り届けようとした。

すると気絶するふりをしていた少女がいきなり目を覚まし、ナルトに詰め寄ってきたのである。自分を香燐と名乗り、名前を教えるだのどこに住んでるのかだのと突然聞いてきた彼女にナルトはたじろいだ。

なぜ急にそんな事を聞いてくるのかナルトには解らない。しかしながらあまりにもしつこかったので名前だけ思わず教えてしまった。それでも勢いよく質問してくる彼女の意図が読めず、逃走を図るナルト。しかしながら感知タイプなのか、通常の者ならば読み取れないナルトの希薄な気配を少女は確実に把握して追い駆けてきた。そのためやむを得ず、こうして気配を消して振り切つて来たのだ。

（なんだっただ、一体……）

はあと内心溜息をついたナルトは、気持ちを入れ替えるように頭を振った。

「それで巻物は？」

「ああ。これだ」

その言葉に、再不斬が束にした『地の書』を投げて寄越した。同様に白も『天の書』をナルトに手渡す。

「悪いな」

ナルトは受け取った巻物の内から必要な分だけをするりと懐に納めた。

「それでこれからどうする？」

「…二人には木ノ葉の里の宿で待機しておいてほしい。この中忍試験には大蛇丸も参加しているんだ」

「な！？まさか三忍の一人…」

「そう、大蛇丸。あいつにはお前達の存在を知られたくないんだ。だから宿でも接触を避けるためになるべく変化しといてくれ。木ノ葉には前に再不斬が闘った畑力カシもいるからな…」

「カカシか…。もう一度勝負してえが…仕方ねえな」

次は負けねえと意気込む再不斬の様子に白は苦笑する。そして彼はナルトに一礼した。

「承知しました。もし何かお手伝い出来る事があればご連絡ください」

その言葉を最後に再不斬と白、両者の姿は即座に掻き消えた。

彼らの気配が『死の森』から遠退いたのを確認したナルトは、余った束の巻物を口寄せ用の巻物一本の中に納める。すると一抱えもあった『天』と『地』の巻物が瞬く間に一本の巻物に代わった。

それもまた懷に納めると、ナルトは再び気配を消して走りだした。

連携技でなかなかの奮闘を見せた『いのシカチヨウ』。そしてリーの同班である日向ネジとテンテンもリーを探しに来たらしく、倒れている彼を見て戦闘に加わろうとした。  
ちようどその時――。

「サクラ……お前をそんなにした奴は、誰だ？」

下忍とは思えないほどの殺気と禍々しい斑点のようなものを身に纏い、倒れていた少年がゆらりと立ち上がった。

「サ、サスケ……くん……？」

ゆったりとした緩慢な動きでサクラのほうを見た少年――サスケは笑う。待ちに待った恋焦がれる彼が目覚めたというのに、サクラは震えが止まらなかった。

サスケの首筋から伸びる斑模様が、まるで蛇のように彼の半身を覆い尽くしている。

サクラの短くなった髪を見て一瞬目を見開いたサスケはじろりと三人の音忍を睨みつけた。彼の瞳には、うちは一族の証拠である車輪の紋様が浮かび上がっている。

「誰だ？」

「俺だよ！」

サスケの尋常ではない殺気に気づいていないのか、音忍の一人――ザクが嘲笑いながら答えた。途端、射抜くような鋭い視線を向けるサスケ。

ありえないほど膨れ上がったサスケのチャクラに、思わず後ずさるドス。

相手の力量を測れる彼に対し、気づいていないザクが声を張り上げた。

「ドス！こんな死にぞこないにビビるこたあねえっ！――一気に片付け

てやるっ」

「よせ、ザク！わからないのか！？」

ドスの制止の声を振り切り、ザクは自身の持つ技の最大級の一撃を放つ。しかし限界までチャクラの込められたその攻撃はあっさりかわされ、何時の間にか背後に回り込められたサスケにザクは吹き飛ばされた。

更に一瞬でザクの両腕を掴んだサスケは、まるでちよつとしたお遊戯を楽しんでいるかのように歪な笑みを浮かべる。

「両腕が自慢らしいな、お前……」

ぐつと尋常ではない強さで腕を引っ張るサスケ。抗うザク。いよいよ腕をへし折ろうとサスケが力を込めたその時。

「ウチもまぜろよ、うちはサスケ」

赤い髪を棚引かせて降りて来た少女がサスケの脇腹を蹴り上げた。

突然の事にサスケの力が緩む。その隙にザクはわたわたとドスの許へ向かった。

「誰だ」

「一応コイツらと同じ音忍。つーかザク！てめえ相手の力も分かんねえのに喧嘩売ってんじゃねえよ、馬鹿」

ザク達を心底呆れたといった目で見遣る赤髪の少女―多由也は、サスケに向き直る。サスケの体を覆い尽くす斑模様に彼女は一瞬眉を顰めた。

「た、多由也……！？いつから……」

愕然とした風情で問い掛けるドスが無視して、多由也はぐつと腰を屈める。

こちらの手の内を見せるわけにはいかないため笛は使わない。

体術で十分だ、と戦闘体勢に入った多由也に、標的を定めたサスケがくくつと喉で笑う。

「ふん。コイツらよりは楽しめそうだな」

（器候補の力、見せてもらうぜ）

サスケの見下したような笑みに対し、思わずむっとする多由也。

ダンツと踏み込んだかと思うと、ドス達とは比べものにならない速度で多由也はサスケの懷に潜り込む。そのまま振るわれた彼女の拳をかるうじて避けたサスケは、起爆札つきクナイを投げつけた。そのクナイを軽く避けた多由也はサスケの顔面目掛けて回し蹴りを繰り出す。

サスケの投げたクナイは木の幹に突き刺さり、木片があたりに飛び散った。

回し蹴りをかわしたサスケは蹴ろうとしていた彼女の左足を逆に掴む。だが多由也は空中で反転し今度は右足でサスケの額を蹴りつけた。腕から逃れた左足でそのままサスケの足を払い、転倒し掛ける彼に向かって数枚の手裏剣を投げつける。足を崩しながらも【火遁・業火球の術】の印を結ぶサスケ。炎の球により手裏剣がパラパラ消炭となって落ちていく――。

一歩下がった場所でドス・ザク・キン是多由也とサスケの闘いを呆

然と眺めていた。速度も力も自分達とは違い過ぎる。同じくサスケの後方でもサクラ達がはらと二人の闘いを見ていた。

（互角か……いや、）

巻き添えを食らうまいと木の洞へ避難したシカマルは、倒れているナルの傍で冷静に状況を判断する。

先ほどサスケが投げた起爆札つきクナイで粉々に散らばった木片に、多由也が足をとられる。その機を逃さず、にやりと歪んだ笑みを浮かべたサスケは今までとは比べものにならない渾身の蹴りを放つ。

「くッ」

回避出来ないと悟った多由也は両腕を交差させ、防御の構えをとった。

その瞬間――。

多由也とサスケの間にひとつの人影が突如割り込んだ。速度も加わりキレのいい蹴りを見せるはずだったサスケの足は、その第三者にあっさりと掴まれている。

突然現れたその人物を視界に入れ、多由也は防御の構えをとったまま驚愕の表情を浮かべた。

「ナ、ナルト……」

「多由也、ご苦労様。でも木ノ葉には手を出さないでくれって言っただけだっただけ……？」

にこりと口許に笑みを浮かべる金髪の少年――ナルト。しかし彼の眼が笑っていない事に慌てた多由也はすぐさま「わ、悪い……っ」と謝った。その間、足を掴むナルトの手を外そうと躍起になるサスケ。しかしながら、女のように細いナルトの手はサスケがいくら暴れても微塵も動かない。

（な……なんだ、コイツ……どこにこんな力が……）  
内心驚愕するサスケの焦りを感じいたのか、「ああ、すまない」とナルトがぱつと彼の足から手を放す。足の自由を取り戻したサスケは一端距離をとるためナルトから離れた。

「多由也。ドス達を連れて下がって」

「わかったよ」

そう言われた多由也はナルトの前でのしおらしい態度とは一転して、「クソヤロ―ども、行くぞ!」とドス達を蔑みまで引き摺って行く。「行かせるかよっ!」

その四人目掛けてサスケが再び印を結ぶ。体を這う斑模様が濃くなるのと相俟って彼のチャクラが膨れ上がった。

「【火遁・業火球の術】!!」

かなりのチャクラを練り込んだ火球は等身大の大きさにまで巨大化する。ザクや多由也に放った時とは大きさも威力も桁違いの炎の球。それは確実に多由也達へ命中するはずだった。

しかし、火球はふつと掻き消える。何時の間にか多由也達の前に立っていたナルトによって。

「なッ！！??」

まるで蠅を払いのけるような仕草で、人ひとり呑み込むほどの巨大な火球は消されてしまった。その際空間が若干歪んだが、ほんの一瞬间の事だったので誰も気に留めなかった。

不可解なその出来事に、サスケは愕然とする。サスケと同じく、シカマル達木ノ葉の忍び・ドス達でさえも今の謎の現象に動揺していた。

人……いや大人ひとり優に包み込めるほどの巨大な火球をか細い腕一本で払いのけ、同時に掻き消したのだ。この目の前の少年は。

「……てめえ、何者だ？」

「紹介しなかったか？一次試験の前に」

こてりと首を傾げるナルトに対して、サスケは引き攣った表情を浮かべる。

「ふざけるな！！」

「よせ、サスケ！」

シカマルの諫める声を見視し、サスケは凄まじい速度で駆け出す。そして思い切りナルトに向かって拳を振るった。

パンッ

何かが弾けるような音がその場に響く。そしてその音と共に一瞬でサスケの体は吹き飛ばされた。

「ガハッ」

吹き飛ばされ、背中を巨木の幹にてしこたま打った彼は意識を失う。一瞬の出来事に、その場の面々は皆言葉が出なかった。

何が起こったのか全くわからなかった。ナルトはただ静かに立っているだけで何もしていない様子だ。それにも拘らずサスケは吹き飛ばされた。

唯一冷静にその戦闘を眺めていたネジが、ピキキ…と白眼を見開く。百m先を見通し、体内のチャクラでさえも見切るその特殊な眼を持つ彼はナルトを凝視した。

（なんだ、アレは…）

白眼はチャクラの流れる経絡系や点穴をも見抜ける瞳術である。しかしその眼を持ってしてもナルトがサスケを吹き飛ばした原因を探る事は出来なかった。

敵の攻撃を弾くには日向宗家に伝わる【八卦掌回天】くらいしか思いつかない。だがその術を使うには全身からチャクラを出しながら、自ら回転しなければならぬ。だがナルトはただ立っているだけで何かした気配すら感じなかった。

（一体…何かカラクリでもあるのか…？）

白眼を未だ使い続けたまま、ネジは目前の少年を注視する。ネジ含む木ノ葉の忍びの視線を一身に受けているナルトは、多由也に何かを渡しているようだった。受け取った多由也は、未だ呆けているドス達の頭を引っ叩いて茂みの向こう側へと去って行った。

ネジ以外の啞然としていた面々は、サクラの悲痛な声ではつと我に返った。

「サスケくん！」

ずるずると幹に体を横たえるサスケの許にサクラが一目散に駆けて行く。

「心配ない、気絶してるだけだ」

ナルトの一言で木ノ葉の忍びは皆ビクリと肩を震わせた。その様子を苦笑しながら彼はサクラのほうへ視線を向ける。

「その、桃色の髪の子」

「えっ、あ……」

当惑するサクラを安心させようと、ナルトは人の良さそうな笑みを浮かべた。

「今気を失っちゃった黒髪の子に伝えてくれるか？その“呪印”は使わないほうがいいって」

「じゅ、呪印？」

「さっき彼の体に纏わりついてた斑模様の事だ。今は意識がないから引いてるけど。呪印は、力を与えてくれるけどそのぶん体はボロボロになって下手したら……死ぬよ？」

「……」

にこにこ笑顔で「死ぬ」という単語を口にするナルト。その様は酷くアンバランスで、彼の笑顔をサクラは恐ろしく感じた。口を噤んでしまったサクラに代わって、いのが問い掛ける。

「なんでそんなこと教えるのよ。大体あんた、さっきの音忍の仲間でしょ」

「……」

答えの代わりに肩を竦めたナルトは辺りを見渡した。そして倒れて

いるリーの姿に眉を顰めた彼は、おもむろにリーの耳元で手を翳す。  
「リーに何を…っ」

リーを庇うため慌てて飛び出したネジとテンテンは目を見張った。  
満身創痍だったリーが急にガバリと身を起こしたからだ。

「あれ？」

「耳、聞こえるか？」

「は、はい！聞こえます」

こくこくと頷くリーを確認し立ち上がったナルトは、警戒するネジとテンテンに笑顔を向ける。あまりにも邪気の無い笑顔に、彼らは毒気を抜かれた。

すいっとナルトの瞳がある一点を見据える。そこには未だ倒れているナルと庇うようにして傍にいるシカマルの姿。

次にサスケとサクラに視線を向け、ふっと笑ったナルトは一本の巻物を取り出した。

（なんだ…？）

ナルトの行動を不審に思う木ノ葉の忍び達。彼は取り出した巻物をサツと広げ、瞬時になんらかの印を結ぶ。途端、その巻物からどさどさと数本の巻物が白煙と共に落ちてきた。

訝しげな表情でそれを見ていたサクラ達は息を呑む。落ちて来た数本の巻物は、今正に自分達が求めている『天』と『地』の書だったのだから。それもこの場にいるチーム全員が合格出来るほどの数。

「あげる」

次いでそう口にしたナルトの一言に、サクラ達木ノ葉の忍びはまずまず動転する。

「ちょ、ちよっと待ってよ。どういうことお？」

チョウジまでもが驚いて声を荒げるが、ナルトは涼しげな顔で「俺達のチームの分は持つてるから」と答えた。

「そうじゃなくて！」

見当違いの答えを返すナルトに、いのが発狂したように髪を掻き毟りながら怒鳴る。何れも呆氣にとられる木ノ葉の忍びの中で、ただ一人沈黙していたシカマルが呟いた。

「なにか…目的があるのか？」

独り言のようなその小声はナルトの耳にしっかりと届いたらしく、彼は一瞬目を細める。

「……目的は君達に勝ち進んでもらう事かな」

「はあ？」

不可解な答えに再び困惑するサクラ達をよそに、シカマルは探るような目でナルトをじっと見つめていた。

「まあ、さっきの仲間を見逃してくれた手打ち料だと思ってくれ」  
そう言つてナルトはくるりと背中を向ける。

忍びは易々と敵に背中を向けてはならない。にも拘らずこんな簡単に背中を見せるという事は、襲われないと確信しているからかそれとも絶対的な自信故か。

ナルトと対話したのは僅かな時間だったが既にその場の面々は、無防備に見える彼の背中に襲い掛かれれば逆に襲つたほうの命が危ないだろうと満場一致の結論を内心出していた。

踵を返し掛けたナルトは何かを思い出したように一度足を止める。

そして肩越しに振り返ると、「シカマル。ナルに頑張つてと伝えておいて」と名指しで声を掛けた。

いきなり自分の名前を呼ばれたシカマルが声を発する間も無く、「じゃあね」と一言残しナルトの姿は一瞬にして掻き消える。

夢か現かわからぬまま、木ノ葉の忍び達は無造作に散らばった数本の巻物を見つめた。その巻物のみが金髪の不思議な少年——ナルトが今まで存在していた証拠であった。

## 七 陰謀詭計（前書き）

「渦巻く滄海 紅き空」第七話です。  
場面がころころ変わるので読みにくいかもしれませんが、お付き合い  
をお願い致します。

## 七 陰謀詭計

第二試験開始から四日目の朝。

試験の終着点である塔の傍で一人ぼつんと佇んでいた少年は、密林の枝葉の間から洩れてくる陽光に目を細めた。

少年——君麻呂は、自身が敬愛するナルトの「我愛羅を見張れ」という言い付けに従って行動していた。しかしながらその我愛羅は、試験開始後たつた97分で塔に辿り着いてしまったため、それからずっと塔の傍で同班の二人を待っているのである。

木漏れ日の下で、彼は自然と自分にとつての太陽を思い浮かべた。

（ナルト様はどうしているだろう…）

彼は心底崇拝するうずまきナルトに思いを馳せ、過去の記憶へ意識を飛ばした。

君麻呂の出生は、血継限界『屍骨脈』という特殊な能力をもつかぐや一族。

その一族は君麻呂が幼い頃、霧隠れの里に戦いを挑んで滅んでしまった。

かぐや一族最後の一人となった君麻呂。そんな彼を拾ったのは、他でもないうずまきナルトだった。

身寄りの無い君麻呂を兄弟、または家族のように扱ったナルトを、

彼は自然と神の如く崇めるようになった。

ナルト本人は、いつも自分は神ではないと苦笑する。神なんていない、といっ所残酷な言葉で君麻呂を諭した。

だが君麻呂はナルトと出会った頃からずっと彼は神だと信じて疑わなかった。

なぜなら君麻呂より年下でありながら、ナルトは博識で強かった。

そんな彼を人と結び付ける事が君麻呂にはどうしても出来なかったのだ。

ある程度の力を身につけた君麻呂をナルトは音の里長―大蛇丸に預けた。

それから君麻呂は、ナルト以外の子ども…多由也達、音の四人衆といった同年代の人間と接した。しかし君麻呂はナルトさえいれば他は何もいらなかった。

勿論大蛇丸の事は尊敬している。音の四人衆も実力は認めている。けれど君麻呂の心は常に、うずまきナルトの存在が占めていた。

何か気配を感じたので君麻呂はふっとそちらに視線を向ける。すると、目の前を白い蝶が横切っていった。その白に、君麻呂の脳内でナルトとは正反対の位置にいる人物の姿が思い出される。心酔しているナルトとは違い嫌悪しているその存在。

ナルトとの思い出に水を差され、君麻呂は苦々しく唇を噛んだ。

君麻呂には決して相容れぬ存在がいる。

それは今の蝶と同じ色の名を持つ――白という少年だ。

かぐや一族とはまた違う血継限界をもつ彼は、己同様ナルトが拾った人間だった。

許せなかった。己だけではなく、彼の庇護を受けた存在に。似たような境遇というのも酷く癢に触った。

向こうも同じ感情を抱いたらしく、顔を合わせるたびに射殺するような強い眼光を向けてくる。尤も彼はすぐナルトと同じ抜け忍の再不斬という男に預けられた。聞くところによると再不斬もまた、危ないところをナルトに救われたという。

再不斬はまだいい。問題は白のほうだ。ナルトに向ける白の視線は

君麻呂がナルトに向ける視線と何等変わらなかった。おそらく己と同じくらい、彼はナルトを心底敬愛し崇めている。いつか己の立ち位置を白にとられるのではないかと、ナルトが白と共に任務へ赴くたび君麻呂は懸想を抱いていた。

「なにやってんだ、テメーはよ」

突然頭上から声を掛けられた君麻呂は回想を止める。追憶にふけていた彼を現実に取り戻した声の持ち主は、苦々しい顔つきで君麻呂の前に現れた。

「ぼーとしやがって。試験中だつて解つてんのか、この馬鹿」

ぺつと今にも唾を吐き掛けるような物言いをする少女―多由也。その物言いに、一気に不快な気分となった君麻呂は彼女を冷やかな目で見た。

「君が遅すぎるからだろう。おかげで暇だったよ。なかなか来ないからどこでのたれ死んでるのかと…」

「ふざけんなあ！ウチはナルトの言う通りにしてただけだ！！そっちこそサボってたんじゃないのか！？」

「僕がナルト様の命令を蔑ろにするわけないだろう。あと耳元でギヤーギヤー叫ばないでくれないか。鳥の金切り声と間違えて猛獣が寄つてきそうだ」

「こ、このクソヤロー！！ギッタギッタに痛めつけてやんぞ、ああ！？」

「同意見だ。君とは一度決着をつけないといけないようだ」

一触即発。塔の前で、仲間であるはずの二人は対峙する。互いに睨み合い、彼らは今にも攻撃の構えをとろうとした。

「遅くなってすまない……………どうした？」

その時二人の間に第三者の声が割って入ってきた。途端、その場の

緊迫した空気が一瞬で蹴散らされる。

「ナルト！」 「ナルト様！」

先ほどの顰め面はどこへ行ったのか。多由也と君麻呂は朗らかな表情で、突然現れた少年―ナルトに近づいた。

「今まで何やってたんだよ」

だがすぐ怪訝な顔をしてナルトに尋ねる多由也。その問いにナルトは軽く肩を竦める。

「いや、うちはサスケが無事試験を突破できるよう助力してくれてカブトに頼んできただけだよ。巻物目当てに塔の傍で待ち伏せる者がいるだろうから、念のためにな」

「大蛇丸様の器候補ですか…。確かに第二試験くらいは受かってもらわないと困りますからね」

ナルトの答えに君麻呂が相槌を打った。

「君麻呂は？砂の忍びの見張り、頼んできたと思うけど」

「彼らは一日目の16時9分にこの塔に着きましたよ。おかげで今まで暇でした」

「ふーん、第二試験開始から97分後か…。木ノ葉の忍びよりはやるじゃねーか」

少々感心したように呟く多由也の隣で、ナルトは君麻呂に謝礼の言葉を述べる。

「そうか…。ありがとう、君麻呂。それと、次の試験からの事だが…」

「重々承知しています」

ナルトの命令が生き甲斐だと言うように、満面に喜悦の色を浮かべる君麻呂。二人の会話を面白くなさそうに睨みつけていた多由也は、ナルトに声を掛けられた途端得意気な表情を浮かべた。

「多由也もありがと。巻物、持ってる？」

「当然だ」

木ノ葉忍びとの揉め事の際、ナルトは自分達の分とドス達の分の巻物を多由也に渡しておいたのだ。懐から取り出した『天地』の巻物

二本をこれ見よがしに掲げる多由也に対し、今度は君麻呂がぎろりと彼女を睨みつけた。

「それでドス達は？」

「今頃塔に向かってんじゃねえの？巻物揃えてやったんだ、ここで脱落とかしやがったらぶっ殺す」

不本意ながら巻物をくれてやったんだという態度で、ふんつと鼻を鳴らす多由也。

そんな彼女の様子に苦笑しながら、ナルトは二人を塔の入り口に促した。

「それじゃ、塔に入ろうか」

中忍第二試験の終着点である塔の内部。

そこでは木ノ葉の里長である三代目火影が、第二試験の担当試験官――みたらしアンの呪印に処置を施していた。

「どうじゃ？呪印はまだ痛むか？」

「いえ…おかげでだいぶ良くなりました」

大蛇丸と対峙したために活性化した呪印。今は鎮静しているようで、アンの顔色は先ほどより幾分かマシになっていた。

「それにしても…大蛇丸って木ノ葉伝説の、あの三忍の内の一人ですよね。確か暗部ですら手を出せなかったビンゴブックS級の抜け

忍でしょ。既に死んだとも聞いていましたが…」

「何故今更この里に…」

アンコの両隣で控えていた中忍二人が逡巡しながら口を開く。彼らの言葉を聞いていたアンコの脳裏に、大蛇丸と対峙した時の光景が浮かび上がった。

「奴は呪印をプレゼントしたと言っていました。誰かは答えませんでした。欲しい子がいると…」

「うむ…。おそらく秘伝術を持つ名家の誰か…だが最も可能性が高いのはサスケじゃな」

アンコの言葉に火影は自らの推測を語る。ふう〜と煙管から吸い込んだ煙を彼はゆっくり吐き出した。

「あ奴はうちの血を憧憬する節があった。それと部下集めというのも強ち嘘ではなかつた」

「しかし…それでは大蛇丸と対話していた人物は…？」

アンコの問いに、火影はどこか遠くを眺める。感慨にふける彼の耳に、モニターのつく音が届いた。

<アンコ様！第二の試験通過者、総勢二十四名を確認。中忍試験規定により第三の試験は五年ぶりに予選を予定致します。第二の試験終了です>

ブラウン管ごしにそう告げる試験官。その報告を耳にして火影は再び煙管を蒸かした。

「…とりあえず試験はこのまま続行する。あ奴の動きを見ながらじやがな。それに大蛇丸と話していた者の事もあるしの」

ふう〜と煙管から吸い込んだ煙をゆっくり吐き出す。立ち上る白煙を目で追っていた火影は、ふと思ひ出したように書類を数枚取り出した。

「ところで少し気になる点があるんじゃないが、これを見てくれんか？」

一通り目を通したであろう受験者の名や写真が載っている中忍試験登録書の三枚を唐突に差し出す火影。その三枚に載っている写真は、今現在音忍として試験に参加している三人の少年少女だった。

「ほら、紅い髪の男の子じゃよ」

「いえ女の子なのですが男の子は……」

（火影様もそろそろボケてきたのかしら……）

受け取った書類を訝しげに眺めていたアニコは、内心火影が耄碌したのではないかと懸念を抱く。

彼女が手にしている書類の一枚には、「うずまきナルト」と書かれていた。

アニコが眺めている書類……それに載っている名前の持ち主達。

彼らは、今正に巻物に書かれた口寄せの術にて現れた木ノ葉の中忍に第二試験合格を言い渡されていた。

君麻呂と多由也に「すぐ行く」と声を掛け、その場に一人残ったナルトは壁を見つめる。そこには大きな額が掲げられていた。

「——」「天」無くば智を識り機に備え。「地」無くば野を駆け利を求めん。天地双書を開かば危道は正道に帰す。これ即ち「人」の極意……導く者なり——いい言葉だ」

虫食いになっている箇所をあっさりと当てながら、ナルトは小声で読み上げた。

知識と体力の二つを兼ね備えればどんな危険な任務も正道…霸道とも言える安全な任務に成り得る……その意味が書かれた額を感慨深げに彼は見上げた。

（だがいくら知識と力があっても決定的なものがなければ意味を成さない…）

一瞬ナルトは目を伏せる。尤もそれはほんの数秒の事で、次に顔を上げた彼はいつもの表情で口元に弧を描いた。だがそれは、どこか達観したような笑みだった。

第二試験終了まで残り僅か。

塔の前では、ギリギリだが無事辿り着いた者達が安堵の息を吐き出していた。

ナル・サスケ・サクラの木ノ葉第七班と同行していた薬師カブトは、彼らに別れを告げると塔の中へ入って行く。

「収穫は？」

「ああ。予想以上ですよ…」

突然声を掛けられても悠然とした態度でカブトはその声に答えた。そして七班と同行していた際の出来事を思い出したのか、彼は僅かに口角を上げる。

「第二の試験での彼のデータは全て書き込んでおきましたよ…。コレ、いるでしょ？」

指に挟んだ認識札をすつと手渡す。それを受け取った相手——大蛇

丸は再度問うた。

「——で？どうだったの？」

「やはり気になるようですね。大蛇丸様」

「お前の意見を聞きたいのよ。音隠れのスパイとしてのね」

双眸を閉じたカブトは、七班を待ち伏せしていた敵に傷つけられた鼻の傷をすつと指でなぞる。なぞった後には最初から傷など無かったような目鼻立ちの整った顔が笑みを浮かべていた。

「それは必要ないでしょう。全てをお決めになるのは貴方なんですから」

「お前のその賢さ、私のお気に入り…ご苦労」

すぐさま音も無く消える大蛇丸。彼が完全に消えたのを確認し、カブトは眼鏡のブリッジを押し上げた。

（そう…音隠れの里ではね…）

印を組んだ巨大な手の石像がどどんと鎮座する闘技場。

そこには、『死の森』を突破及び第二試験を通過した下忍達が待機していた。

下忍の中でも周囲からの注視を一身に浴びているのは、音忍のナルトと君麻呂。

その状況下にて、わざとナルトは君麻呂に話し掛ける。周囲に悟られぬよう会話しているふりを装いながら、ナルトから手渡された文書を君麻呂は素早く懐に納めた。

「砂の人柱力がお前を睨んでいる理由は大体想像つくが、木ノ葉の忍びにも何かやったのか？君麻呂」

「それを言うならナルト様もでしょう。木ノ葉のほとんどの下忍が貴方を警戒している」

我愛羅達砂の忍びに加え、キバ・ヒナタ・シノ木ノ葉の下忍第八班から鋭い眼光を向けられている君麻呂が小声で答える。ナルトもまた、木ノ葉の下忍達からの警戒の色を孕んだ視線を柳に風と受け流していた。

「まずは第二の試験、通過おめでとう！」

下忍達に労いの言葉を真っ先に掛けたのは、中忍第二試験の試験官であるみたらしアニコ。彼女は試験を通過した人数の多さに、内心今年は優秀な下忍が豊富だと驚嘆していた。

「それではこれから火影様より、第三の試験の説明がある。各自、心して聞くように！——では火影様、お願いします」

「うむ」

アニコに促され鷹揚に頷いた御老体——三代目火影は一歩足を踏み出した。

「ごほん！——これより始める第三の試験。その説明の前にまず一つだけ、はっきりお前達に告げておきたい事がある……この試験の真の目的についてじゃ」

火影の言葉に、ナルト以外の下忍は皆怪訝な顔をする。三代目火影は一度、その場に並ぶ下忍達を見渡した。その際彼の視界には当然ナルトの姿も映ったが、特に何も気にせずに大きく声を張り上げる。「なぜ同盟国同士が試験を合同で行うのか？ 同盟国同士の友好忍びのレベルを高めあう……その本当の意味を履き違えてもらっては困る。この試験は言わば……」

そこで言葉を切った火影は煙管から白煙を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。まるで試験に純粋な思いで挑んだ子ども達の白い心を、全て煙として消散させるように。

「同盟国間の戦いの縮図なのだ！」

動揺する下忍に構わず、火影は淡々と言葉を紡ぐ。

「歴史を紐解けば、今の同盟国とは即ち、かつて勢力を競い合い、争い続けた同盟国同士。その国々は互いに無駄な戦力の潰し合いを避けるためにあえて選んだ戦いの場——それがこの中忍選抜試験のそもそもの始まりなのじゃ」

三代目火影の話を真剣に聞いている下忍の中で、ナルトだけは火影ではなく彼の背後に注意を向けていた。

「ドス達、合格しているな」

視界の端にてドス・ザク・キンの姿を認めた君麻呂の呟きに、多由也がふんと鼻を鳴らす。

「当たり前だろ。ナルトがわざわざあいつらの分まで巻物揃えたんだぞ」

これで『死の森』でのたれ死んでたただの馬鹿だろ、と蔑んだ眼でドス達を見遣る多由也。彼女の言葉を耳に挟みながらもナルトの視線はずっと、試験官や木ノ葉の下忍担当上忍に交ざっている音の額当てをした男に注がれていた。

「……この第三試験には、我ら忍びに仕事の依頼をすべき諸国の大名や著名の人物が招待客として大勢招かれる。そして各国の隠れ里を持つ大名や忍び頭がお前達の戦いを見ることになる。国力の差が歴然となれば強国には仕事の依頼が殺到する。弱小国と見做されれば逆に依頼は減少する……と同時に隣国各国に対し我が里はこれだけの戦力を育て有しているという脅威、つまり外交的圧力を掛けることも出来る」

火影の言葉に納得出来ない下忍が声を荒げるが、彼はきっぱりと言いつ放った。

「国の力は里の力。里の力は忍びの力。そして忍びの本当の力とは、命懸けの戦いの中でしか生まれてこぬ！……命を削り戦うことでバランスを保ってきた慣習、これこそが忍びの世界の友好。己の夢と里の威信を懸けた命懸けの戦いのじゃ！」

話を聞いた下忍達の間に緊張が張り詰める。

ナルト以外に泰然自若な態度をとっていた我愛羅がぼそりと口を開いた。

「なんだっていい……。それより早くその命懸けの試験ってヤツの内容を聞かせろ」

そう話しながら彼は君麻呂に向かって射抜くような眼光を投げつける。我愛羅の殺伐とした雰囲気になく怯まず、火影は再び語り出した。

「うむ。ではこれより第三の試験の説明をしたいところなのじゃが、実はの……」

火影が言い淀んだ直後、彼の眼前に男が一人現れる。火影に向かって膝をつき頭を垂れるその男は、審判を仰せつかった月光ハヤテ。

第三試験の前に予選をする、と話す彼の顔色は病人と見間違えるほど青白い。ごほごほと咳き込みながらハヤテは予選についての説明を語り出した。

「今回は第一・第二の試験が甘かったせいかな……少々人数が残りすぎ

てしましましてね。中忍試験規定に則り予選を行い…第三の試験進出者を減らす必要があるんです。先ほどの火影様のお話にもあったように、第三の試験にはたくさんのゲストがいらっしゃいますから…ダラダラと試合は出来ず、時間も限られてくるんですね」

突然試験が一つ増えた事に、目に見えて意気消沈するサクラ。彼女は同様沈み込んだり、内心理不尽だと憤る下忍達の顔触れをハヤテは何気なく眺めた。

「え…というわけで、体調の優れない方…ごほごほ。これまでの説明で止めたくなった方、今すぐ申し出てください。これからすぐに予選が始まりますので…言い忘れていましたが、これからは個人戦ですからね。自分自身の判断でご自由に手を上げて辞退してください」

予選棄権を促すハヤテの言葉を耳にして、サクラは躊躇する。彼女は首筋の痣…ナルトが言っていた”呪印”にて苦しむサスケの姿を見たくなかった。

サスケの身を案じ、”呪印”の事を上忍達に報告しようと手を挙げ掛けるサクラ。彼女を引き止めようとするサスケ。

揉める木ノ葉の下忍第七班の様子から察したアンコや三代目火影は、大蛇丸の狙いがうちはサスケだと確信した。

同じ呪印を施されているアンコは、サスケを今すぐ辞退させるべきと火影に告げる。対して七班の担当上忍である畑カシは、サスケはそう簡単に辞退しないとやんわり反論した。

これらのサスケを巡ってのごたごたは、サクラ以外の者が手を挙げた事で些か中断する。

「あの——僕は止めときます」 「……………」

予選辞退を申し出たのは木ノ葉の忍びである薬師カブトと、音の忍  
び——君麻呂だった。

## 七 陰謀詭計（後書き）

今回君麻呂の過去が若干明らかになりましたね。「ナルトのほうが年下じゃねーか」というツツコミは無しでお願いします。後に必ず細かい話を書きますんで…。君麻呂の大蛇丸に対する依存や崇拜が全部ナルトに代わったという事を理解していただけるような内容を書こうと努めました。上手く伝わっていたら幸いです。

あと、かぐや一族と戦った霧隠れの中に、アニメでは白と再不斬の姿もあつたらしいですが、この話は原作優先なのでいなかった事にしてください。お願いします。

## 八 写輪眼

「カ、カブトさん…!？」

待ち伏せしていた雨隠れの下忍から巻物を守るのに、木ノ葉の第七班はカブトに手助けしてもらった。だからこそ彼らはカブトの辞退通告に愕然とする。なかでも彼に親しみを覚えていた波風ナルは動揺して、カブトになぜ辞退するのだと問い質していた。

一方、無愛想に手を挙げている君麻呂を憤怒の形相で睨みつける我愛羅。二次試験にて彼は、君麻呂に鼻の先であしらわれた事をずっと根に持っていた。必ず報復してやると意気込んでいた矢先に、当の本人が突然辞退を申し出たのである。

(馬鹿にしているのか…っ)

ざわりと我愛羅の髪が怒りで逆立つ。その怒りに呼応するかの如く、床全体の砂が小刻みに動き出した。砂の粒子は、闘技場に佇む者達の足をさあつと撫で上げる。

「が、我愛羅？」

我愛羅の様子に逸早く気づいたテマリとカンクロウが恐々と話し掛けるが、彼はじつと君麻呂に鋭い眼光を投げ続けていた。

カブトに向けられる視線が驚愕と憂慮が入れ混じったものであるのに反し、君麻呂に向けられるものは嚇怒を孕む殺気。

赤丸が脅え出した事からその殺気に気づいたキバもまた、我愛羅の尋常ではない様子にぎよつと身体を強張らせる。

(おいおいおい…っ!?まさかこんなところでおっぱじめるんじゃないだろーな…っ)

雨隠れの下忍をあつさり殺したあの惨状を思い出して、キバは我愛

羅から距離をとろうとゆつくり後ずさった。

「おい」

周囲の脅えなど物ともせず、我愛羅は君麻呂に声を掛ける。

カブトを引き止めようとするナルの会話とは一転し、彼と君麻呂の間には絶対零度の空気が流れていた。

「貴様、どういふつもりだ？」

「…なにか用かい？」

「ふざけるな…。なぜ辞退するのかと聞いているんだ」

一言一言我愛羅が話すたびに、彼から濃厚な殺気が溢れ出る。その殺気の中てられたテマリ・カンクウらに加え傍の下忍が皆震え慄いているのに対し、突き刺さるような殺気を直に受けている君麻呂は涼しげな顔で肩を竦めてみせた。

「僕はこう見えて病気持ちでね。これ以上の戦闘は身体に負担が掛かると判断したまでだ」

「病気だと…？嘘を言うな」

「残念ながら嘘じゃないよ。それに、君にどうこう言われる筋合いはない」

つき放すような君麻呂の物言いに、我愛羅の殺気は益々膨れ上がる。今にも殺し合いが始まるのではないかと戦慄する傍の下忍達は、無言で二人の会話を窺っていた。

「えーと木ノ葉の薬師カブト君と音の君麻呂君ですね…。では下がつていいですよ。他に辞退者はいませんか？」

ハヤテの許可が下りたため、君麻呂は闘技場の出口へ足を向ける。

その際通り過ぎ様に彼は我愛羅に小声でそつと囁いた。

「強い者と戦いたいのなら予選を受けるといい。言っておくけど僕の同班——うずまきナルトは、僕なんか足下にも及ばない強者だよ」

独り言のようなその小声は我愛羅の耳にしつかり届く。一瞬目を見開いた彼は、視線の先を金髪の少年——うずまきナルトに向けた。

君麻呂への殺気が、ずっと前方を見据えているナルトの背中に移行する。殺気に気づいたのか、ふと背後を振り返ったナルトは我愛羅に対して笑みを浮かべた。

薬師カブト・君麻呂が辞退し、二十二人となった下忍達はハヤテの話をまだかまだかと待っていた。  
ハヤテはサスケを辞退させるか否かと揉める背後の会話に耳を傾ける。

「——大蛇丸の言ったことも気にかかる。サスケはこのままやらせ、様子を見ていく」

そう決断を下す火影にアノコは反論しようと口を開くが、火影の次の言葉に渋々引き下がった。

「但し呪印が開き、力が少しでも暴走したら止めに入れ」

どうやらサスケは予選続行という結論に達したと把握したハヤテは、ごほんと咳をして下忍達に目を向けた。

「え——ではこれより予選を始めますね。これからの予選は一对一の個人戦、つまり実戦形式の対戦とさせていただきます。二十二名となったので合計十一回戦行い……その勝者が第三の試験に進出しますね。ルールは一切無しです。どちらか一方が死ぬか倒れるか……或いは負けを認めるまで戦ってもらいます。え——死にたくなければ、すぐ負けを認めてくださいね。但し、勝負がはっきりしたと

私が判断した場合…ごほっ」

一度咳き込んで、彼は下忍達の顔触れを確認するように見遣った。

「…無闇に死体を増やしたくないので止めに入ったりなんかします。これから君達の命運を握るのは…」

ちらりとハヤテの視線を受けたアンコが指示を送ると、闘技場壁の一角が動き出す。

その中には回転式の巨大なパネルが埋め込まれていた。

「これですね…この電光掲示板に、一回戦ごとランダムに選出された対戦者の名前を二名ずつ表示します。では早速ですが、第一回戦の二名を発表します」

ハヤテがそう説明し終わると同時に、電光掲示板に名前が無作為に表示され始める。下忍達が息を呑んで見守る中、掲示板には二名の名前が選出された。

——『うちはサスケ』VS『あかどうヨロイ』——

「では掲示板に示された二名、前へ」

ゆっくり受験者たる下忍達の前に出た二人——うちはサスケと赤胴ヨロイは対峙する。

（ふっ、いきなりとはな…）

激痛が走る首筋の呪印に耐えながら、サスケは僅かに口角を上げた。

「第一回戦対戦者、赤胴ヨロイ・うちはサスケに決定。異存はありません」

ハヤテの言葉にすぐさま了承を返す二人。その光景を見て、音の額当てをしている男が興味津々といった様子で目を細める。

「えーではこれから第一回戦を開始しますね、ごほっ。対戦者二名

を除く皆さん方は上のほうに移動してください」

そう促すハヤテの言葉に従い、サスケとヨロイを残してその場の下忍は二階に続く階段に向かって歩き出す。階段の上には、闘技場の内部をぐるりと囲んでいる手摺を備えた観覧席があるのだ。

ナルトに従い階段のほうへ足を運ぼうとしていた多由也は、自分の後ろをついて来る男に気づくと顔を顰めた。

「なんだ、アンタ…」

我慢出来なくなった多由也が真っ先にその男に声を掛ける。その男の容姿はありきたりで、加えて地味な顔立ちをしている。よく言えば穏和そうな人、悪く言えば影が薄い大人だ。

「全く…君は大人にもそんな口の利き方するのかい？呆れるよ」

多由也の言葉に、その男は穏和そうな人柄とは裏腹に毒舌をふるった。そのよく聞く物言いを耳にして、多由也は思わず声を荒げる。

「お前…っ！？君…」

「多由也。落ちつけ」

だが咄嗟にナルトによって口を押さえられたため、彼女は声を上げずに終えた。

「俺が頼んだんだよ。俺達の班の担当上忍は架空の人物写真で登録したからな」

「試験についての説明前に、ナルト様から写真が載った文書を頂いたんだよ」

担当上忍を振舞っているこの男は、多由也の察しの通り君麻呂が変化したものである。ナルトが手渡した文書に載る写真の男に成り済ましているのだ。

落ち着きを取り戻した多由也から手を放し、ナルトは二人を促して階段を上げる。

傍の下忍達に自分達の会話が聞き取れないであろう場所まで移動すると、多由也は息急き切って問い掛けた。

「じゃあ予選を辞退したのはこの男に変化するためかよ？」

「いいや…それ以外にも理由はある」

多由也の問いに、君麻呂ではなくナルトが静かに答えた。

「君麻呂が病気なのは事実だ。そして…病気でなければ大蛇丸の器となっていた事もまた事実だ」

「大蛇丸様がココにいるってのかよ!？」

「そこにいるだろう。ドス・ザク・キンの担当上忍だよ」

はつと顔を上げた多由也と君麻呂は、気づかれないよう流し目でドス達のほうを見る。そこには音隠れの額当てをした男が、闘技場の中央でヨロイと対峙しているサスケを舐めるような視線で見つめていた。

「……つまり大蛇丸様に見られているこの状況下で、僕が闘うのは得策ではないと…?」

「お前が不治の病と発覚したから、うちはサスケに大蛇丸が標的を定めたんだろ? 予選で暴れてみる、すぐにお前の身体に転生されるぞ。それに今は俺が作った薬で抑えられているが、お前の病気はいつ発症するかも解らない厄介な代物だ。おとなしく観戦してくれ」ナルトにそう言われてしまえば、君麻呂も多由也も返す言葉がない。むしろ崇拜する彼が自分の身を案じてくれたと君麻呂は歓喜する。傍目には大の大人が喜んでいる様なので、多由也は君麻呂を白い目で見た後、何事も無かったかのようにナルトに話し掛けた。

「…ふうん。君麻呂が辞退した理由は解ったけどよ。ウチはうちはサスケが大蛇丸様の器になれるほどの奴だとは思えねえけどな」

どこか辛そうな様子のサスケは先ほどからずっと首筋を押さえている。その様子を吟味するように見ながら多由也はぼそっと呟いた。

「今チャクラを練り込めば呪印が奴の精神を奪い身体中のチャクラを際限なく引き出すだろーよ。しかも相手はヨロイだぞ? アイツの能力、うちはサスケにとっちゃ最悪じゃねえか」

「それは大蛇丸も百も承知だ。この難局をサスケがどう打開するのが見物なんだろ」

多由也の言葉に、ナルトは淡々と答える。彼の言葉が終わるや否や、試合開始の合図が下された。

「……………それでは始めてください」

試合開始直後、ヨロイは数枚の手裏剣をサスケに投げつける。それをたった一本のクナイで弾き返すサスケ。だが呪印による痛みで彼は体勢を崩し、闘技場の床に倒れ込んだ。その隙を逃さずヨロイがサスケに向かって拳を振り下ろす。それを転がる事で避けたサスケは、クナイを床に突き刺すとソレを軸にヨロイの膝へ蹴りを入れる。バランスを崩し転倒し掛けるヨロイの腕を瞬時に掴み、関節技を決めるサスケ。

だが完璧に決まったとされる関節技を物ともせず、ヨロイはサスケの胸倉を右腕で掴む。途端、ヨロイの手からじわじわと何かが吸われていくのを感じるサスケ。サスケの力が緩くなり関節技から逃れたヨロイは、未だ床で倒れている彼の頭を右腕で押さえ込んだ。

「お前…俺のチャクラを…っ」

「ふ…今頃気づいたか」

腕から逃れようともがくサスケに向かってヨロイは不敵な笑みを浮かべる。

ヨロイとサスケの戦いを見ていたナルト達は、静かに眼下の戦闘について分析し始めた。

「ヨロイの異端な能力…掌を相手の身体に宛がうだけで精神と身体のエネルギ―を吸い出す——チャクラ吸引術。大蛇丸様の狙いは、うちはサスケのチャクラを全てヨロイに吸い出させることではないか  
ね」

核心を突きながらもナルトにそう尋ねる君麻呂。ナルトは彼の言葉に相槌を打ちながら、サスケに視線を向けた。

チャクラを吸われ窮地に陥っているにも拘らず、サスケの眼からはまだ光は失われていない。そう察したナルトは淡々と自身の推測を口にした。

「ああ。サスケが呪印の力に頼るのを待っているんだろうが…。この試合、大蛇丸の思惑通りにはいかないだろうな」

「どういうことだよ？」

訝しげに眉を顰めた多由也に対して、ナルトは小さく笑みを浮かべた。

「見てればわかるさ」

チャクラ吸引術を使えるのであろう右手を振り翳し、サスケを追い詰めるヨロイ。チャクラを吸われ、辛うじて立っているサスケはその右手を避けることしか出来ない。紙一重で避け続けるが時間の問題である。

その時サスケの耳に、同班である波風ナルの声援が入ってきた。

「サスケ——！！お前はそれでもうちはサスケかあ！！！！」

その声にふっとナルのほうを見たサスケは、何かを思い付いたように口元に弧を描く。そして再び突っ込んで来たヨロイの真下に滑り込んだ彼は、蹴りで相手を空へ突き上げた。

凄まじい脚力で蹴り飛ばされたヨロイの身体が宙に浮く。その背後に張り付くように、サスケもまた跳躍する。

これは相手を木の葉に見立てて追尾する体術であり、木ノ葉の里一番の体術の熟練者<sup>エキスパート</sup>——マイト・ガイ及びその弟子ロック・リーがよく使う【影舞踊】である。ナルの隣にいたリーの姿を見て、以前我が身で受けた彼の技をサスケは思い出したのだ。

だがただの【影舞踊】ではない。自分なりのアレンジをつけ加え、更に攻撃力を増そうと考えるサスケ。ヨロイの背中を指で押さえ、その攻撃を繰り出そうとする。

しかし。

「ガハッ！！」

首筋の呪印がここぞとばかりに反応し、彼の身体は強張った。呪印から伸びる斑模様が徐々に増えてくる。

（チクシヨウ……！いちいち反応しやがって……っ）

苦悶の表情を浮かべるサスケ。ザク達と対峙した時同様、斑模様が蛇のように彼の身体に絡みついていく。

呪印による模様は観覧席からもよく見える。呪印に苦しむサスケの姿に、多由也が咎めるような視線をナルトに向けた。けれどナルトは、ただじつとサスケの動向を見守っている。

音の額当てをした男——大蛇丸が、にやりとほくそ笑んだ。

身体を蝕む呪印。その痛みに耐えているサスケの脳裏に、同班たるナルとサクラの言葉が浮かび上がる。

（こんなものに……！呑み込まれてたまるかッ……！）

カツと双眸を見開き、心底から呪印に抗う。彼の叫びが届いたのか、呪印は波のように引いていった。

「アイツ……ッ！気力で呪印を抑えやがった……！！」

観覧席の手摺を掴み、前屈みの状態で観戦していた多由也が驚愕する。彼女の隣で同じく観戦していたナルトは、表情ひとつ変えずに

大蛇丸をちらりと横目で見た。

ナルトに見られているなど気づかず、大蛇丸はサスケが呪印を抑えたことに対し、若干眉を顰めている。

「いくぞッ！」

呪印が引き、調子を取り戻したサスケが攻撃を開始する。

相手の背後に潜んだまま、鋭い蹴りを放つサスケ。死角を突いたその蹴りは、角度を変え二撃、三撃と連続でヨロイの身体に襲い掛かる。流れるような動きで蹴り続けていたサスケは、蹴りの衝撃と重力に従い落下していくヨロイ目掛けて、床に叩きつけるような蹴りを止めとばかりに放った。

「……第一回戦、勝者——うちはサスケ。予選通過です」

サスケを勝者と判定したハヤテの声が闘技場に響き渡る。どよめく会場の中、君麻呂が冷静に口を開いた。

「写輪眼ですね。確か木ノ葉には体術の熟練者がいると聞きました。エキスパート彼から盗み取ったものでしょう」

「正確にはその弟子からだろうな。ドスに耳をやられた子がそうだろう。チャクラが使えない今、体術を使うのが最適だからな……しかしこれで、大蛇丸がサスケに執着するのは間違いない」

呪印の力を引き出さずあまつさえ抑え込んで勝利した。思惑通りにはいかなかったが、うちはサスケという可能性をこの試合で見出せた。

大蛇丸の様子を窺えば、案の定歓喜に打ち震えている。

舌舐めずりしているだろう大蛇丸本来の姿がありありと脳裏に浮か

び、ナルトはげんなりと嘆息した。

呪印を封印するため、サスケを連れて闘技場を後にする畑力カシ。彼の後ろ姿を見送っていたナルト達の耳に、ハヤテの声が入ってくる。

「えー…では、さっそく次の試合を始めますね」

彼がそう言った直後、再び電光掲示板に名前が無作為に表示され始める。

予選第二回戦に選ばれた二名の名は――。

――『ロック・リー』VS『うずまきナルト』――

## 八 写輪眼（後書き）

多由也と君麻呂は、大蛇丸のことは尊敬しているけれど自分の体乗っ取られるのは勘弁だと思っています。説明不足ですみません。

## 九 黄塵万丈（前書き）

「渦巻く滄海 紅き空」第九話です。

今回、若干残酷な描写があります。そこまでたいしたものではないですが、ご注意ください。また分かり難い描写かもしれませんが、なにとぞお付き合いお願い致します。

九  
黃塵万丈

「あの時は本当にありがとうございました！」

闘技場中央に降り立ったおかつは少年——ロック・リーは、ナルトを見るなりガバリと頭を下げる。

ドス達音忍との揉め事後にナルトはリーの傷ついた耳を治した。その謝礼だと察したナルトは、顔の前で手をひらひらと振る。

「そんな畏まらなくていいよ。うちの里の者がやっただから。こちらこそすまなかった」

礼儀正しいリーに、これまた丁寧に返すナルト。その真摯な態度が気に入ったのか、リーは朗らかな表情で笑う。彼の口元から覗く歯がキラーンと光った。

「貴方には耳を治してもらった恩義があります。ですが試合になると話は別です。全力でいかせてもらいます!!」

右手の甲をすつと掲げ、戦闘体勢に入ったり。音の額当てをした男——大蛇丸が消えたのを目の端で確認してから、ようやくナルトは身構えた。

「勿論だ」

「それでは……第二回戦——始め」

ハヤテの静かな声が、試合開始の合図を送る。

試合直後、最初にし掛けてきたのはリーだった。

「【木ノ葉旋風】！！」

俊足にてナルトの間合いに入った彼は、上半身を捻って回し蹴りを放つ。だがナルトはその軌道を読んでいたので、微々たる動きでそれを避けた。

【木ノ葉旋風】の回転力を生かし、ぐつと身体を屈めたリーが下段払い蹴りを放つ。それをも見越して僅かに跳躍するナルト。跳躍する彼に、リーの上段蹴りが襲い掛かる。

しかしながら逆にナルトは鋭い蹴りを放つリーの足に両手をついて逆立ちした。そのまま彼はリーの足を軸にくるりと宙で反転する。軽やかに床に降り立ったナルトの背中を狙って拳を振るうリー。だがナルトは振り返らずに彼の拳を受け止めた。

後ろ手で拳を受け止めているにも拘らず、拮抗する両者。傍目にはリーのほうが有利のはずなのに、彼は徐々にナルトに圧され始めるならば、ともう片方の拳で突きを放つリー。だがそれもナルトは振り向きもせず、残った後ろ手で受け止めた。

そしてその状態からリーの拳を握り締めた手を軸に空中で回転する。背後に降り立ったナルトから、リーはすぐさま距離を取った。

「……なかなかやりますね」

「……………」

再びリーが身構える。それをじっと見据えながら、ナルトは口を開いた。

「……全力でいくんじゃないかったのか？」

その言葉に、リーはぴくりと眉を顰める。挑発なのかそれとも足首に巻いた重しに感づいたのか。

どちらともとれるナルトの言葉は、リーを若干動揺させる。その動揺を打ち払うように頭を振った彼は、戦闘体勢に入り直した。だがその構えは当初と違い慎重の色が見えていた。

「あの速いリーさんの動きを完全に見切ってる…!?!」

観覧席にて眼下の試合を観戦している春野サクラが驚きの声を上げる。彼女はサスケしかり音忍しかり、ずば抜けて速いリーの体術を目の当たりにしていた。

だからこそ彼女は、リーを軽くあしらうナルトに驚愕を隠せない。

「それに、どうしてリーさん体術しか使わないの？少しは距離を置いて忍術でも使わないと！」

サクラの言葉に、彼女の隣で試合を眺めていたリーの担当上忍たるガイが答える。

「使わないんじゃない。使えないんだ」

「え？」

「どういうことだつてばよ!?!」

ガイの不可解な答えを聞いたサクラは訝しげな顔で彼を見上げた。サクラの隣にいた波風ナルもまた、声を荒げて問い質す。

「リーには忍術・幻術のスキルがほとんどない……だから忍者として生きていくために、リーに残された道は唯一体術しかなかった」そうぼつぽつと話していたガイは、おもむろに親指を立ててリーに呼び掛けた。

「リー！外せ!!」

「で、でもガイ先生！それはたくさん大切な人を守る場合じゃないと駄目だつて…」

「構わーん!!俺が許す!!」

なにやらリーに許可を下したガイが輝く笑顔で告げる。リー同様、

彼の口元から覗く歯がキラーンと光った。

ガイの許可を貰ったリーは、満面の笑みを浮かべて跳躍する。そして闘技場にどんと鎮座する印を組んだ巨大な手の石像上に飛び乗った。

そしてその場に座り込んだかと思うと、自らの脛当てを取り外し始める。脛当ての下には根性と書かれた重しが装着されていた。

「よし！これで楽に動けるぞー！！」

両足首に巻かれた重しを取り外したリーは意気揚々と声を張り上げる。そして無造作に重しを下に投げ落した。

落下する重しは、轟音を立てて会場床を砕いた。落ちた箇所からは砂塵が撒き上がり、重し自体は床にのめり込んでいる。ピシピシと罅割れている闘技場床を見て、観覧席の者達は何れも引き攣った表情を浮かべた。

「行け——！リーっ！！」

「オッスー！！」

啞然とする周囲を気にせずガイが叫ぶ。師の声に応え、リーは石像から跳び降りた。

重しを外したことで、寸前とは比べものにならない速度でナルトの間合いに入ったリーが回し蹴りを放つ。それをすんでの事でかわしたナルトだが、次の瞬間にはリーの姿は消えていた。かと思うとナルトの顔面目掛けて彼は拳を振るう。その拳を捌いてナルトはリー

から距離を取ろうと跳躍した。

「甘いですよ!!」

ナルト以上に跳躍したリーが踵落としを放つ。だがその足をナルトは片腕で受け止め、懐から取り出したクナイをリーに投げつける。かろうじてそれを避け、闘技場の壁に足をつけるリー。クナイは闘技場の天井に深く突き刺さった。

再び猛攻撃を仕掛けようとナルト目掛けてリーは突っ込む。しかし、彼は唐突に動きを止めた。訝しげな表情でじっとナルトを見据える。  
「…どういっつもりです？」

対戦相手——うずまきナルトは、何故か両眼を閉ざしていた。

「諦めたんですか？なら棄権してください」

すっと右手の甲を掲げてそう言うリーに、ナルトは双眸を閉じたまま口元に弧を描く。

それを挑発と受け取ったリーは、容赦なく彼に上段蹴りを放つ。それをナルトは首を少し動かして避けた。疑問を抱きながらも高速で追撃するリー。だがナルトはそれを最小限の動きで全てかわしてい

く。

流石におかしいと感じたり、ナルトから距離をとる。見れば、ナルトの立ち位置は先ほどからほとんど変わっていない。ただ静かに佇んでいるだけだ。

（僕の動きを把握している……！？そんな馬鹿な……）

内心リーは狼狽する。彼の動きは下忍には到底見えない速さである。現に観覧席ほとんどの下忍の視界に映っているのは、ナルトの周囲で舞っている砂塵のみ。

見えているのは上忍達ぐらいであろう。それなのにナルトはリーの高速攻撃を尽く回避しているのだ。

「す、凄い……っ！」

手摺を掴んで前屈みになったサクラが驚嘆の声を上げる。彼女にはリーの動きを目で追う事が出来ない。だからリーがナルトを追い詰めているように見えるのだ。

だがガイは自身の弟子の動きではなく、ナルトの動きに目を見張る。（リーの速さは既に中忍以上だ。それを遙かに凌駕するスピード……なぜまだ下忍のままなんだ？相手の子の動きはもはや上忍と言っても差し支えない）

ガイ同様他の上忍達も、リーではなくナルトを注視していた。

試合に向けられる視線のほとんどは驚異、残りは絶対的信頼を孕んでいる。信頼の目で観戦しているのはナルトの同班——君麻呂と多由也。

「ナルトの奴、音でリーって野郎の動きを拾ってやがるな」

「ああ。いくら体術に秀でていてもあの程度ならナルト様には到底勝てない」

ナルトが負けるはずがないと信じ切っている二人は、眼下の試合に対してひとつも取り乱していなかった。

高速移動、鋭い蹴り、急所を狙った突き。そのどれもが速く、鋭く、重い。

鍛え抜かれたそれらの攻撃を息をもつかせぬ高速で放つリー。だがその連撃を、ナルトはかわし、いなし、受け止める。それも眼を瞑った状態だ。多由也の言う通り、風を切る音を聞いてリーの居場所を把握しているのである。

どれだけ攻撃しても当たらない彼に焦れたのか、リーの瞳にある決意が生まれる。

（…こうなったら【蓮華】だー！）

両腕に巻いた包帯をしゅるりと解いた彼は、ナルトを中心に疾走し始めた。高速で移動する彼の姿は最早見えず、傍目には砂塵が円を描いているようにしか見えない。

台風の様子のナルトが瞬時に印を結ぶ。しかしリーの動きに注目していたためその所作は誰の目にも捉えられなかった。

次の瞬間ナルトの真下に滑り込んだリーが空へ突き上げるような蹴りを放つ。その凄まじい蹴りをともに受けたナルトの身体が宙に浮いた。

サスケが使った技の本家たる【影舞踊】でナルトの背後に回ったりーは、両腕の包帯を幾重にも彼の身体に絡ませる。こうすることで動きを封じ、受け身を取れない状態にするのだ。

「【表蓮華】…っ！ー」

更に逆さ状態のまま回転し、凄まじい勢いで闘技場床へ高速落下。

落ちた先では轟音と共に砂埃が立ち上る。衝撃により、重し以上に粉々に碎かれる床。

包帯で縛られたナルトは脳天から床に叩きつけられた。

ナルトが落下した床がガララ…と崩れる。荒い息を吐きながらも直前に脱したリーが闘技場床に降り立った。

「やった——！！リーさんが勝った——！！」

「…し…死んじやったんだってば…？」

歡喜の声を上げるサクラ。反して一抹の懸念を抱くナル。

一方の君麻呂・多由也は、何事も無く涼しげな顔でその惨状を眺めている。

ナルトの様子を見るためハヤテがゆっくり彼に近寄った。と、その時。

ぼうつっという白煙と共に、ナルトの姿は掻き消えた。

「な……！？」

「…これが全力か？」

トツと天井から軽やかに降り立ったナルトが無傷で問い掛ける。同

時に軽い破裂音と共に天井に突き刺さったクナイが掻き消えた。

（…クナイに変化していたのか？）

試合を観戦していた者は誰もがそう判断する。

しかしながらそれは間違いであり、リーが【表蓮華】を使うまではナルト本人だったのだ。リーが円を描くように高速移動し始めた際に影分身と入れ替わり、一瞬で天井に突き刺したクナイに書かれた術式に飛ぶ。術式が巻かれたソレを懷に納め、クナイに変化。この術をよく知る力カシがないからこそ行ったのだ。現に上忍はおるか火影でさえもクナイに変化しずっと様子を窺っていたのだと勘違いしている。

もし最初から影分身だったのならばリーの連続攻撃を一発でも食らえば消える。だからあえてナルトはリーが【表蓮華】を使うギリギリまで己自身で闘ったのである。

リー含めその場の者は皆リーの勝利を確信していたため、ナルトの無事な姿に驚きを隠せない。静寂に包まれた闘技場ではリーの荒い息と誰かがゴクリと鳴らした咽喉の音しか聞こえなかった。

最小限の動きで回避し疲労が少ないナルトに比べ、疲労と激痛によりガクリと膝をついているリー。【表蓮華】を使ったために身体の節々が悲鳴を上げているのだ。

ナルトは汗ひとつ掻かず涼しげな顔でリーを見つめている。今がチャンスだというのに彼は何もし掛けてこない。まるで何かを待っているようだ。リーが次に起こす行動に期待している。

得体の知れない恐怖がリーの胸中に沸き起こる。砂の我愛羅とはまた違う、威圧感を発するナルトにリーは完全に気圧されてしまっていた。

だが観覧席を目の端に捉えた彼は、はっと息を呑む。リーの視界に、

師であるガイの微笑みが映ったのだ。

（先生が笑って見てくれてる……。それだけで、ボクは強く蘇れる事が出来る——更に強く。もっと強く——！）

ナルトの存在感に吞まれていた彼は、ガイの笑みを見ただけで落ち着きを取り戻していく。ぐつと拳を握り締めた後、彼は再び右手の甲を掲げた。

ロック・リー……忍術も幻術も出来ない「熱血落ちこぼれ」と言われていた彼は努力の天才だった。体術も人並み以下だったリーだが、彼はひたすら体術向上に打ち込んだ。

「たとえ忍術や幻術が使えなくても立派な忍者になれる事を証明する」。ある意味波風ナルと似た忍道を持つ彼はその目標を糧に体術のみに力を費やしてきたのだった。

「俺が笑って見てられるくらいの強い男になれ——！」というガイの言葉を信じて生きてきた。

だからリーは……。――。

突然両腕を交差したリーは、己の身体の中を流れるチャクラを感じる。そして双眸を閉じて独り言のように呟いた。

「木ノ葉の蓮華は二度咲きます。……ガイ先生、認めてください。今こそ……」

【表蓮華】を使ったために枯渇していたチャクラを無理矢理引き出す。リーの身体からチャクラが荒々しく立ち上がり始めた。

「自分の忍道を貫き守り通す時——！」

ガイと約束したこの術を使う際の絶対条件を高らかに叫ぶ。するとチャクラ増加と呼応するかの如く、赤く変色していくリーの体躯。

【表蓮華】にて崩した闘技場床の破片が彼のチャクラに煽られたのか宙に舞い上がる。

（第三の門『生門』を開けたな…）

リーの突然の変貌にも動揺せず、ナルトは冷静に状況を把握する。

チャクラの流れる経絡系上には頭部から順に『開門』『休門』『生門』『傷門』『杜門』『景門』『驚門』『死門』と呼ばれるチャクラ穴の密集した八つの場所『八門』が身体各部にある。

この『八門』は身体に流れるチャクラの量に常に制限を設けているが、『蓮華』はその制限の枠を無理矢理外し、本来の何十倍にもあたる力を引き出す事を極意とする禁術である。

先ほどナルトに使った『表蓮華』は『八門』の内第一の門『開門』だけを開き、脳の抑制を外し人の筋肉の力を限界まで引き出して繰り出す技。

対して『裏蓮華』は第二の門『休門』で無理矢理体力を上げて、第三の『生門』から『表蓮華』を遙かに超える高速移動及び攻撃を可能とし、更に『八門』全てを開く事で少しの間火影すら上回る力を手にする事が出来る。だがその代わりその術者は必ず死ぬという、非常に危険な術なのだ。

リーは既に第四の門『傷門』を開いている。

捨て身の禁術を発動させるリーに、ナルトは一瞬双眸を閉じた。そして再び見開いた時には、彼の左目は僅かに緋色を帯びていた。チャクラが増幅するのと相俟ってリーの身体中の筋肉が盛り上がる。髪が逆立ち血管が浮き出る彼の鼻からたたりと血が一筋垂れた。空気が振動し、見る者全てを震撼させる猛威を、今のリーは全身で露にしていた。

リーのチャクラで舞い上がった石が一粒カチンと床に落ちる。その音を合図に、リーはナルト目掛けて一気に踏み込んだ。

途端、闘技場床はリーの凄まじいチャクラにより瓦礫と化す。同時に砂埃が天井まで巻き上がった。

砂塵を鬱陶しそうに見遣りながら、ナルトはくいつと人差し指と中指を動かす。

観覧席から試合を俯瞰している者でさえも捉える事が出来ない速度で、リーはナルトの足下へ滑り込んだ。そして【表蓮華】同様、空に突き上げるような蹴りを放つ。

だが、リーの鋭い蹴りは空振りに終わった。対戦相手たるナルトの姿が消えていたのだ。

(…どこに…っ!?)

周囲を見渡すリーの背後から抑揚のない声がした。

「ここだ」

急ぎ振り返ったリーだが、既にその場には誰もいない。いくら四門を開いても相手が見えなければ意味が無い。

(まさか僕より速く移動してるのか…!? 八門遁甲無しで!?)

ありえないが、現に今リーの眼はナルトの姿を認識出来ない。上手く気配を消しているか、己より遙かに速いか、どちらかしか考えられない。

(ならば焙り出すしかない…っ!)

どちらにせよ闘技場からは出ていないはずなので、リーは闘技場を手当たり次第壊し始めた。八門遁甲により彼の腕力は数段に上がっている。闘技場そのものが全壊するのではないかというほどの力。故に床や壁を砕く度に立ち上る砂埃が闘技場全体を覆っていく。

「ごごほっ！これじゃ何も見えないじゃない…っ」

サクラ達観覧席の者が咳き込む中、じっと試合を食い入るように見ている我愛羅。今にも闘いたいと逸る気持ちを抑えるため、彼はぐ

つと腕に爪を立てた。

既に床や壁が成り立っていない闘技場。瓦礫の山を積み上げたリーが眼を忙しなく動かし周囲を見渡す。視界を覆う煙の中で、再び声が響いた。

「どこを見ている？」

一瞬ナルトの気配が露になる。リーは察した気配の居所に、凄まじい速さで突っ込んだ。

だがやはりソコには誰もいない。砂埃が邪魔だと考えたリーは、蹴りにより発する旋風で闘技場を覆う埃を掻き消そうと構える。腕力と同様脚力も普段の何十倍にもなっているからだ。

だが後方に振り上げようとした足がなぜか動かない。腕も微動だにしない事にリーは訝しむ。両手・両足が全く動かせない。まるで何かに縛られているような……。

(…まさか)

煙が晴れていく。砂埃で目に涙を滲ませながら、波風ナルは観覧席から身を乗り出した。

そこでは――。

リーが空中で身動きとれない状態になっていた。

リーの四肢が何かの糸に囚われている。

蜘蛛の糸のように彼を雁字搦めにしているソレは、刀の一種である鋼糸。細く長いその糸は武器の中で尤も扱いが難しい。

両手の指に巻きつかせ、微かな指の動きで相手を切り裂ける。だが鋭過ぎて自らの指を切り落とし兼ねない諸刃の剣でもある。

あまりに鋭利なその鋼糸に一度でも絡まれると、並みの者ならばあつという間に切り刻まれている。

リーが動きを封じられるだけに止まっているのは、ひとえに八門遁甲のおかげである。

盛り上がった筋肉が鋼糸の切断を食い止めているのだ。

何時の間にか闘技場には鋼糸が蜘蛛の巣の如く張り巡らされていた。リーが第四門『傷門』を開いた時点で自らの気配を薄くしておいたナルト。まるでその場に誰もいないかのように錯覚させる事が可能なほど彼の気配は元々希薄である。

そして更に気配を完全に消す事で、リーはナルトがどこにいるのかを認識出来なくなる。

ナルトは気配を消した後リーがどのような行動をとるかを予測した。そして周囲に鋼糸を張りつつ、リーの行動を利用する。

案の定ナルトの姿を焙り出すために彼は床や壁を砕いた。その際に朦々と巻き上がった埃はナルトが張った鋼糸の存在を隠し、リー含む周囲の者の目を誤魔化す。

そしてナルトが再び声を掛ける事でリーを誘き寄せ、そのまま鋼糸で捕らえる。いわばリーはナルトが張った罠に見事に引っ掛かって

しまったのである。

「…もうこれ以上は八門遁甲を開かないほうがいい」

糸で囚われ、宙に浮いているリーを見上げながらナルトが淡々と声を掛ける。だがリーは諦めない。なんとか鋼糸の包囲網から逃れようと、彼は更に体内門を決じ開けた。

（第五：『杜門』——開！！）

チャクラが爆発する。手足に浮き出た筋がブチリと千切れる。沸騰する血液に身体中の骨が軋んだ。

「ハアアアアアアアツツツ！！！！」

無理矢理己の身を纏う鋼糸を引き千切る。そしてそのままナルト目掛けてリーは突っ込んだ。

堰を切ったように再び溢れ出すチャクラと肉体の限界を超える力に、リーの身体がついていけない。突っ込む際の踏み込みですら、あまりの速度にリーの足の骨が粉々に碎かれる。

「これで、終わりです！！」

「……ああ。最後だ」

リーの雄叫びにナルトは静かに返した。そしてこちらに驚異的な速度で疾走してくるリーに向かって彼は瞬時に印を結ぶ。

「【りょうげんか燎原火——えんじょう炎上】」

刹那、リーの全身を炎が覆い尽くした。

「あああああああ！！！！！！」

隆々たる炎がリーを包み込んで炎上する。絶叫を上げながら彼は闘技場床を駆け回った。

しかしながら火の勢いはあまりにも盛んで、鎮火する様子など一向に見えない。

「リーッッ!!」

堪らず試合に割り込んだガイがリーに駆け寄った。なんとか火を消そうと愛弟子を抱き抱えようとするが、リーの身を包み込む炎がその手を阻む。じゅうつ…と肉の焼ける匂いが鼻について、ガイは陰しい表情でナルトを睨んだ。

ナルトはガイの眼光にも気圧されず、繊細な白い手で印を結ぶ。

「――解」

刹那、リーの身体を包んでいた炎が一瞬にして消えた。

「な…!?!」

ガイが驚くのも無理は無い。あれほど全身炎で焼かれていたリーの身体には、炎症のひとつも見当たらなかったのだ。加えて闘技場を蜘蛛の巣の如く覆っていた鋼糸も、最初から何も無かったのではないかと錯覚させられるほど綺麗に消えていた。

試合を俯瞰していた者達の疑門に答えるかのように、ナルトが口を開く。

「…幻術だ」

その言葉を聞いた者は皆が皆、疑惑の目でナルトを見つめた。

一体いつから幻だったのか。あの鋼糸も炎も臨場感溢れるものだった。炎で焼かれるリーの断末魔も、肉を焦がす匂いも、全てが本物だった。だがそれらが幻だったというのは、火傷ひとつ負っていないリーの身体が物語っている。

眼識・耳識・鼻識……といった六識全て誤魔化し、更には痛覚をも騙した幻術。木ノ葉随一の幻術使いである夕日紅でさえも、ナルトの技量に目を見張っている。

尤もここまでリアルに再現出来たのは、鋼糸も【燎原火】も実際にナルトが扱えるからである。

対戦相手たるリーは勿論、上忍含め観戦していた者達も、火影ですら今までの出来事が実際に起きたものだと思っていた。だからナルトに「幻術」だと告げられても、正直彼らは懐疑的な態度を崩せずにはいた。

「勝者！うずまきナルト！！」

気絶しているリーとナルトを交互に見比べ、ナルトを勝者と判定したハヤテが声を上げる。ナルトはリーを守るように立ちはだかるガイを見据えると口を開いた。

「……八門の内四門まで開けたんだ。加えて俺の幻術は現実に起きたかのように錯覚させる。暫くは目を覚まさない——療養させたほうがいい」

そう告げると、彼は通り過ぎ様にガイに小声で言い放った。

「……過ぎた技は身を滅ぼす。その術を教えるのは時機尚早だったのではないか？」

下唇を噛み締めるガイを一瞥して、ナルトはその場を立ち去る。急ぎリーを運ぶ医療班を目の端で捉えながら、彼は悠然と君麻呂・多由也の許へ向かった。

半壊した闘技場ではリーの身体を慎重に運ぶ医療班だけが忙しく動き、観戦していた者達は何れも声が暫し出なくなっていた。

## 九 黄塵万丈（後書き）

若干ナルトが偉そうな感じになっちゃいました。すみません…。でも俺様な性格ではないのでそこは悪しからずご了承願います。

ナルトの秘密というか術というか…感づいた方もいらっしやるのではないかと思われませんが、文として表記するのは最後まで取っておくので、気づいていても寛大な心で見ても見ぬふりをしていただけると嬉しいです。

リーが『傷門』を開けてから以降は全て幻です。分かり辛くて申し訳ありません。

また戦闘描写、下手ですみません。苦手なんです。もっと上手く書けるよう精進します…。

## 十 先見の明（前書き）

「渦巻く滄海 紅き空」第十話です。

大蛇丸vsカカシは端折りました。申し訳ありません。また、試合の順番はバラバラです。原作通りの試合もあればそうじゃない試合もあるので悪しからずご了承願います。（今回は原作通りですが…）

## 十 先見の明

あれだけ激しい戦闘だったのが全て幻であつたため、闘技場はリー  
の足首の重しや【表蓮華】により砕けた程度であつた。

へこんだ床を踏み越えて医療班がリーを担架に乗せる。その様子を  
強張った表情で見つめていたガイに、医療班の中でも『八門遁甲』  
に詳しい者が声を掛けた。

「命の危険はありませんが、『八門遁甲』の後遺症により全身の亀  
裂骨折と筋肉断裂が酷いです…。しかしまだ第四門で済んで良かつ  
た…。それ以上を開いていればどうなっていたか…」

そう告げる医療班に、ガイは視線をリーに向けたまま問い掛けた。

「もし…第五門以上開けていたらどうなっていた…？」

「…おそらく…忍びとして生きていく事が出来ない身体になつてい  
たかと…」

医療班の答えを聞いて、ガイは思わず観覧席にいるナルトを見上げ  
る。ガイの視線の先を追ってナルトをちらりと見遣った医療班が、  
再び口を開いた。

「尤も何か精神的打撃を受けたのか、昏睡状態に陥っています。目  
が覚めるのはいつになるやら…」

「……………そうか」

医務室へと運ばれていくリーを見送りながら、ガイはもう一度そう  
かと呟いた。

周囲からの視線を一身に浴びながら観覧席へ戻ってきたナルトに、君麻呂は真つ先に労いの言葉を掛ける。そして観戦しながら内心抱いていた疑問を彼は尋ねた。

「ナルト様：貴方ならば試合開始直後、相手を昏睡させる事も可能だったのでは？」

「…仮にそれで勝ったとしても、ロック・リーは納得しなかっただろう。完全燃焼させてやったほうがいい」

確かに君麻呂の言う通り、ナルトの技量ならば一瞬で片が付いただろう。そうしなかったのは純粹に【蓮華】をこの目で見たかったのである。だがそうとは言わず、ナルトは淡々と差障りの無い答えを告げる。

君麻呂とナルトの会話を聞いていた多由也が割り込むようにして口を開いた。

「けどあの綱糸も【燎原火】も実際に出来たはずだろ？わざわざその上で幻術を用いるなんて面倒な事…甘すぎるんじゃないのか？」  
多由也の言葉を耳にしてナルトは思わず目を瞬かせる。そうして、甘いという単語は尤も自分に似つかわしくない言葉だ、と彼は内心苦笑した。

「実際に甘い人間と俺は懸け離れているよ」

何かを悟ったような複雑な表情を一瞬浮かべ、ナルトは前方を見据える。彼の視線の先には、リーを心配そうに見送っている波風ナルの姿があった。

突然ナルとサクラの背後にぽんつと白煙が舞い上がり、彼女達の担当上忍である畑力カシが現れる。驚いて振り向いたナルとサクラに、彼は軽い調子で「よっ」と挨拶した。

わざと軽薄な態度をとる力カシに対し、サクラは切羽詰まって彼に

詰め寄る。

「よっ、じゃないわよ！カカシ先生！！サスケくんは？サスケくんは大丈夫なの！？」

いの一番にサスケを気にするサクラの様子を見て、カカシはふっと目を細める。自分が担当する少女達の姿を見て、今まで張り詰めていた緊張がようやく解されていく。

思わず傍にいたナルの頭をぽんつと撫でて、彼は目尻を下げた。

「ま、大丈夫だ。今病院でぐっすりだ」

但し暗部の護衛付きだけど、と内心つけ加えるカカシ。サスケの無事を聞いてあからさまにほっとしているサクラを視界の端に捉えながら、彼は先ほどまで自分が置かれていた危急存亡の危機を思い出していた。

予選第一試合後、カカシは呪印を封じるため【封邪法印】の術をサスケに掛けていた。無事【封邪法印】にて呪印を封じ、気絶したサスケを見下ろしながら一先ず安堵の息を吐いている時、彼が現れたのだ。

元木ノ葉の忍びであり、伝説の三忍の一人——大蛇丸が。

カカシを歯牙にもかけず、蛇のような瞳孔でサスケを見つめる大蛇丸。

「いずれ彼は必ず私を求める…力を求めてね…」

目的の為なら“どんな邪悪な力であろうとも求める心”。サスケがその資質を持つと見透かした大蛇丸はそう言い捨てる。

そして殺気だけで自分の死をイメージさせられたカカシを可笑しそ

うに一瞥すると、彼は踵を返した。だが寸前に力カシが言った「刺し違える事くらい出来る」という言葉を、今思い出したかのように装いながら一度足を止める大蛇丸。そつして最後に一言付け加えたのだ。

「それに、君が私を殺すんだって？ やつてみれば？ 出来ればだけど……。——私を殺せるとしたらそれはあの子だけ……」

「え——では……これから第三回戦を始めます」

何時の間にか闘技場中央では二人の子どもが対峙していた。どうやら次試合の対戦者が選出されたらしい。その一方が音忍である事に気づいた力カシは視線を電光掲示板に向ける。そこには『ザク・アブミ』VS『あぶらめシノ』と表示されていた。

音忍のザクという名を見て力カシはひっそりと眉根を寄せた。大蛇丸が言っていた言葉がずっと胸中で引つ掛かっているのだ。

音隠れの里が自分の里だと打ち明かした大蛇丸。彼は駒が必要だと言った。

サスケは優秀な手駒であり、今闘技場で闘っている者は一人を除いて捨て駒だと大蛇丸は明言した。加えて最後の一言から、もしや音忍の子ども達の中に大蛇丸も一目置くような力量の持ち主がいるのではないか、という考えが力カシの脳裏を一瞬だけ掠める。だがそ

の考えを打ち払うように彼は自嘲した。

（馬鹿か…俺は。仮にも三忍の一人である大蛇丸以上の力を持つ子どもなど…）

ありえない。そう呟きながらも、カカシは音忍ザクの動向を探るようにつめていた。

「ザクか…大蛇丸様にこれ以上失態を晒せないと必死だな、おい」  
同じ音忍であるザク・アブミと木ノ葉の忍び油女シノの試合を無関心な態度で俯瞰していた多由也がぼそつと呟いた。

「彼の存在理由は、大蛇丸様の期待に応える事だからね。でもどうやったらあんな自信家になれるんだか…。僕には理解出来ない」

同じく観戦していた君麻呂が呆れたように頭を振る。彼は強くなるのに常に努力を怠らない。ナルトに比べたら自分などまだまだと日々精進している。だから君麻呂はどうしたらあそこまで自分の力を過信できるのかと呆れ半分でザクを眺めていた。

尤も彼自身もナルトの期待に応えるのが至上の喜びなので人のことは言えないが。

一方のナルトは試合よりも波風ナルの背後——畑カカシを注視していた。カカシが観覧席に戻って来たという事はサスケの呪印を封印し終えたという事だ。カカシからどこことなくぎこちなさを察したナルトは、やはり大蛇丸と接触したかと確信すると共に自身の行動を顧みる。

ナルトには中忍第三試験の予選を実施させる必要があった。

だが予選が実施されるにはなるべく多人数を第二試験で残さないといけない。そこでナルトは『天地』の巻物を白と再不斬に多く集めてもらい、それらを木ノ葉忍びに与えたのだ。勝ち進んでもらい、予選せざるを得ない人数にするためである。

そして君麻呂に我愛羅の後をつかせたのは、まず君麻呂に興味を持たせ、後で自分にその興味を移行させるのが目的であった。君麻呂を辞退させるのは当初から考えていたので、辞退する際にナルトを「強い」とさりげなく伝えさせる。後は我愛羅の前で圧倒的な試合をしてみせるだけであった。

次に自分の予選試合がサスケの後に来るよう事前に細工を施しておいた。

呪印を施されているサスケが一度試合をすれば必ず呪印封印のために畑力カシが控室奥へ連れて行くだろうと読んでいた。加えて大蛇丸が力カシに釘を刺す事もナルトは推測していた。

また、力カシやサスケがいれば写輪眼で自身の技の力クリがバレル可能性があつたし、大蛇丸に再び器にと目をつけられる危惧もあった。故に彼ら三人がいない時——サスケの次試合を狙ったのである。だからこそ我愛羅が興味を持つような試合が出来たのだ。

（今までは想定内だった。だが何事も計略通りにいくとは限らないしな…）

思慮深い彼は物憂げにひとつ息を吐いた。そして開目すると、意識を眼下の試合に向ける。

ザクはつい今しがた対戦相手のシノに向かって【斬空波】を放った

ところであつた。

試合開始早々、シノ目掛けて【斬空波】を放つザク。【斬空波】の衝撃波を食らい、倒れ伏すシノだが彼はすぐに立ち上がった。

彼の頬からその皮膚を突き破って虫が後から後から湧いてくる。気味悪そうに顔を顰めたザクは、背後から聞こえる微かな音に振り向いてギョツとした。そこには何か黒いモノが波打っている。ざわざわと小刻みに動きながらこちらに近づくソレは、無数の虫の群れであつた。

「こいつらは『奇壊蟲』と言って、集団で獲物を襲い、チャクラを食らう」

静かに話し始めたシノの指先にいるのは小さな黒い虫——『奇壊蟲』。

奇壊蟲とは、シノがこの世に生を受けた瞬間から共に生きると宿命づけられた虫のことである。彼の一族は己の身に寄生させチャクラを与える代わりにその虫を戦闘に用いるのだ。

シノと虫の一群と挟み撃ちにされ、ザクはぎりつと奥歯を噛み締めた。

幼少の頃、ザクは大蛇丸に勧誘された。

大蛇丸にとってはザクの目がただ気に入っただけか、単なる気紛れか。どちらにせよ微々たる出来事であつたが、ザクにとっては青天

の霹靂だった。

「私のところに来れば強くなれるわよ」という彼の甘言に導かれここまで来た。伝説の三忍の一人が自分を必要としている。大蛇丸様選ばれた己は特別な人間なのだと信じて疑わなかった。

故に一度サスケに腕を折られ掛け、今また敗北などそんな事は許されない。

「俺を舐めるなよ!!」

右腕を背後の虫、左腕をシノに向けてザクは吼える。

そして両腕に穿たれた孔から風を放出しようとチャクラを練った直後、彼は絶叫した。

「あーあ…腕取れちまった」

医療班に担架で運ばれていくザクを見ながら多由也が溜息を吐いた。その声音に同情の色は皆無である。彼女は観覧席の手摺に頬杖をついて、ハヤテが「勝者、油女シノ!!」と勝者の名を宣言するのを聞き流していた。

「あのシノという蟲使い、隙についてザクの排空孔に虫を詰めたな。その状態で【斬空波】を撃てば、砲身であるザクの腕は暴発する…」

もう少し自分の身の回りの状況判断をすべきだったな」

ザクの敗因を淡々と述べながら、吹き飛んで闘技場端に落ちている彼の右腕を無慈悲な面持ちで一瞥する君麻呂。

今まで試合を静観していたナルトが遠目でザクの生存を確認する。満身創痍だが確かに胸を上下させるその様を眺めていると、向かいの観覧席から波風ナルが歓声を上げた。

「シノ、すげー！！」

うおおっと純粹に感嘆するナルの姿を見て、常に無表情を崩さないシノが僅かに口角を上げる。反してナルの隣のサクラは「前から不気味な人だとは思ってたけど……」と若干失礼な事を口にした。

「不気味？どこがだってばよ？」

「何考えてるかわかんないし……。第一虫よ、虫！！生理的に受け付けないのよ！あんた、平気なの！？」

「オレってばキバ達と一緒によく虫取りしてたから、虫結構好きだつてば！！」

後頭部で手を組みながらにししと笑うナルに、サクラは呆れたように「そういえばこの子男女だった……」と脱力する。

如何にも子どもらしい会話で闘技場の緊張感が薄れていく。

彼らの気を引き締めるかの如く、ハヤテがごほんつと咳払いした。

「ごほごほ……では続いて第四回戦を始めますね」

ハヤテの言葉が終わるや否や再び電光掲示板が無作為に動き、次の対戦相手の名を表示した。

なかいの『——

——『はるのサクラ』VS『やま

選出された木ノ葉のくノ一二名が、闘技場中央にて対峙する。

なにやら事情でもあるのか非常に気まずそうな表情をする両者。試合開始と共に双方は拳を握り締め、格闘を始めるが、どうもお互いに全力を出し切れていない感が否めない。

「なんつーか…お遊びの域だな、こりゃ」

「ヌルイな…」

くあ、と欠伸を噛み締める多由也と、呆れ果てたと表情に表している君麻呂が、試合を観戦しながら好き勝手にぼやく。

一方で向かいの観覧席では、やはりナルが眼下の二人に向かって声援を送っていた。

「サクラちゃん、いの——！！頑張れ——ッ！！」

「……いや、どっちなにしろよ」

サクラがいなくなったため必然的にナルの隣になったシカマルがぼそっとツツコむ。彼のツツコミを聞いて、ナルはこてんと首を傾げた。

「うふう…だってサクラちゃんは同じ班で友達だし、いのは幼馴染で友達だし…」

真剣に悩みだした彼女にシカマルは苦笑して「あー俺が悪かった。

二人とも応援してやれ」と促す。

そのため聞いているこっちが恥ずかしくなるほどの声援を再び送るナル。観覧席から身を乗り出して一生懸命応援する彼女に、サクラといのが同時に叫んだ。

「ちったあ、落ちつけ！！！！」

緊張感の欠片も無い試合に、君麻呂・多由也は白い眼で木ノ葉の忍び達を見遣る。対してナルトは、まるで眩しいものを見るかのように目を細めていた。

## 十一 策士（前書き）

「渦巻く滄海 紅き空」第十一話です。遅くなって申し訳ありません。

いのVSサクラは端折りました、すみません。今回はテマリVSミズミ、シカマルVSキンです。

原作通りではない試合と原作通りの試合となっております。

## 十一 策士

互角の闘いを経てダブルノックアウトを果たした両者が闘技場中央で倒れ伏している。

ハヤテの「予選第四回戦、通過者無し」という声を聞くや否や、彼女達の担当上忍が闘技場に降り立った。上忍達が観覧席に連れて行く二人のくノ一を、多由也は呆れ果てた目で見送る。

「…ただの喧嘩だろ、コレ…」

「まあ…強ち間違つてないな」

目を覚ましたらしい四回戦の対戦者——春野サクラと山中いのが仲良く小突き合っている様を目にしたナルトもまた、口元に苦笑を湛える。

そしてふと電光掲示板に視線を投げると、そこには既に第五回戦の対戦者の名が選出されていた。

——『ツルギ・ミスミ』VS『テマリ』——

カブト・ヨロイと同班である木ノ葉の忍び——ミスミが闘技場中央に向かって歩いてくる。対して砂の忍び——テマリは観覧席からふわりと風に乗って降りてきた。

試合開始合図の前に、ミスミはテマリに声を掛ける。

「俺はヨロイと違ってガキでも女でも油断は一切しないぜ。始めに言うておく…俺が技を掛けたら最後、必ずギブアップしろ——速攻でケリをつける！」

「ふん」

彼の言葉を聞いたテマリは鼻で笑う。彼女は忍具であろう巨大な扇を背中から抜くと、それを闘技場床にとんと置いた。

「さつさと始めな」

挑発を軽く流され、眼鏡の奥で目を細めるミスミ。テマリの言葉に促されてハヤテは試合開始の合図を送った。

「それでは第五回戦——始めてください」

途端、地を蹴ったミスミがテマリに向かって殴りかかった。

「何もやらせはしない！先手必勝！！」

ミスミの左腕の一撃を軽く捌くテマリ。だが一瞬どこか違和感を感じた彼女は、ミスミから距離をとる。距離があるにも拘わらず、ミスミはそのまま左腕をテマリに伸ばした。するとミスミの左腕が通常の人間よりも遙かに長くなる。蛇の如くによろとした彼の腕を見て、テマリは思い切り顔を顰めた。

「ちっ！！」

あからさまに嫌な顔をしたテマリが右手を大きく振る。手の動きだけで巨大な扇を開くと、そのままの流れでそれを大きく振り被った。

扇に煽られた突風がゴオツとミスミに襲い掛かる。激しい強風が吹き荒れ、闘技場床の砂埃が巻き上がった。

大人一人くらい簡単に吹き飛ばすほどの威力のある風が闘技場を吹き抜ける。だがミスミは闘技場床にべったり張り付くことでテマリの風から逃れていた。

今までの試合が原因で若干へこんでいる闘技場床。その裂け目を掴み、己の身を軟体動物の如くグニャグニャにすることで風の抵抗を弱めているのだ。

どこか海底にいるイカやタコを彷彿させるかのようなその有様に、

テマリの顔が益々苦々しいものになる。

「俺は情報収集のため、何処にでも忍び込める身体に改造している。あらゆる関節を外し、グニャグニャになった身体をチャクラで自在に操れるのさ」

自分からスパイをやっていますと暴露するようなミスミの物言いに、心底呆れ返る多由也と君麻呂。カブト同様音隠れの隠密たるミスミが得意げに自身の特技を話すのを、彼らは冷やかに見下ろしていた。

「ハッ！じゃあそのグニャグニャの身体、今すぐ切り刻んでやるよ！……忍法——【カマイタチ】！！」

高らかにそう叫んだテマリが扇を大きく振るう。刹那、先ほどとは比べものにならない暴風がミスミに襲い掛かった。

荒れ狂う風は真空状態を作り出し、風に囚われたミスミは身動きがとれない。更に風は彼の身体をズスタに切り裂いていく。いくら伸縮自在の身体といってもチャクラが練り込まれた竜巻からは逃れる術がない。

「……………ッッ！！！！」

声すら出せず、ひたすら風の刃をその身に刻まれたミスミ。それをテマリはつまらなさそうに見上げるとぱたんっとな扇を閉じた。するとあれだけ吹き荒れていた風が一瞬で掻き消える。

突風により闘技場天井まで巻き上げられたミスミは突然風が止んだことで落下した。テマリは折り畳んだ扇を試合当初と同じくちゃんと闘技場床に置く。直後、扇の骨部分の上にミスミがガンッと落ちてきた。

落下の衝撃により口から血を吐いたミスミに向かって、テマリは吐き捨てるように言い放った。

「私はイカやタコが大っ嫌いなんだよ!!」

どうやらミスミの伸縮自在の四肢は、彼女の嫌いな食べ物を思い浮かべたようだ。毛嫌いしている食べ物はその姿を見るだけで嫌という者もいる。タコやイカといった軟体動物を彷彿させるミスミの身体を視界に入れたくなかったのだらう。

「第五回戦——勝者、テマリ!!」

扇の上で気を失っているミスミを確認したハヤテが声を上げる。自身の名が宣言されると同時に、テマリはそのまま扇を振り落とした。既に意識のないミスミを闘技場床に叩きつけた彼女は、ふんと鼻を鳴らして観覧席へ悠々と向かう。その様子を木ノ葉の忍び達は恐々と見送っていたが、反して多由也達は感嘆の声を上げていた。

「さっきのお遊びの範疇だった試合よりはマシだったな」

「風影の子どもだからな。当然だらう」

ちらっとテマリを横目で見た多由也と君麻呂は、明らかにこちらを

睨んでいる我愛羅に気づくとすぐさま顔を背けた。

「おい、ナルト。あの瓢箪野郎、すっげ〜目でお前を見てるぞ」

「ナルト様。やはりあの砂の我愛羅は危険な存在です。わざわざ興味を引かせてどうなさるおつもりです？」

懸念の色を孕む四つの瞳。視線の先にいるナルトは静かに闘技場中央を俯瞰している。かろ〜うじて息があるミスミが担架で運ばれていくのを静観していた彼は、二人の視線に気づくと笑みを浮かべた。

「…問題無い」

微笑を湛えながら脈絡のない答えを返すナルト。そのどこか透明感のある美しい笑顔を目にして、君麻呂と多由也は思わず息を呑んだ。暫し見惚れていた多由也がはっと我に返る。若干頬を染めたまま慌てて目を逸らした彼女に、ナルトは首を傾げた。

「…ナルト様がそう仰るなら…」

はぐらかされたとは知っていながらもあえて指摘せず、君麻呂はナルトに会釈してみせる。担当上忍に変化している君麻呂に頭を上げるよう促しながら、ナルトは流し目で砂忍達のほうを見遣った。

そこでは血気に逸る我愛羅を、必死で宥めるテマリとカンクロウの姿があった。

一方向かいの観覧席では、奈良シカマルが手摺に頬杖をつきながらぼんやり天井を仰いでいた。

（…女ってこえ〜な。さっきのミスミとかいう奴、可哀想に…）

竜巻の中でミスミがズタズタに切り裂かれるのを目の当たりにしていた彼はぶるりと身を震わせた。闘技場から視線を外せば、今度はやけに元気ないのが目にとまり、シカマルは人知れず嘆息を漏らす。（いのはいので、さっきまでサクラといがみ合ってたのに急に元気だし…。女ってわかんね）

メンドクせ…。ともはや口癖になっている文句を呟く。だが視界に波風ナルの姿を映すと、彼は口元に微笑を湛えた。

（ま、コイツは単純だからわかりやすいけど）

自分の試合をまだかまだかとそわそわしている彼女の一挙一動を、無意識に目で追うシカマル。表情豊かなナルの様子を見て彼はくっつと喉奥を鳴らして笑った。

（…けど俺の試合になったらコイツちゃんと俺を応援してくれんのかね？）

電光掲示板を見ようと観覧席から身を乗り出すナル。それに、危ねえだろと彼女の頭を軽く叩き、そのままふわふわしたたんぽ頭をわしゃわしゃ撫でながら、シカマルはあれこれ思い巡らしていた。

（同じ木ノ葉の同期同士の試合になったら、いのとサクラの時みてえにどっちも応援するんだろ…な）

けどやっぱり声援を貰うんだったら俺ひとりがいんだけど、と内心本音を呟いていたシカマルの耳に、ナルの「痛いってばよ、シカマル！…」という言葉が入ってくる。

はっとして彼は慌てて彼女の頭から手を放した。

火照る頬を誤魔化しながら悪いと謝れば、若干口を尖らせたナルはちゃんと掲示板見るよな、と再び観覧席から身を乗り出す。全く動じていない彼女の態度を少々残念に思いながら、シカマルは片手で口元を押さえた。

（…やっべ。思い切り無意識だった）

無自覚でナルの頭を撫でていた事を今更になって照れるシカマル。  
そんな教え子に向かって、彼の担当上忍たる猿飛アスマがにやにやしながら声を掛ける。

「青春するのもいいけどよ、シカマル。お前の番だ」

そう揶揄しながら、くいつと親指で掲示板を指差すアスマ。からかわれたことに眉を顰めながらも、彼の指の先を追ったシカマルは目を瞬かせた。

電光掲示板には『ならシカマル』VS『キン・ツチ』と表示されていた。

「あゝあ、女が相手かよ…やりづれえな。メンドクせえ」  
「なら、すぐ終わらせてやるよ」

闘技場中央にて対峙した両者の態度は対照的であった。億劫そうにポケットに手をつ込んでばやくシカマルに対し、強気の発言を返すキン。

対戦者のやる気なげな態度が気に食わないのかキンはひっそりと眉根を寄せる。一方、彼女とは面識があるシカマルは第二試験時の出来事を思い浮かべていた。

キンは、サクラを助けるために木ノ葉第十班が一度対立した音忍の

一人である。そのため彼女以外の音忍達の術は見知っているが、紅一点であったこのキン・ツチというノ一は力を発揮していない。反してシカマルの術は彼女に見られている。故に今の時点でシカマルはかなり不利な立場なのだ。

（———とは言え、）

「第六回戦『奈良シカマル』VS『キン・ツチ』……………開始!!」  
ハヤテの言葉をよそに、背後から響く声を耳にしたシカマルは口角を上げる。

ナルの「シカマル——!! 頑張れ——っ!!」の声援を希望通りに受け取った彼は、ハヤテの試合合図直後に印を結んだ。

（声援を送られたんじゃ、頑張るしかねえよな）

「忍法——【影真似の術】!!」

自身の影を自在に操り相手の影と繋げる事で自身と同じ動きをさせる、奈良一族の秘伝術。

第二試験の時にこの術を目にしているキノはハッと鼻で笑った。

「馬鹿の一つ覚えか。そんな術、お前の影の動きさえ見れば怖くないんだよ!!」

床を這う影をあっさり避けながら、何かを投げつけるキノ。一瞬鈴の音が聞こえたシカマルは眉を顰めた。

咄嗟にしゃがみ込んだシカマルの背後の壁に、その何かが突き刺さ

る。

それは鈴がついた千本だった。

「へっ。古い手、使いやがって…お次は鈴のつけた千本とつけない千本を同時に投げんだろ？鈴の音に反応してかわしたつもりでいたら、音の無い千本に気づかずグサリ…」

千本を見ただけで推理した彼に対し、キンは再び懐から千本を取り出す。

「お喋りな奴だ!!」

先ほど同様千本を次から次へと投げつけるキン。千本を軽く避け続けるシカマルの耳朵を突き通った鈴の音が打った。

だしぬけに聞こえてきた鈴の音に慌てて後ろを振り返る。彼の目に壁に突き刺さる千本が映った。風が吹いているわけでもないのに小刻みに動く鈴を見て、シカマルは瞬時に把握する。

(……糸!?)

千本についている鈴には更に糸が繋がっている。相手の狙いを察した彼が急ぎ身構えるが、その時には既にキンは千本を投げていた。咄嗟の判断により致命傷を外したシカマルが腕に突き刺さった千本を投げ捨てる。血が滲む彼の腕を嘲笑いながら、キンは糸を握る手を僅かに動かした。

キンの手の動きに従って、糸の先に繋がっている鈴が再び美妙的な音色を響かせる。美しい音とは裏腹に、その音色はシカマルの平衡感覚を狂わせていく。

思わず膝をついたシカマルを見下しながらキンは得意げに語り出した。

「この特殊な鈴の音の振動が鼓膜から脳へと直接働き掛ける。そしてお前に幻覚を視せるのさ」

彼女の言葉通り、シカマルにはその場の全てがゆらゆらと翳んで見える。耳をいくら押さえつけても鈴の音は止むことはない。

終いにはキンの姿が二重に三重にとブレて見え、シカマルは奥歯を噛み締めた。

「さあ… ゆっくり料理してあげるよ」

嘲笑しながら千本を構えたキンが腕を振る。為す術もなくシカマルはその千本を真正面から受けた。あっさり突き刺さった三本の千本を満足げに見遣りながら、キンは言葉を続ける。

「今度は五本… 次は七本…。 お前がハリネズミになるまで続けるよ」

じわじわといたぶってやるとあからさまに告げるキン。頭を振って気を取り直そうとしても、幻覚により多人数のキンの姿が見えるシカマル。

だが傍目には試合開始当初と同じく一対一の試合にしか見えない。キンに翻弄されているシカマルに、ナルは焦って声を張り上げた。

「シカマル——！！何やってんだ——！！らしくねぞ——！！」

鈴の音に紛れながらも確かに聞こえたナルの声。彼女の激励を受けたシカマルの目に力が込められる。

怪我を負った自身の腕を押さえながら、彼はわざと苦々しげな声を上げた。

「嘔吐き女め。最初にすぐ終わらせるって言ったじゃねえか」

「じゃあこれで終わりにしてやるよ」

シカマルの一言を痛みに耐え兼ねての発言だと捉えたキンは、止めを刺すために千本を顔面に構える。そして致命傷を狙い、腕を振り上げようとした。

「な、なに!？」

だが自身の身体が突然利かなくなるキン。

身動きひとつとれない彼女は糸を動かせない。故に糸の先にある鈴の音は止み、同時にシカマルに掛けていた幻覚も解けた。

気だるげに立ち上がったシカマルがひとつ息をついた。泰然自若なその様は今まで追い詰められていた人物とは到底思えない。尤もその平然とした態度はわざと振舞っているものであって、実際は千本が突き刺さった傷跡が未だじくじくと痛んでいる。

だが彼は痛みを耐えつつ、気丈にも笑みを浮かべてみせた。

「ふゝ…ようやく【影真似の術】成功」

「な、何を言ってるの!？そんな、お前の影なんかどこにも…」

困惑するキンにシカマルが種明かしをする。彼女にも見えるようにシカマルは頭を僅かに動かした。自身の手を見下ろしたキンがはつと目を見張る。

「こんな高さにある糸に、影が出来るわけねーだろ。俺は自分の影を伸ばしたり、縮めたり出来んだよ」

そう言い放つと同時に千本の鈴からキンの手まで伝う糸の影を動かしてみせるシカマル。彼の言葉に呼応するかのように、糸の真下の影がじわりと蠢きだす。じわじわと大きく広がっていく影は確かにキンの影とシカマルの影を繋ぎ合わせていた。シカマルは自身の影を

糸状に細くし、思惑通り彼女を【影真似の術】の術中に嵌らせたのである。

「…だが、それでどうやって勝つというんだ？同じ動きをするだけなのに！」

しかしながら、シカマルの動作と同じ動きをしながらもキンは勝気な態度を崩さない。挑発してくる彼女を気にも留めず、シカマルは手裏剣を一枚取り出した。

「馬鹿か！？お前そのまま攻撃したら、お前も傷つくんだぞ！！」

シカマルが次に何をするのかを即座に察したキンは顔を青褪める。ここに来て初めて焦りだした彼女に対し、シカマルは平然とした態度で手裏剣を構えた。

「んなこたあ解つてるよ……手裏剣の刺し合いだ。どこまでもつかな？」

「馬鹿、よせ！！」

あくまでも鷹揚に構えながら手裏剣を投擲するシカマル。彼同様、手裏剣を投げ打つキン。

両者が互いに投げた手裏剣は確実に相手に向かって飛んでくる。普通ならば避けるところ、動けない今は防御の構えすらとれない。術を掛けたシカマルが動かなければ、キンが出来る事と言えば回転してくる刃物を眺める程度だ。

迫り来る恐怖。手裏剣が突き刺さる自身の姿が明確な映像となってキンの脳裏に浮かび上がる。せめてもと、彼女は身を強張らせた。

だが手裏剣が刺さる寸前、シカマルが動いた。

上体を仰向けにし、手裏剣を避ける。当然彼と同じ動きをするキンもまた身体を逸らした。

手裏剣が刺さらなかったという安堵感を感じると共に、対戦者の度胸の無さをキンは嘲笑う。

「ふん、所詮ハッター……………ガッツ!!」

だが直後、彼女は後頭部を背後の壁に強打した。

そのまま気絶したキンがズルズルと壁に寄り掛かるのを、シカマルは身を逸らした状態で確認する。ブリッジの状態から飛び起きた彼は、完全に昏睡したキンを見下ろして言い放った。

「忍びならな…状況や地形を把握して戦いやがれ！お互い同じ動きをしても、俺とお前の後ろの壁との距離はお互い違ったんだよ。手裏剣は後ろの壁に注意がいかないよう、気を逸らすのに利用しただけだ」

キンの敗因を冷静に語るシカマル。彼の言葉が終わった直後、気を失ったキンを確認したハヤテが「勝者——奈良シカマル」と声を上げた。

途端、歓声に包まれる闘技場。

その中央にて再び億劫そうにポケットに手をつ込むシカマル。同班のいの・チョウジに加え聞こえてきた声に、彼は緩みそうになる口元を慌てて引き締めた。

「シカマル——!!…ちょっとカッコ良かったってだよ!」

若干口惜しそうにしながらも感嘆の声を上げるナルの姿をちらりと見上げて、シカマルは今度こそ口元に弧を描いた。

## 十一 策士（後書き）

今回シカマル↓ナルが強くて若干少女漫画チックになってしまった。  
なぜだ…。

そしてテマリの試合が原作とは違います。即効で終わりましたが。  
ぶっちゃけテマリの嫌いな食べ物がいかとタコと知って、これだ―  
―と思った故の試合（笑）。なんか…すみません。

だって関節が外せてぐにゃぐにゃの体って軟体動物を思い浮かべませんか！？それに嫌いな食べ物ってその姿を見るだけでも嫌という人もいるんじゃないかな…と。私の妹が海老嫌いなんです、海老の姿を見るだけで顔を顰めるので。どうなのでしょう、そこらへん？（訊くな）

## 十二 落ちこぼれ（前書き）

投稿、大変遅くなりました。申し訳ありません！！「渦巻く滄海紅き空」第十二話です。

今回は多由也VSチヨウジ、ナルVSキバです。

## 十二 落ちこぼれ

「なかなか面白い試合でしたね。ナルト様」

「奈良シカマル…。彼は伸びるな」

ポケットに手をつ込み、ゆっくり観覧席へ戻っていく六回戦の勝者。それを吟味するかのような瞳でナルトと君麻呂は眺めていた。

「高い分析力に鋭い勘。相手の出方を窺い、その場に応じての判断能力。また自身の術を戦術で補い、且つ効果的に利用している。中忍に必要とされる指揮官としての資質もあるだろう…。この中で中忍になる確率が最も高いのは彼だな」

奈良シカマルを絶賛するナルト。それを見て、君麻呂と多由也の眉間の皺が深くなる。特に彼らの会話に口を挟めずにいる多由也は、ナルトがシカマルを褒めるたびに不機嫌になっていく。

「木ノ葉には勿体無いと…?」

「そうじゃない。いい策士になるなと思ったただだよ」

君麻呂の言葉にナルトは苦笑しながら答える。手摺に頬杖をついていた多由也がふんつと鼻を鳴らした。

「あんな奴、大したことねーよ」

ぶすつとむくれながら、彼女は向かいの観覧席を睨みつけた。彼女の態度に思い当った君麻呂が、ナルトに聞こえないような声を潜めて話し掛ける。

「…拗ねてるのか?」

「なッ!? ふざけんな、それはテメエのほうだろ!!」

「否定はしない」

多由也の言葉にあっさり了承を返した君麻呂もまた、木ノ葉の忍び達を苦々しげな表情で見遣った。

「…ナルト様からの絶大の賛美を博するなど、不愉快極まりない。だがナルト様の目に留まったと言う事はそれなりの才能の持ち主な

のだらう」

「チツ」

君麻呂に舌打ちを返した多由也はプイツと顔を逸らした。

「多由也」

不意にナルトに話し掛けられ、彼女は肩を震わせる。動揺を隠し平常心を装いながら、多由也は口を開いた。

「……な、なんだよ」

「頑張つてね」

ナルトからの脈絡の無い言葉に彼女は訝しげな表情を浮かべる。

ナルトの視線の先を追って掲示板を見遣った多由也は、彼の言葉の意味を理解すると観覧席から飛び降りた。

「おい、チョウジ。試合終わってないの、俺らの班の中であとお前だけだぜ？強い奴に当たっちゃったらどーするよ？」

君麻呂・多由也に睨まれているとも知らず、観覧席に戻ってきたシカマルは同班のチョウジをからかっていた。その揶揄するような物言いに、チョウジは手摺を握りながらズルズルとへたり込む。

「べ、別にいいもん……。そんな時はすぐ棄権するし……」

「ってことは、焼肉食い放題つてのも無しだな」

チョウジの気の弱い発言を遮るように十班の担当上忍である猿飛アスマが口を挟んだ。どうやら食べ物で釣ろうという作戦らしい。

「なあに。ヤバくなったら俺が止めに入ってやるよ。ま、その場合お前は失格になっちまうけどな」

担当上忍が割り込めば、その上忍が庇った下忍が失格。同じく下忍が試合に割り込んだ場合、助けに来た下忍も助けられた下忍も連帯責任ということで失格になる。たとえ前試合での勝利者でも本戦に

出場する権利を剥奪されるのである。

情けない声を上げるチョウジを説得するアスマ。前半は尤もらしい言葉を述べていたが、後半になるにつれ、彼はチョウジの好きな肉の名をつらつらと並べ始めた。

アスマの焼き肉食い放題発言に、シカマル・いのは呆れ果てる。反してチョウジは瞳に炎を燃やし、俄然やる気を出し始めた。

「うおおおおー！！やつきつにつくー！！」

雄叫びを上げながら闘技場中央に向かって行くチョウジ。突然の彼の奇怪な動きに呆気にとられたシカマルというのが慌てて手摺から身を乗り出す。

そして掲示板を視界に入れた途端、彼らはサツと顔を青褪めた。

「勝って焼肉食うぞー！！」

闘技場中央にて鼻息荒く宣言したチョウジを、彼の対戦者である多由也は冷やかに見据えた。

興奮している彼の耳には同班の焦った声など届かない。明らかに声援ではなく試合を棄権しろという言葉が聞こえてきて、多由也は尤もな判断だ、と口角を上げた。

「チョウジー！！その人、サスケくと互角だった人よ！！」

「悪いこと言わねえ！止めとけ、チョウジー！！焼肉食う前にお前が食われんぞー！！」

「お、おい。お前ら……」

全力で棄権を促す教え子達にアスマが目を丸くする。だがいの・シ

カマルの必死の説得もむなしく、ハヤテが試合開始の合図を言い放った。

「え……では第七回戦『秋道チヨウジ』VS『多由也』、始めてください」

開始直後、ハツと鼻で笑いながら多由也はチヨウジを挑発した。

「おい、デブ。さっさと掛かって来いよ」

嘲りの言葉内に含まれたひとつの単語。それに過剰反応を示したチヨウジは、額に青筋を立て、グツと拳を握り締めた。

「うおお、馬鹿にしてえ！！ポツチャリ系の力、見せてやる——

——！！」

雄叫びを上げたチヨウジが印を結ぶ。

すると彼の身体がぼんつと膨れ上がった。肥大したその身に首・手足を引っ込めれば、チヨウジの姿は巨大な大玉と化す。

「いっくぞおー！！」【肉弾戦車】——！！」

自身の身体を肥大させる【倍化の術】と併用し、そのまま首・手足を引っ込め回転する木ノ葉流体術。重量と回転を有効に扱いながら敵へと突進する秋道一族の秘伝術である。

巨大球が砂埃を撒き散らしながら多由也目掛けて転がってくる。少しでもその回転に巻き込まれれば骨が碎けるであろう。それほどの威力を秘める巨大な大玉は確実に多由也に向かって迫り来る。

「イける……ッ!？」

先ほどまで棄権するよう叫んでいたのが思わず観覧席から身を乗り出す。一方、シカマルは油断なく試合を見据えていた。

轟音が闘技場に響き渡る。朦々と砂塵が巻き上がり、観覧席の者達は目を瞬かせた。

「ど、どうなったんだってばよ…!？」

「おい、チョウジ!!」

困惑するナルの声に続いてシカマルが砂埃に向かって呼び掛ける。どれだけ目を凝らしても煙の中は全く見えない。それはチョウジの術の威力が凄まじかった事を意味しているが、彼が本当に無事なのかは確証が持てない。チョウジと同期である木ノ葉の忍び達は皆が皆、事の成り行きを見守るしか術は無かった。

反して立ち上る煙の中の人影を確実に視界に捉えていたナルトは、煙が徐々に晴れていくのと同時に静かに双眸を閉じた。

煙が晴れる。そこでは目を回しているチョウジが闘技場床でぶっ倒れていた。

「チョウジ!？」

いの・シカマルらが大声で呼び掛けるも、完全に気を失っているチョウジ。

それを確認したハヤテが多由也に視線を投げる。「勝者、多由也!」「という言葉に、さも当然と頷いた彼女は悠々と観覧席へ戻って行った。

今までの試合の中でも最短で決着をつけた多由也。彼女がどうやってチヨウジを再起不能にしたのかそれすらも解らぬまま、観覧席の者達は呆然と第七回戦勝者を見送った。

「多由也。「超低周波音」を発したな」

多由也が戻って来た途端、未だ闘技場を俯瞰したままのナルトが口を開く。彼の一言に一瞬呆けた多由也がニツと笑みを浮かべた。

「…流石だな。バレたか」

「可聴周波数の範囲外である20Hz<sup>ヘルツ</sup>より低い超低周波音は音圧が高ければ高いほど圧迫感を引き起こす。また人には聞こえにくいという厄介なモノだ」

淡々と話すナルト。その言葉が全体的を射ているため、多由也は決まりが悪そうに視線を泳がせる。

第二試験時、ナルトに頼まれドス達を見張っていた多由也は、チヨウジが「デブ」という言葉に異様に反応した事も勿論知っていた。だから彼女は試合開始直後、あえて「デブ」と言い放ったのだ。対戦相手を逆上させるために。

血が上り興奮した者は動作が安直的になる。現にチヨウジは砂埃を

撒き散らしながら一直線に向かって来た。タイミングを見計らい、隠し持っていた笛から超低周波を振動させる。この音波は直線上にしか当てられないのだが、チョウジは真正面から攻めてきた。だから多由也はいとも簡単に、超低周波をチョウジ目掛けて照射出来たのである。

音圧が高い低周波音は脳波のリズムを乱し、相手を麻痺させる。また高速で回転することによって通常より音が高く聞こえるチョウジは、空気中でも地中でも伝わる超低周波をともに食らってしまう。つまり彼は自身の術で逆に自分の首を絞めてしまったのだ。

僅か1分足らずで勝利した多由也は傷一つついていない。対してチョウジは超低周波音の影響により耳鳴り・動悸・目眩そして胸の圧迫感が一気に押し寄せ、気絶した。

「だがやけに早急で勝負を決めたのはどういうことだ？」

何もかもお見通しであるナルトに感心しながら、君麻呂が尋ねる。ナルトに対する顔とは打って変わって仏頂面になった多由也がぼそつと呟いた。

「別に…単にあのデブが弱すぎただけだ」

（ナルトが褒めてたクソ野郎の同班の奴だったから…なんて言えるかよ）

心中で呟いた彼女の本音は、誰にも知られる事は無かった。

チョウジと多由也の試合があつという間に終わって拍子抜けする下忍達。だがこれで自分達の試合が近くなつたと、未だ試合をしてい

ない者達は神経を張り詰めた。

「——あと残るは、音忍一人に俺とナルとヒナタ……。ネジ・テンテン、それと砂の二人か……」

残った下忍達を指折り数えていたキバがちらりと向かいの観覧席を窺う。我愛羅と目が合つて、彼は慌てて顔を背けた。

（音の君麻呂つて奴が棄権したのは正直助かったけど、まだアイツが残ってる……）

目が合った瞬間に感じた恐怖が背筋をゾクゾクと駆け上る。まさかナルトと多由也の傍に控えている大人が君麻呂だとは思ひもせず、頼むから我愛羅とだけは闘わせるなとキバは心中祈っていた。

電光掲示板に再び名前が無造作に表示される。ナルトの目が一際鋭く、選出された二名の名を捉えた。

——『なみかぜナル』VS『いぬづかキバ』——

やる気満々の両者が闘技場中央で対峙する。双方は互いに自信ありげな笑みを顔に浮かべていた。

ハヤテの試合合図が下される前に、キバはナルに宣戦布告の言葉を投げつける。

「悪いがナル！勝たせてもらうぜ！……」

「それはこっちの台詞だつてばよ!!! っていうか、赤丸もやんの?」

キバの挑発に挑発で返したナルが、若干戸惑いながらキバの傍にいる赤丸を指差す。その言葉に対してハヤテがごほんつと咳払いした。「動物や虫は忍具と同じ扱いです。何の問題もありません」

ハヤテの話を聞いて「そーいやシノも奇壊蟲使つてたか!」と呟くも、彼女は納得のいかない顔で赤丸を見つめる。

「えゝゝでも、赤丸と闘うのはちよつとなゝ」

「俺はいいのかよ!」

キバと会う度に赤丸とじゃれ合っているナルは、赤丸と闘うのは少々心苦しいようだ。同様に赤丸もナルによく懐いているため、くうんと鼻を鳴らしている。相棒である子犬からうるうるとした瞳で見上げられ、キバはグツと息を詰まらせた。

「わあつたよゝ。赤丸、お前は手を出すな。俺だけでやる」

赤丸を後方に下がらせたキバが一步前に出る。観覧席からの女性群の声援が耳に入って彼は眉を顰めた。

「ナル――!! そんな奴に負けんじやないわよ!!」

「キバなんかフルボツコにしちゃえ――!!」

「ナルちゃんゝあの、頑張つて!」

サクラ・いのの気合いの入った声援に交え、キバと同班であるはずのヒナタからの控え目な応援。それらは全てナル一人に向けられる。俺への声援は無しかよ、とキバはがっくり肩を落とした。

「……始めてください」

試合開始の合図が下されると同時に膝を立てたキバが印を結ぶ。

（ほんとほこイツとはあんま闘いたくねえゝ綺麗に一発でのしてやる）

いの・シカマル・チョウジと同じくナルの幼馴染であるキバは、一刻も早く試合を終わらせようと身構えた。

「擬獣忍法——【四脚の術】——！！」

途端、彼の身体からチャクラが立ち上る。闘技場床に四肢を這わすその様は獰猛な野獣のようだ。

体勢を低く構える。

瞬間、弾丸のように突っ込むキバ。電光石火の早業で彼はナルの懐に入った。そのまま思い切り肘で彼女の腹を突く。

一瞬で背後の壁まで吹っ飛ぶナル。壁に激突し彼女は倒れ伏した。

ピクリとも動かない対戦相手を視界の端で捉え、キバはハヤテに声を掛ける。

「もう当分目を開ける事はねえぜ？試験官さんよ……」

幼馴染であり悪友でありそして想い人でもあるナルをあまり傷つけず済んだと内心安堵するキバ。だがその安堵感を隠し、彼は口元に弧を描いた。

試合を観戦している者のほとんどが、チョウジに続いてあっさり終わったなと思う。しかしながら、ヒナタ・シカマル・いのが不安げな表情でナルを見つめるのに対し、サクラとカカシ、そしてナルトは鷹揚とした態度で試合を俯瞰していた。

ナルから背を向けて立ち去ろうとするキバ。だが彼は突然右腕を掴まれ転倒し掛ける。

「なに!？」

「何処行くんだってば? 試合は…始まったばかりだってばよ!」  
何時の間にかキバの右腕を掴んで自身の肩に乗せているナル。そのままナルに背負い投げをし掛けられたキバは勢いよく床へ叩きつけられそうになる。しかしながら彼は動揺しつつも空中で反転し、床に着地した。

急ぎ体勢を整えたキバの眼前では、既に彼から距離をとったナルが静かに佇んでいる。

(コイツは確かに気絶したはず…)と、先ほどまでナルが倒れていた箇所にキバは視線を投げる。そこには丸太が一つ落ちていた。

「【変わり身】か…!？」

アカデミーの時は変化の術さえともに出来なかったのに、と驚愕するキバに向かって、ナルはにいつと口角を上げる。

「オレを舐めんなよ…っ!!」

彼女の啖呵を耳にして、ナルトは人知れず微笑んだ。

(ありえねえ…っ!!コイツ、ほんとにあのナルか!?)

アカデミーで落ちこぼれと散々馬鹿にされてきたナル。【変化の術】や【分身の術】といった基本忍術でさえ上手く出来ない。頭の回転も悪く不器用でいつも皆から馬鹿にされてきた。一緒に悪戯する時も、コイツは俺がいねーとどうしようもねえな、とキバはいつも優越感に浸っていた。

それがどうだ。

尤も苦手としていた【分身】…それも高等忍術である【影分身】を今の彼女は簡単にやってのけている。基本忍術の一つ一つがまともに出来なくてアカデミー教師から毎回怒られていたのに、今では上忍が主に用いる高等忍術を扱っているのだ。

【影分身】に【変化の術】を応用させるといった器用な小手先を活かし、更に術を使うタイミングが上手いナルに、キバは徐々に圧されていく。一人でやると言ったものの、背に腹はかえられない。焦り始めた彼はとうとう赤丸に丸薬を投げつけた。

少々渋ったものの、主人の危機を察して投げられた丸薬を口にする赤丸。

その丸薬は服用した兵が三日三晩休まず闘えるという『兵糧丸』。高蛋白で吸収も良く、ある種の興奮作用・鎮静作用の成分が練り込まれている。チャクラを全身に張り巡らせ、獣の如く四肢を強化する犬塚一族にはおあつらえ向きの秘薬である。

兵糧丸を服用した赤丸の体が毛先から赤く変色していく。その名の通り赤い犬になった赤丸がキバの背に飛び乗った。赤丸同様、自らも兵糧丸を口に含んだキバがそれをガリツと噛み砕く。

「擬獣忍法——【獣人分身】!!!」

擬人忍法でキバの姿に変化した赤丸と擬獣忍法で獣化したキバ。鋭

い瞳を細めた二人のキバが、鋭利な刃物と化した爪で床を抉った。

「行くぜ……【四脚の術】！！」

両手両足で地を蹴った二人のキバがナルに襲い掛かる。そのスピードは寸前よりも遙かに速い。素早く彼女に近づいた彼らは、自らの鋭い爪を振り被った。それを紙一重で避けるナル。

距離をとろうと彼女は後方へ跳んだ。だがその間合いをキバは一瞬で詰める。再び振り翳す鋭利な爪。なんとか身体を捻りそれをかわそうとするナル。爪は彼女の頬をチツと掠めていく。切り傷から滴り落ちる一筋の血。血臭に眉を顰めたキバだが、彼は自身に（これは試合だ）と言い聞かせた。そのまま壁伝いを走り抜け、ナルの背後に回り込む。

獣のように伸びた爪をナルに向かって伸ばすキバ。彼女の前方からはキバに変化した赤丸が迫る。同時に攻撃を繰り出そうとする二人に、ナルは完全に挟み打ちにされた。

「隙あり！—— 獣人体術奥義【牙通牙】！！」

キバが身体を大きく捻り回転する。同様にキバに変化した赤丸も全身を高速回転させた。

そのまま二人はナル目掛けて勢いよく突っ込んでいく。

「うわあああッ！！」

双方からの体当たりをまともに受けるナル。たたでさえ軽い彼女の身は【牙通牙】の衝撃によって空高く舞い上がっていった。

凄まじい轟音と共に砂塵が巻き上がる。そしてその直後、宙を舞っていたナルが床に撃墜した。

「ガハッ！！」

キバの術に加え上空からの落下。床に叩きつけられたナルの口から血が吐き出される。

身体中が痛い。指一本動かすのも難儀だ。頬に感じるのは床の硬さと自身が吐いた生温い血。

それでも彼女は息も絶え絶えに口を開いた。

「オレは…火影に……こんな、ところで…」

「お前、本心じゃ火影になれるなんて思っても無いんだろ？強がってんじゃねえよ……火影ならな、この俺がなつてやるよ！」

吐血した彼女を心苦しく見下ろしながらも、キバは言い放つ。彼は正直、早くナルに棄権してほしかった。だからわざと皮肉を告げたのだが、それは逆効果だった。

「オレと…火影の名を取り合ったら……」

【牙通牙】によって裂傷だらけの身をゆっくり起こす。

しっかりと地に足をつけたナルが口からぺっと血を吐き捨てた。

「お前、負け犬になんぞ」

そう笑った彼女の瞳は、爛々と輝いていた。

「あの女、なかなか言うじやねえか」

「それに変化の術の使い方が上手いな」

観戦していた多由也と君麻呂が珍しく賛美する。眼下の試合ではナルが変化した事で、観戦者含む対戦相手の目を誤魔化していた。

彼女の試合が始まってからナルトは一度も声を発していない。彼はただ冷徹な眼差しでナルの動向を見守っていた。

隙を作りだすためにナルはキバに変化する。ナル同様キバに変化している赤丸がいるため、その場では三人のキバがお互いに睨み合っていた。だがチャクラを鼻に集中する事で嗅覚を通常の何万倍にも出来るキバにとって、自身に変化している偽物を割り出すのは造作も無い。

鋭い嗅覚で正確にキバに変化したナルを殴りつける。しかしながら、殴られた後彼女はすかさず赤丸に変化。故に赤丸に変化したナルを自身の相棒だとキバは勘違いする。動揺した彼は、キバに変化している赤丸自身をナルだと思い、殴り掛かってしまった。

キバに殴られ床に叩きつけられた赤丸は変化が解け、本来の姿に戻る。己の相棒を気絶させてしまった事に、ナルにまんまと騙されてしまった事に、キバは憤った。

再び【四脚の術】で四肢を強化し、高速移動で彼女に接近。一気に決めようと彼はナルの背後に回り込む。印を結ぼうと身構えたナルが慌てて後ろを振り返り…。

ドバチィ——ン

「…ッ!? いった——ッ!」

思いつきり金髪が目突き刺さり、キバは思わず絶叫した。

金色に光る髪をツインテールに結っているナル。振り向き様に靡いた彼女の髪が、キバの顔面に直撃したのだ。髪も時として武器になる瞬間であった。

「あ、ごめん!!」

思わず謝るも、その隙を逃すナルではない。瞬時に影分身を四体創った彼女はキバを取り囲んだ。

大した衝撃ではないが完全な不意打ちだったため、キバは一瞬怯んでしまう。その一瞬が命取りであった。

逸早くナルの一人がキバを殴る。殴った彼女を踏み台にして、もう一人のナルが回転しながら天井高く跳躍。更に残った三人がキバの真下に滑り込んで、空へ突き上げるような蹴りを一斉に放った。

三人の脚力で宙に浮いたキバ目掛けて、上空からナルが踵落としを繰り出す。

「【波風ナル連弾】!!」

単に、リーの【表蓮華】を参考にしたサスケの【獅子連弾】の真似事である。

顔面から床に勢いよく叩きつけられたキバ。ナルの蹴りと高速落下、そして地面に激突した打撃により、彼は試合続行不可能と判断された。

「勝者——波風ナル!!」

ハヤテの言葉を聞いて、はあはあと荒い呼吸を繰り返していたナルが目を見開かせる。信じられないといった風情で周囲を見渡した彼女は、ぐつと拳を握り締めた。

（オレ……強く、なってる……？）

自身が勝った事に未だ実感が湧かないナル。歓声に包まれる闘技場中央で呆然と佇んでいた彼女に、医療班によって担架に寄せられたキバが声を掛けた。

「少しは……強く、なつたじゃねえ」の」

憎まれ口を叩きながらもナルを勝者と認めたキバ。

アカデミーの頃彼に何一つ敵わなかったナルは、その言葉を耳にして、ようやく自分が勝つたのだと自覚したのだった。

## 十二 落ちこぼれ（後書き）

頭悪いくせに超低周波音なんてものをちよこつと調べました。

強い電圧を発する電化製品・ボイラーや機械・ダムなどが超低周波音の原因だとされています。音を振動させる能力を持つ多由也だからこそ出来たのであつて…細かいことは目を瞑っていたきたいです。

また超低周波音を耳にした人は気分を害するくらいなので、人間を気絶させるほどの影響はありません。でも耳鳴り・動悸・目眩や胸の圧迫感くらいは影響があるとされています。またその音は非常に聞こえにくいらしいです。

間違つていても、軽くスルーしてください。お願いします。

### 十三 運命論者（前書き）

投稿遅くなって申し訳ありません！！

今回ネジVSヒナタの一試合だけなので、短いです。すみません、切りがよかったので。また、急いで書き上げたので文章が荒いかもです。目を瞑ってくださいとありがたいです。

### 十三 運命論者

同族同士が闘技場中央にて対峙している。片や日向一族の宗家たる日向ヒナタ。片や分家でありながら『日向家始まって以来の天才』といわれる日向ネジ。

両者は試合開始後ずっと、互いに拳打や蹴りを打ち出す接近戦を続けている。至近距離で忙しく動く二人の身のこなしは瓜二つで、まるで合わせ鏡のようだった。

傍目にはただの組み手のように見える試合。だが彼らが互いに繰り出すそれは、日向一族の特異体術『柔拳』。骨を砕くといった外面的損傷を与える攻撃主体の闘い方を『剛拳』というのに対し、この『柔拳』は体内でチャクラが流れる経絡系を打撃し内面を壊す闘い方だ。また、通常ならば見ることの敵わない経絡系を視界に捉えるのが出来るのは、一族に伝わる血継限界『白眼』を持ち合わせているからである。

つまりは『白眼』で体内の経絡系を見極め、自身のチャクラを相手の体内に捻じ込む事で鍛えようのない内臓に直接攻撃を与える、日向一族のみに許された体術なのだ。

同等の技を幾度も繰り出す双方を、観戦者達は俯瞰する。ナルの応援によって目に力を込めたヒナタが渾身の突きをネジに放った。

一時の静寂。それを破ったのは少女の吐血だった。

血が闘技場床に滴下する。それを冷やかな目で見遣ったネジが、おもむろにヒナタの上着袖を捲り上げた。彼女の腕にはいつ突かれた

のか、無数の内出血の跡がある。その意味を即座に気づいたのは突かれた本人であるヒナタと上忍達、そしてナルトだけだった。

「これが現実だ。貴女は俺に絶対に勝てない」

そうヒナタに宣言するネジを観覧席からナルは睨みつける。カカシの説明を聞き流しながら、彼女はギリギリと奥歯を噛み締めた。

『点穴』とは経絡系上にある361個のチャクラ穴である。この点穴を正確に突くとチャクラの流れを止めたり増幅させたりとチャクラ調節が可能となる。ヒナタはネジに点穴を突かれたため、チャクラの流れを止められてしまったのだ。

ヒナタの敗北を確信する上忍達の傍で、ナルだけは絶対に彼女の敗北を認めない。ただひとり大きく声を張り上げて応援するナルを目の端に捉え、ヒナタは再び身構えた。

「わからない人だ……」

ずっとネジが身を屈める。その独特の構えに周囲の者は眉を顰めた。唯一その体勢に見覚えのあるヒナタがはっと息を呑む。

「それは…父上の……っ!!??」

「【柔拳法・八卦——六十四掌】!!」

一気に間合いを詰めたネジが苛烈な突きを連続で叩き込む。

直後、ヒナタの身体が宙を舞った。

観戦する者のほとんどが、ネジが何をしたのか把握出来ていない。彼の足下に一瞬八卦の円が見え、錯覚だろうか。と下忍達は目を瞬かせた。

火影や上忍達が彼の力量に目を見張る中、ナルトはすつと目を細めた。彼は緋色を帯びた左目でじつとネジを凝視する。まるでその動きを目に焼きつけるように。

「……これが絶対的な差というものだ」

崩れ落ちたヒナタを見下しながら、ネジは言い放った。彼は八卦の領域にいたヒナタの点穴を64か所突いたのだ。

しかもその術は、日向分家には本来伝えられない奥義の一つ。ヒナタの父、日向当主である日向ヒアシが宗家のみに伝える柔拳法を、分家であるネジはその天賦の才と勘だけで体得してしまったのだ。

ただでさえ心臓への一突きを受けているヒナタの身体は誰が見てもボロボロである。立つ事も出来まいと、ネジは己の勝利を確信した。

遠くなる気を奮い立たせ、ヒナタはネジを見上げる。翳む視界の中で、ネジの眼光が彼女を射抜いた。その強く冷たい眼光にヒナタは怯む。だがその瞳の奥に、彼女は悲嘆の色を感じ取った。

「ヒナタ——！！頑張れ——！！！！」

刹那、ナルの声が闘技場に響き渡る。

その声援が耳に届いた途端、ヒナタの胸の内がじんわりとあたたかくなっていた。冷たい床を掻きまきり、少し動かすだけでも激しい痛みを伴う腕で上半身を支える。

ナルの声を耳にする度に湧いてくる勇気。常におどおどと泳がせる瞳には意思と信念が強く蘇っていく。

「ま……まっすぐ……自分の……言葉は、曲げない……！！私……それが忍道だから……っ！」

途切れ途切れに、しかしはつきりとヒナタは宣言した。その言葉はナルがよく豪語する忍道。憧れの彼女の言葉を口にして、自分自身を奮い立たせる。床を這い蹲りながら、ヒナタは観覧席を見上げた。

いつも笑顔を向けてくれる人。優しい人。勇気をくれる人。励まされ救ってくれた人。一族以外で初めて友達になってくれた人。そして何度酷い目に合っても涙一つ溢さない、強い人。

憧れの人の目の前でヒナタは立ち上がろうとする。痛む身体を押さえ、膝に力を込めようと必死に足掻いた。

指一本動かさないであろうその身を無理に動かす。立ち上がったヒナタの姿を眼前にし、ネジは思わず口から驚きの声を零した。

「馬鹿な……無理をすれば本当に死ぬぞ……」

満身創痍の身体で柔拳の構えをとるヒナタ。そんな彼女はあるところか、観覧席にいる金髪少女に微笑んでみせた。その余裕のあり方にネジは憤る。

「強がっても無駄だ！……貴女は生まれながらに日向宗家という宿命を背負った。力のない自分を呪い、責め続けた……。けれど、人は変わるなど出来ない——これが運命だ」

どこか自分自身に言い聞かせるような物言いでネジは語る。何もかもを諦めた面持ちで瞳を閉じた彼の言葉を、ヒナタは息を切らしながらもはつきり否定した。

「それは違うわ、ネジ兄さん。だって……私には見えるもの……。私

なんかよりずっと宗家と分家という運命の中で迷い、苦しんでいるのは貴方のほう……」

そう断言するには理由がある。あの時ヒナタを見下していたネジの瞳の奥に、彼女は確かに悲嘆の色を感じ取ったのだ。

運命には逆らえないと、予め決められた流れに身を任すしかないのだと、それが人の宿命なのだと。

全ては運命づけられていると子どもの身でありながら悟っている。

そしてその人生観をネジ本人が誰よりも嘆き苦しんでいるとヒナタは直感した。

「……ッ、黙れッッ!!」

凶星を突かれたのか、頭に血が上ったネジが地を蹴った。ハヤテの制止の声を無視して、彼は拳を突き出す。試合、いや中忍試験で一度も冷静な態度を崩さなかったネジが、この時初めて激しい感情を見せた。

それは、明確な殺意だった。

慎重にだが迅速に担架で運ばれていくヒナタ。彼女が去った後の闘

技場では上忍までもを巻き込んだ争いが起こっていた。

それを人事のように眺めていた三人の内の一人が気だるげに話の口火を切る。手摺に頬杖をついて、彼女は冷やかにネジを見遣った。

「宿命とか運命とか…ウジウジしたヤローだな」

冷めた目でネジを見る多由也。彼女の隣で双眸を閉じていたナルトが静かに口を開いた。

「でも気持ちはわかるな……」

「……ナルト様？」

君麻呂の訝しげな声に答えず、ナルトは眼下の闘技場に目を向ける。闘技場にて拳を握り締めたナルがネジに宣戦布告の言葉を投げつけているのを、彼は青い瞳で見つめた。

「似ている気がするだけだよ。あの日向ネジとね」

「似ている？冗談だろ。お前とあのウジウジヤローとは似ても似つかねえよ」

即座に多由也はナルトの言葉を否定する。珍しく彼女に賛同した君麻呂も、深く頷いた。

「あの男は運命や宿命という単語を言い訳にして、どこか諦めているように見受けられます。ナルト様は何か諦めたのですか？」

白眼という特殊な眼を持たずとも、鋭い洞察眼で君麻呂は日向ネジの本質を見抜く。そして彼は、わざと試すような物言いでナルトに尋ねた。

反論するだろうと期待を込めての問い掛けだったが、なぜか口を噤んだまま微動だにしないナルト。失言だったかと焦った君麻呂に代わって、多由也が軽い調子でからかった。

「なんだよ？夢でも諦めたのか？」

彼女の揶揄が耳に届いたのか、ナルトがゆっくりと顔を上げる。その瞳を見た瞬間、多由也と君麻呂の身体が一斉に強張った。

顔を引き締めたナルトが空を睨みつける。その眼力はネジの比ではない。殺意でもなく諦観でもなく怒りでもない。様々な感情が複雑に入れ混じって得体の知れない何かがそこにはあった。

額から顎にかけて汗が流れ落ちるのをそのままに、君麻呂と多由也はごくりと唾を飲む。二人の視界に映るのはナルトの横顔で、また彼自身から視線を向けられているわけでもない。だというのにぞわりと鳥肌が立つほどの緊張感がその場に張り詰め、ナルトの全身から静かに滲み出る威圧感が、彼らの足を床に縫い付けていた。それでいて、そんな状況にいながらも、二人はナルトの青い瞳から目を離せない。

万感を秘めた彼の瞳の奥では、断固たる決意の炎が、ちらちらと燃え上がっていた。

「夢は実現させるものだ。空想ではなく、理想で終わらせるつもりもない。俺は諦めない。決して。夢を実現させるまでは――」

そこで言葉を途切れさせ、再びナルトは瞑目する。途端、ピンと張り詰めていた空気が緩み、威圧や緊張が掻き消えた。

ほっと息をついた君麻呂と多由也は、ナルトにそれ以上問い掛けることが出来なかった。

暫し逡巡した後で、多由也がぼつりと呟く。

「――やっぱ似てねえよ」

彼女の一言を耳にして、ようやくいつもの表情に戻ったナルトが口元に微笑を湛えた。



## 十四 急転直下

闘技場床の半分を占めている様々な武器。

それらは何れも鋭利な刃物で、加えて足の踏み場もないほど無造作に散らばっている。武器の散乱地帯から些か離れた場所で、少年は肩に掛かっていた包帯を鬱陶しそうに払いのけた。

「勝者、カンクロウ!!」

ハヤテの声を耳にして、その歌舞伎のような姿の少年は満足げに口角を上げる。同様に黒い装束を身に纏った人形がケタケタと不気味に笑った。

予選試合第十回戦——『カンクロウ』VS『テンテン』。

その試合の流れは当初テンテンに向いていたようだったが、形勢はあつという間に逆転した。

試合開始直後、ずっと背負っていたモノを床に降ろすカンクロウ。その包帯を幾重にも巻いてある忍具を対戦相手の武器だと察したテンテンは、彼がその忍具を使う前に、クナイを一斉に投擲する。クナイの雨は寸分変わらず、カンクロウの全身を突き刺した。

確かな手応えを感じ、テンテンは一瞬気を緩める。その一瞬が命取りであった。

テンテンが串刺しにしたのはカンクロウではなく、彼の『傀儡人形』。その人形をカンクロウはあたかも自分のように見せ掛けていたのである。

傀儡師である彼は、指先から放出したチャクラ系を器用に扱ってその人形を操作する。

双方とも忍具使いであつたが、道具の扱いに関しては傀儡師のほうが一枚上手だったようだ。テンテンの獲物である忍具に気づかれぬようチャクラ糸を繋ぐ。後はカンクロー目掛けてテンテンが忍具を投げつけてくるタイミングを見計らうだけ。それだけではなく人形に突き刺さったクナイまでもを彼はチャクラ糸で操り、対戦者を追い詰めていく。

対戦相手に向かって投げ打った忍具が空中で反転し、逆に自身目掛けて飛んでくる。武器を繰り出すたびにそれらを相手に盗られ、更には暗器を仕込んでいた巻物も闘技場隅に追いやられた。最終的には自らの武器によって闘技場壁に礫にされ、テンテンは試合続行不可能と判断されたのだった。

勝敗がとうに決まった十回戦だが、次試合はすぐには始まらない。会場床にテンテンの様々な武器が散らばっているからである。次がいくら最終試合であっても刃物が撒かれた床で闘わせるわけにはいかないだろう。

試験を一時中断し、散乱しているそれらを試験官達が回収していく。その様子を何気なく眺めていたナルトがふと眉を顰めた。

（影分身からの報告か…）

第二試験中に影分身をつくったナルトは、ソレを本来の目的を果たすための下準備として派遣しておいた。その影分身からの緊急報告が、今彼の脳裏に伝わったのである。

（先を越されたか…）

観戦者達の意識が眼下の闘技場に向いている中、ナルトは人知れず苦々しげな表情を浮かべる。指示を与えておいたが無駄に終わってしまった影分身を消し、心を落ちつかせるため彼は嘆息を漏らした。

「ナルト様？」

なにやらただ事ではない様子に懸念した君麻呂が話し掛けるが、何でもないとナルトは装う。

そして彼は涼しげな顔の裏で、計画の練り直しを図り始めた。

（フフフ… やつと出番ですか…）

予選最終試合の組み合わせは電光掲示板に表示されるまでもない。会場整備が終わるや否や降り立った対戦相手同様、闘技場中央に向かってドスは歩き始めた。

（大蛇丸様…。先回りまでしてサスケちゃんと接触し、殺さず呪印をつけた理由… 大体察しはついてますよ…。要するに僕達は試験中サスケくんの实力を見るための咬ませ犬で、貴方が欲しいのはサスケくんの命ではなかったという事…）

両腕をブランと垂らすといった悠然たる態度の反面、思索に耽るドス。彼は薄々大蛇丸に疑心を抱いていた。大蛇丸にとって自分は捨て駒でしかないのかと。

その疑いは今回の中忍試験で確固たるものとなり、ドスは益々不満を抱く。詳細は知らされずただ命令に従う人形になどなるつもりはない。

（大蛇丸様… いや、大蛇丸！ 教えてあげるよ。僕がただの咬ませ犬じゃない事を…）

大蛇丸への反逆の狼煙を心中上げていた彼は、目下の試合で命の危機に晒されているとは思ってもよらなかった。

『では最終試合、第十一回戦。『ドス・キヌタ』VS『我愛羅』――』

——始め——！」

ハヤテが試合開始の合図を下す。途端、仁王立ちで立っていた我愛羅の瓢箪から砂がドバツと溢れ出た。血走った瞳でドスを睨みつける彼は殺伐とした雰囲気を漂わせている。

「やべえな……。アイツ、死んだな」

「うずまきナルトの闘いを見てからずっと疼いていたからな……」

殺気を纏う我愛羅を、彼と同じ里の者達は戦々恐々と見つめていた。寸前の試合で勝利の余韻に浸るでもなく、カンクローは顔を青褪める。

闘い方や性格は三者三様違えど、十一回戦を観戦する間は心が一致するバキ・テマリ・カンクロー。

彼らは皆が皆、我愛羅の対戦相手——ドスの末路を憐れんでいた。

砂の波が押し寄せる。足を掬わんとするそれらを退けるため、ドスは空高く跳躍した。だが砂もまた宙へ浮き、彼の後を追撃する。空中で迫り来る砂の奔流に向かって、ドスはくつと喉を鳴らした。

「音と砂、どちらが速いか勝負といきますか……！」

パンツと砂が弾け飛ぶ。ドスの右腕に装備された響鳴スピーカーがびいんと振動した。

彼の武器であるこの響鳴穿は、内部で発生した音を増幅させ、さらにチャクラでそれを統制する。通常相手の聴覚を攻撃するために使用するのだが、今現在襲い掛かってくるのは砂だ。

ドスは空間を軽やかに移動する砂を衝撃音により相殺しているのがある。

砂の粒子がパラパラと空で飛散する。空を仰いだ我愛羅がぐつと拳

を握り締めた。

「【砂縛枢】……」

我愛羅の手の動きに従って砂が蠢く。闘技場に着地したドスを狙って、砂が再び押し寄せた。

ドスが急ぎ、響鳴穿を構える。我愛羅が静かに口を開いた。

「……遅い」

だが次の瞬間、彼の視界はぐらりと傾く。

「……！？」

突然我愛羅はガクリと膝をついた。彼の不調と相俟って、砂の動きが緩やかになる。

その隙について砂の包囲網から逃れたドスが、響鳴穿を構えたままゆっくり我愛羅に近づいた。

「言っただろう？音と砂、どちらが速いかとね……。悪いけど三半規管を攻撃させてもらったよ」

響鳴穿を我愛羅の頭部に向け、意気揚々と言いつつドス。内耳にある三半規管は平衡感覚を受容するための器官である。平衡感覚を失えば、立つ事すら不可能となるのだ。

「君の砂がどれだけ速くても音速には勝てない……。この勝負、僕の勝ちだね」

己の勝利を確信するドスが得意げにそう語るのを、我愛羅は静かに聞いている。

顔を伏せている彼の肩が小刻みに揺れているのを見て、多由也が眉を顰めた。

「おい……。なんか、マズインじゃねえか……？」

女の勘か直感か、訝しげに彼女はナルトに話し掛ける。多由也と君麻呂からの視線を一身に受けているナルトは、冷徹な眼差しで試合を観戦していた。

我愛羅が試合続行不可能だと判断したドスがハヤテに目を向ける。だが、彼の背後から脅威が忍び寄る。

「な…馬鹿な…！？なぜ動ける！？」

紙一重でドスは背後から襲い掛かってきた砂の猛攻をかわした。砂は執拗に彼を追い駆けてくる。それらを避けながら、ドスは慌てて砂の操り手に目を向けた。

平衡感覚を奪ったはずの対戦相手が平然と立っている。ありえない光景に驚愕の表情を浮かべたドスは、更にありえない光景に目を見張った。

我愛羅の耳からぱらぱらと何かが零れ落ちてゆく。それは今現在ドスを襲っているモノと同じ、砂の粒だった。我愛羅は耳にも砂を纏っていたのである。

ただし耳の奥にまで砂を密着させていたわけではないので、多少なりともドスの攻撃は効いたのだらう。実際この術は全身に砂を鎧のようにして纏う事で防御力を高める【砂の鎧】。流石に聴覚まで完全防御出来るはずもない。しかしながら砂を纏っていたおかげで、ドスの攻撃は内耳まで届かなかったのである。

耳を外耳・中耳・内耳と三つに分けた場合、内耳は耳の最も奥にある部分である。

前庭・三半規管・蝸牛によりなる内耳の内、前庭・三半規管が平衡感覚を受容する器官であり、蝸牛が聴覚に関わっている。外耳・中

耳はこの蝸牛に音の振動を伝えるだけの構造に過ぎない。  
つまりドスの攻撃は我愛羅の三半規管を損傷させるまでに至らなかつたのだ。

「殺してやる……」

我愛羅が静かにドスに向かって歩みを進める。その所作は非常にゆつくりだ。緩慢なその動きが逆にドスの恐怖を煽る。  
我愛羅はじりじりとドスを闘技場隅に追い詰めていく。完全に理性を失っているのか、にたりと笑う我愛羅。その笑みはナルト以外の観戦者達の背筋をゾクリと凍らせる。

「う… あああアア!!」

恐怖に駆られ半狂乱となったドスが右腕を我愛羅に向けた。彼は右腕に装着した響鳴穿から衝撃音を手当たり次第に放ち始める。

我愛羅が背負う瓢箪から砂が再び溢れ出た。真正面から襲い来る砂の奔流。前方から迫る砂に響鳴穿を構えたドスは、左側からの攻撃に対処出来なかった。

「ぐあ… ツ!!」

左足に砂が絡みつく。ギシリと骨の軋む音が響いた。足を縛る砂をなんとか振り切ろうとするが、それより速く砂が動く。

右腕に武器である響鳴穿を装着しているドスは左側からの攻撃に対処がどうしても遅くなる。我愛羅はそこを狙ったのだ。

砂によって轟沈していく身体。もがいても足掻いても砂の柙からは逃れられない。

砂に囚われたドスの姿を目にして、我愛羅がぺろりと舌舐めずりをした。

（（……マズイツッ！！））  
ハヤテ含む上忍達が、我愛羅の次の行動を察して飛び出す。だがそれより速く――。

「――【砂瀑送葬】――！！」

「【疾風沐雨】……」

我愛羅の声を遮るように、静かな声が闘技場に響いた。瞬間、激しい雨風がドスの身についた砂を全て洗い流す。

立ち込める砂塵の中に人影が見え、手摺をぎゅっと握り締めていた波風ナルは目を瞬かせた。

視界が晴れる。ドス与我愛羅の間に佇んでいたのは、この場にはいないはずの人物だった。

「……なぜ助ける？」

「同じ里の者を助けるのに理由などいるのか？」

何時の間にか我愛羅の前にて立ち塞がっていた彼――うずまきナルトがにこりと微笑む。その笑みが頬に触ったのか、我愛羅は目を吊り上げた。

「どうせ貴様と闘りたかつたんだ……。貴様から先に殺してやる！！」

「我愛羅君、もう試合は終了です……」

我愛羅の険悪な空気を察し、いらぬ死人を出さぬためハヤテが声を荒げる。ハヤテ同様我愛羅を止めようと上忍達もまた闘技場に降りて来ていた。

「うずまきナルト……！俺と闘え……ッ……！！」

ハヤテを無視して我愛羅が呻くように言う。我愛羅の目には今や、対戦相手であるドスもハヤテも上忍達も入っていないかった。彼が唯一視界に捉えているのは、うずまきナルトただ一人。

だがナルトは我愛羅に何も答えず、その場にいる上忍達の顔触れを見渡していた。ナルトの視線を感じたハヤテがごほんっと咳払いして一歩前に出る。

「死人を出さないでくれたことには感謝しています。ですが、試験の規則により…」

ハヤテの次の言葉を耳にして、憤慨した多由也が観覧席から飛び降りようとした。抗議しようとする彼女の肩を咄嗟に掴み、君麻呂が静かに囁く。

「ナルト様の邪魔をするな。あの方の事だ。何か考えがあるのだろう」

ハヤテの言葉に激怒する多由也とナルトを絶対的に信じている君麻呂。二人が観覧席で押し問答している事など知らず、礼儀正しくハヤテ含む上忍達にナルトはぺこりと頭を下げた。

既に戦意喪失し、呆然としているドスを見て、ハヤテは大きく声を張り上げる。

「ゴホッ…勝者、我愛羅!!」

自身の名が呼ばれても我愛羅はずっと、ドスを医務室へ促しているナルトの背中を見据えていた。

試合に担当上忍が割り込めば、その上忍が庇った下忍が失格。同じく下忍が試合に割り込んだ場合、助けに来た下忍も助けられた下忍も連帯責任ということで失格になる。たとえ前試合での勝利者でも本戦に出場する権利を剥奪されると、試験の規則によって定まっている。

ドスを庇ったナルトに向かって、ハヤテは無情にも次のように言い放ったのだった。

「試験の規則により……うずまきナルト、中忍試験失格!!」

#### 十四 急転直下（後書き）

カンクロウVSテンテンがあっさりしすぎてすみません…。

12月忙しかった…。とりあえず今年最後の投稿です。これの続きはお正月に書こうと思ってるので、来年もよろしく願います！  
よいお年を！！

（ちなみに「疾風沐雨」は「櫛風沐雨」をもじったものです。勝手に作ったオリジナルの術なんで、意味も全然違います。ご了承くださいます。）

## 十五 交渉（前書き）

あけましておめでとうございます！今年もよろしくお願い致します  
！！（遅いよ）

年が明けたというのに、今回は陰謀渦巻く話です…そして次回も。  
ちよつとずつ原作とズレてきています。  
そして医務室の中は捏造です。原作でも出てなかったですよ…？

## 十五 交渉

試合で負傷した者が運び込まれる医務室。そこへと繋がる廊下では、ひたひたという足音だけが反響する。

その静まり返った回廊で会話も無く、ただ歩いているのは二人の子どもと一人の大人。金髪の少年と彼の担当上忍らしき男の背中を、口を包帯で覆った子どもが探るように見つめている。

とうとう沈黙に耐え切れず、その子ども——ドスは自身の先を進む金髪少年——ナルトに声をかけた。

「なぜ、助けたのです？」

「言っただろう？ 同じ里の者を助けるのに理由などいるのか？」

突然の問い掛けにも全く動じず、我愛羅に対する答えと同じ言葉をナルトは再度口にする。しかしながらドスは、何の要求も見返りも求めない彼を不可解に思う。

「貴方と顔を合わせたのはこの中忍試験で初めてです。それだけの間柄なのに、どうして……」

「……左足の骨、罫が入ってるだろう？ 話は医務室でだ」

ナルトにそう指摘され、初めてドスは己の足の不調に気付いた。

確かに左足を我愛羅の砂に掴まれたが、まさか骨に罫が入っているとは思っても寄らなかった。自分以上に洞察眼の鋭いナルトに対し、彼は密かに畏怖の念を抱く。

そのため納得いかないながらも、ドスは渋々頷いた。

油女シノ・日向ネジ・奈良シカマル・我愛羅・カンクロウ・テマリ・波風ナル・多由也。

試合を勝ち抜いてきた者達が肩を並べている。長かった予選試合がようやく終わったのだ。

「中忍試験『第三の試験』：本戦進出を決めた皆さん。一名はここにいませんが、おめでとうございます」

試合の審判を無事務め終えたハヤテが祝辞を述べる。死者を出さずに済んだという安堵からか、その顔はどことなく穏やかである。

そんなハヤテの顔を睨みつけながら、死人を出さずに済んだのはナルトのおかげだろうが、と多由也は内心悪態を吐いていた。

各里の下忍を吟味するかのようになり、火影はその場に残った子ども達の顔触れを見渡す。

（ここにはおらん、うちはサスケを含め：木ノ葉五人に、砂三名。音一名か…）

心中で本戦出場者を指折り数えていた彼は笠をぐつと被り直した。歴戦の忍びたる三代目火影の瞳は、有望新人に対する期待に満ちている。そして彼は厳かに口を開いた。

「——では、これから本戦の説明を始める」

本戦出場者に説明が行われている闘技場とは違い、医務室は閑散としていた。

負傷した者を寝かすベッドが並んでいるため、医務室の中は存外広

い。そのベッド一つ一つが暖簾で仕切られており、傍には医療班員が控えている。室内にするりと滑り込んだナルトが、一瞬でその医療班員を眠らせた。

「見張り、頼まれてくれるか？」

「承知しました」

小声でナルトに了承の意を答えたのは、担当上忍に扮している君麻呂。

大の大人が子どもに従っているのを訝しげに思いながらも、ドスはナルトの後に続いて衝立の向こうに回り込む。

里ごとに区切られているのか『音』と書かれた暖簾を払い除ければ、ザクとキンが即座にベッドから跳ね起きる。彼らのベッドは隣接しているようだ。

同じ班であるドスを瞳に映し、安堵する二人。だが視界にナルトの姿が入った途端、彼らは眉を顰めた。

「 temeエは…うずまきナルト！？なんでここに…ッ」

「静かに。音を遮断する結果は張ったけど、あまり大きな声は出さないでくれ」

ナルトの一言でザクとキンはぐつと口を嚙む。両者ともナルトとりの試合を目の当たりにしているため、彼の実力を嫌というほど知っているのだ。

しかしながらいくら得体の知れない強者でも、その目的は探らねばならない。腕があつたはずの右肩を左手で押さえながら、ザクは低い声音でナルトに問い掛けた。

「……何しに来た…？」

「交渉しに」

端的にナルトは言う。ドスの左足に手を翳した彼は、至極率直にザ

クの問いに答えた。

自分の時は何度訊いても答えなかったのに、と若干不機嫌になった  
ドスは左足の違和感がすっかり無くなっている事に気づくと驚愕の  
表情を浮かべる。

「…い、何時の間に…」

「これでドスは大丈夫。ザクは…」

「触るな！！さっさと出てけ！！」

右肩に触れようとしたナルトの手を叩き払ってザクは怒鳴った。彼  
は今、物凄く不機嫌だった。

大蛇丸様のためにとうちはサスケを襲い、返り討ちにあった。試合  
でも油女シノにあっさり敗北し、おまけに片腕を失った。

大蛇丸に捨てられるという恐怖、そして自分のプライドがズタズタ  
に裂かれ、彼の精神は非常に不安定だった。

それなのに目の金髪少年は自分の手が届かないほどの強さを持つ  
ている。

中忍第二試験の際、多由也含むザク達に襲い掛かったサスケの豪火  
球を一瞬で消し、予選でも卓越した体術熟練者であるリーを圧倒し、  
そして今もドスの怪我を治す手腕を見せつけた。

要するにザクは、ナルトが妬ましくて堪らないのである。

「…交渉とは何ですか？」

猫が毛を逆立てるように威嚇するザクの隣で、ドスは口を開いた。  
彼がナルトに向ける視線は敵意や殺意などではない。ドスはもはや  
ナルトを敵としては見れなくなっていたのだ。

懸命に真意を探ろうとナルトを見つめているドス。それに驚いたの  
はザクだけではなくキンもだった。

「お、おい。ドス…」

「話してください」

困惑したザクがドスに話し掛けるが、ドスの瞳はもはやナルトしか映っていないかった。

ナルトの言葉を礼儀正しく待っているドス。忌々しげな表情を隠しもせず、苛々と貧乏揺すりをするザク。そんな二人の間でおろおろするキン。

表情や態度でそれぞれの性格を見透かしたナルトはちらりと視線を君麻呂に投げた。

そして実にわかりやすい取引を持ち掛ける。

「俺と共に来るか、大蛇丸の許に戻るか——ああ、逃げるというのも一つの手だな」

そして彼は、ぽかんと口を開けて見つめてくる三人の顔触れを見渡すと、一語一句強めて言い切った。

「今、選んでくれ」

「予選は無事終わり、本戦に入るようです」

膝をつき頭を垂れた青年が長髪の男にそう告げる。男に対する青年

の態度はどこか緊張気味であり、その場には緊迫した空気が流れていた。

そんな中、場違いにも鳥の囀りが聞こえてきて、長髪の男が感慨深げに口を開く。

「それにしても長閑<sup>のどか</sup>……いや、本当に平和ボケした国になったわ。どの国も軍拡競争で忙しいって言うのにねえ……」

青年の報告を聞いているのかいないのか、爬虫類を思わせる瞳を細めて男は眼下に広がる里を俯瞰した。里で指名手配されているはずの彼は、大胆にも一際目立つ場所で悠然と街並みを眺めている。

歴代火影の顔が彫られた崖。岩肌に施された火影の中でも三代目の若き顔上に男は立っていた。さながら火影そのものを踏み躪るかの如く。

「……今なら獲れますか？」

「ふ、まあね……。あんな爺の首を獲って楽しいかは解らないけど……」薄笑いを浮かべた男——大蛇丸が視線を外す。彼の瞳がどこか遠くを見ている事に気づき、青年——カブトはわざと唆すような物言いですぐ尋ねた。

「……そうでしょうか？僕にはまだ、貴方が躊躇しているように思われますが。これから各隠れ里の力は長く激しくぶつかりあう……。音隠れもその一つ、」

そこで言葉を切ったカブトは緩慢な動作で、眼鏡のブリッジを軽く押し上げる。

「貴方はその引き金になるおつもりだ……。そして彼はそのため『弾<sup>たま</sup>』なんでしょう？うちはサスケくん、でしたっけ？」

「フフ……。お前は察しが良過ぎて気味が悪いわ……」

「そうでもありませんよ。ドス・ザク・キンのことは知りませんでしたからね……。それに、まさかナルトくんが来るとは思いも寄り

ませんでした」

ふっと視線を大蛇丸から逸らして、カブトは一端息を吐いた。彼の顔は太陽の光に照らされてよく見えない。暫しの躊躇を見せた後、カブトは己が抱く懸念を口にした。

「私はまだ…完全に信用されていない、みたいですね…」

自嘲染みた笑みを口元に湛え、そう呟くカブト。そのいつになく自信無さげな態度に、大蛇丸は目を細めた。

「ドス達如き下っ端の話を『右腕』であるお前に言う必要があったかしら…？それにナルト君の事は私も知らなかったこと…。お互い様よ…」

大蛇丸の言葉を耳にして、カブトは顔を向き直す。眼鏡奥の瞳が怪訝そうに細められた。

「ナルトくんは……。何が目的で木ノ葉に…？」

「さあ？正直言って彼の考える事は私にも予想出来ないわ…。あれほど『聡明叡智』という言葉に相応しい子どもはいない…。未恐ろしいわね…」

大蛇丸の言葉には暗に、『天を仰ぎて唾す』<sup>つば</sup>という意味が込められている。ナルトに害を与えようとすれば、かえって己の身が危険に陥ると。

腹の内の探り合いを思わせるような遣り取りが一瞬途切れた。

真剣な面持ちで口を噤んでしまった大蛇丸に、カブトは差障りのない話を訊ねる。

「…ドス達はどんなさるおつもりです？裏切りでもしたら…」

「捨て置きなさい。あの程度の忍び、どうってことないわ…。私の許から逃げようが、木ノ葉に寝返ろうが知ったことじゃないわよ」

「…サスケ君はよろしいのですか？」

何の前触れも無くカブトはサスケの名を挙げる。まるで大蛇丸の反応を確かめるように。突然話題を変えたカブトに対し、大蛇丸はくつと口角を上げてみせた。

「物事を発生させるには何事も種が必要よ…。植物しかり、争いしかりね…。種は仕込んだ―それで充分。今は、まだいいわ…」

『今は』という言葉を強調して、大蛇丸は囁く。その口調はまるでカブトを試すかのような物言いである。

大蛇丸の言う種とは、サスケに与えた『呪印』を指しているのか。それとも他に何かあるのか…。

懐疑的な態度を隠しもせず、カブトは大蛇丸の強い眼光に負けじと目を合わせた。そして、ふっと笑みを浮かべる。

「いつになく慎重でいらっしますね？ナルト君がそんなに気掛かりなんですか？」

「……全く！鋭い子ね…。その通りよ。今のところは中立の立場だけど、これから先どう転ぶかわからないしね…。いくら私でも彼と敵対するのはお断り…。念には念を、と思つてね…」

腕を組み直しながら、大蛇丸は言葉を続ける。彼の顔色を窺っていたカブトの額からつうつと汗が滴り落ちた。

ここにはいない金髪の少年にあの大蛇丸がこれほど敬畏を払う。

大蛇丸以上に至高の存在なのだと改めて思ったが、そうとは表情に出さず、彼は大蛇丸の顔を覗き込んだ。双眸を閉じた大蛇丸は沈黙を貫いている。

会話が途切れ、辺りは静寂に包まれた。大蛇丸の表情から、もう自分に用は無いのだと察したカブトがついっと背を向ける。だが唐突に後ろから声をかけられ、彼は足を止めた。

「カブト…。忠告してあげるわ…」

感情の窺えない静かな声がカブトの身を再び硬直させる。大蛇丸の真剣な眼差しを背中に受け、何を言われるのだろうかと彼は身構えた。金縛りにあったように直立不動の姿勢をとるカブトを見て、大蛇丸は口元に弧を描く。

「ナルト君にちよっかい出すのは止めておきなさい。お前じゃ彼には敵わないわよ…。強いと言っても、カカシと同じ程度じゃねえ…」

大蛇丸と別れたカブトは主人の言葉に反して、ある場所へ向かっていった。

うちはサスケが収容されているであろう木ノ葉病院。その場所への道を辿りながら、彼は思わず笑みを零した。

（敵わない…？そんな事、貴方に言われなくとも…）

大蛇丸の忠告を、何を今更と失笑するカブト。彼の眼鏡が太陽の光に反射して薄く光った。

（とつくの昔から知っている）

## 十六 内通者

「…来ると思いますか？」

「さあ？どうだろうな」

麗らかな木漏れ日の下で囁き声がする。枝葉の間から洩れる陽光が、地に映る二つの人影でちらついていた。

双眸を閉じ、木の幹に背中を預けているナルトに、ようやく担当上忍の変化を解いた君麻呂が問い掛ける。問われた本人はまるで気の無い返事を返した。

「決めるのは自分自身。どれを選ぼうが選んだ本人の問題だ」

「…しかし後半の二つの末路はどちらにせよ『死』だと思いますが？」

「今、選んでくれ」と言ったものの、ナルトはドス達に考える猶予を与えた。尤も本戦の説明が終わるまでといった些細な時間内だが。

ナルトと君麻呂は、多由也が闘技場から出て来るのを塔の外で待っているのだ。同じくドス達三人の答えをも。

ナルトが挙げた選択肢は『自身と共に来る』『大蛇丸の許に戻る』『逃げる』。

君麻呂が言う後半の二つ…その内の『大蛇丸の許に戻る』を選べば禁術の生贄にされ、はたまた『逃げる』を選べば音忍の追手に追われる——どちらに転んでも行き着く先は『死』だ。

君麻呂の意を酌んだらしいナルトが瞳を閉じたまま口を開く。彼は取るに足りない僅かな希望を例として挙げてみせた。

「そうとも限らないよ？大蛇丸が気紛れを起こすかもしれないし、逃げて木ノ葉に匿われる可能性も無いとは言えない」

「僕ならそんな危ない橋は渡りたくないですね」

君麻呂の言葉に思うところがあつたのか、ナルトはうつすらと目を開ける。頭上の木陰が淡い陰影を落とし、彼の表情を覆い隠した。

「…俺と共に来ても、危険には変わりないと思うが？」

まるで君麻呂の反応を窺うようにナルトは言う。それを耳にして、君麻呂は一瞬目を大きく見開いた。

淡い陰影から垣間見える青い双眸。

何もかもを吸い込み、何者をも捕らえ、そして果てまで続く滄海のような瞳。

その深い海の如き青が君麻呂の目線を再び捉える。昔から君麻呂の心を捉えてやまぬその青に、彼は小さな笑みを浮かべた。

「その危険を回避するためにナルト様は先読みをなさるのでしょう？貴方様の神算には目を見張るばかりです」

「…お前は俺に夢を抱き過ぎだよ」

君麻呂の心からの賛美に、ナルトは苦笑を返す。そしてどこか遠くを見据え、独り言のように淡々と呟いた。

「歴史はどう変わるかわからない。それと一緒に物事はどう動くかわからない。見た後じゃ遅いんだ。敵を見て矢を矧ぐなど、戦場じや命取り…。眼に映る光景は既に起こっている事だからな。だから見る前に先を読み、先手を打つ」

そこで一端言葉を切った彼は、全てを悟ったかのような風情で自嘲を漏らす。さながらそれは子どものなりをした老人のようだった。

「結局のところ、俺は自分のために先を読んでいる…。いや、読むことしか出来ないんだ。今までも、そして——これからも」  
閉口し、子どもらしからぬ瞳でナルトは虚空を見つめている。肅々

とした雰囲気がある場に漂った。

言葉の意味を問おうと君麻呂が口を開きかける。だがそれより早く、ナルトを呼ぶ声が君麻呂の質疑を遮った。

「ナルト！……ダメエ、わざと失格になりやがったな！？」

出会い頭に文句を言いつつナルトに駆け寄る多由也。どうやら中忍試験の本戦説明が終わったらしい。ナルトに問う機会を逃し、君麻呂は恨みがましく彼女を睨んだ。

「試験を受ける必要が無くなったからね。多由也こそ本戦出るの？」

「出るわけねえだろ。【四紫炎陣】の結界張るのに、チャクラ温存しとかなきゃいけねんだから」

ふんと鼻で笑いながらナルトにそう答える多由也。中忍を目指す者達から非難を浴びそうな彼女の発言に、ナルトは苦笑した。

「一応訊くけど、本戦の組み合わせはどうなったの？」

「あ——…確か一回戦が『波風ナル』VS『日向ネジ』。二回戦が『カンクロー』VS『油女シノ』、三回戦が『テマリ』VS『奈良シカマル』。で、三回戦勝者がウチの相手……。最後が『我愛羅』VS『うちはサスケ』だったぜ」

ナルトの質問に、多由也が指折り数えながら答える。彼女の言葉を頭の中で整理しながら、君麻呂はナルトに尋ねた。

「…大蛇丸様が動くとしたら、うちはサスケの試合途中でしようか？」

「そうだろうな。一ヶ月でどこまで強くなったか少しは観ておきたいだろうし」

君麻呂の言葉に相槌を打つナルト。そんな彼に、今度は多由也が問い掛ける。

「本戦までの一ヶ月、担当上忍が本戦に出る下忍を個人指導するの

が普通だろ？けど木ノ葉の七班は、うちはサスケの他に波風ナルつて女が本戦に進んだ。ナルト、畑力カシはどう動くと思う？」

「そうだな…。同じ写輪眼を持っているし、なにより大蛇丸に狙われているのを考えれば、うちはサスケを指導するだろう。それに、うちはサスケに畑力カシがついてたんじゃ、並みの忍びは迂闊に手を出せない」

ナルトの答えに感心するものの、気になる点を思いつく君麻呂。彼はおずおずとその気掛りな点をナルトに話す。

「…しかし修行が始まる前ならば簡単に手を出せるんじゃないですか？例えばそう、今なら…」

君麻呂の危惧通り、ちょうど今、うちはサスケの周辺で事件が起きているのだが、ナルトは涼しげな顔で「手は打ってある」と答えた。そしてふっと視線をある一点に向ける。彼の視線の先を追って多由也と君麻呂もそちらに目を向けた。

そこには強張った、だが何かを決意した顔でこちらを見つめる者がいた。予想通りの顔触れに、憂愁の色がナルトの瞳を一瞬掠める。だが彼は平静な態度で、唐突に口を開いた。

「さて、返事を訊こうか？」

木ノ葉病院のある一室で、昏々と眠り続けている少年の顔を一人の青年が見下ろしている。彼の足下には、動物を模した面をつけている者達が倒れ伏していた。

「——優秀過ぎるってのも考えものだね。僕らは目立ち過ぎた…。大蛇丸様の目に留まったのはお互い不幸だったかな？」

昏々と眠る少年——うちはサスケの枕元で、静かに語り掛ける青年——薬師カブト。

うちはサスケを殺せば、大蛇丸の次なる転生は不可能となる。今ならば彼の野望を阻止出来るのだ。伝説とまで言われている三忍を出し抜ける、大蛇丸を翻弄出来る……などという考えがカブトの脳裏を過っていく。

三忍の一人であるあの大蛇丸の運命を自分が握っている。今、この少年を殺せば…。

大蛇丸を越える事も不可能ではないかもしれない。

ゴクリと生唾を呑み込んだカブトは、懷からメスを取り出した。鈍い光を放つソレを彼はゆっくりと……。

「……流石カカシさんだ。僕の死角からの攻撃を止めるなんて…」手首だけで投擲してきたカブトのメスを、片手のみで易々と掴み取った銀髪の男。

歪んだ笑みを浮かべるカブトからの賞賛に、彼は苦々しげな表情で

問い掛けた。

「……………ここで何をしている？」

メスを床に投げ捨てた畑カカシは、倒れている者達に目を向ける。彼の視線の先を追って暗部達を見たカブトが忠告の如き発言を漏らした。

「護衛の暗部…今度は最低、十人は用意しておいたほうがいいですよ」

「…助言とは余裕だな。コイツに何の用だ？」

「貴方に答える義理は無いと思いますけど？それに、状況はこっちが有利なんですから…」

剣呑な片目を吊り上げるカカシに対し、カブトは倅然たる態度を崩さず軽口で答えてみせる。

懐から今度はメスではなくヒ首ひしゅという鐔の無い短刀を取り出したカブトは、ソレをサスケの首筋に押し付けた。

俊敏な動きでヒ首を振り上げるカブト。今にも胸に突き立てようとした刹那、彼の手首を小さな手が素早く掴んだ。

「…なら、おとなしく殺される義理もないな」

意識を失っていたはずの少年が、自らの身体を纏うチューブを引き千切りながら笑っている。

その光景に酷く驚いたカブトは一瞬動きを止めた。無防備に佇むカブト目掛けて、カカシがクナイを投げ打つ。

クナイが風を切る音でカブトは我に返った。慌ててヒ首を構えるが、ベッド脇でこちらをじっと見据えるサスケが気になって仕方が無い。すっかり当惑したカブトは、次々と襲い来るクナイの嵐を弾くのに

精一杯となつてしまった。

「くッ!!」

病室という狭い場所であり、尚且つサスケという人質がいるからこそ迂闊に手を出せないだろうと思つていたカブトは冷や汗を掻く。

『呪印』の暴走及び【封邪法印】での疲労により意識を失つたサスケ。昏睡状態に陥つていたはずの彼が、今は平然と立っている。

おまけに木ノ葉の上忍の中でも随一の実力を誇る写輪眼の力カシが相手となると……。

どう考えても、こちらが圧倒的に不利だ。

一瞬でそつという結論に達したカブトは、匕首を力の限り投げ打った。

バリンと病室の窓が割れる。ガラスの破片がバラバラと飛び散った。二人の視線がそちらに向いた隙に、カブトは素早く懐から取り出した煙玉を床に叩きつける。

そのまま背後の窓を割り、木ノ葉病院の周囲を囲む木々の中へと彼は墜ちてゆく。

(……一か八かだったけど、やけにあつさり逃がしたな……)

猜疑心を残しながらも、一刻も早く病院から離れようとカブトは走り去った。

逃亡する侵入者の背中を、朦々と立ち込める煙の中で見送る二人。煙玉のせいで室内に満ちた煙を鬱陶しそうに手で仰ぎながら、一人がコキと首を鳴らす。

「やれやれ。病人の真似も疲れますね」

その言葉に何の反応も示さず、侵入者が病院から遠退いたかどうかを確認する力カシ。カブトの気配が完全に消えたと認めると、彼はすぐさま印を結ぶ。

途端、床で倒れていた暗部達の身体がバシッと水飛沫をあげた。暗部の死体があったはずの場所には、ただ水のみが広がっている。

「チツ、力カシの演技なんて二度と御免だ」

「なかなかお上手でしたよ？」

「うるせえ、黙れ」

いつになく荒々しい口調でサスケに怒鳴る力カシ。不貞腐れた態度で彼は印を結ぶ。

次の瞬間には、床に広がる水上に口を包帯で覆っている男が立っていた。

「こんな水浸しになってたら掃除のおばちゃんが驚くでしょうね」

水分身で作った暗部達の残骸を目にして、サスケがくつくつと笑う。その笑みは、サスケにはとても似合わない朗らかなものだ。見るに見かねて男——再不斬は嫌そうに言い捨てた。

「……いい加減、テメエも術解けよ」

「そうですね。そろそろ本物の力カシさんが騒ぎに気づいて来そうですね……」

ぼんつと軽い破裂音と共に変化を解いた彼が割れた窓を見遣る。廊

下からこちらへ向かつて来る気配を感じた彼らは、散乱した水とガラスの破片を踏み越え、窓枠に足を掛けた。

カブト同様、病院を囲む木々の中へ消えていく二人。重力に従い墜落していくその身は、直後病室に飛び込んできた焔力カシの目に留まる事は無かった。

木ノ葉病院からある程度遠ざかつて、二人は走る速度を落とさない。木から木へ飛び移りながら、再不斬はふと背後を走る者に声を掛けた。

「…病室の惨状を見たら、逆に警備が厳重にならねえか？」

「大丈夫だと思いますよ？木ノ葉病院の傍には演習場がありましてよくアカデミー生がそこで修行してるんですよ。ですから病室の窓が割れる事などさらにあります。大方水浸しの床は水遁の術を暴走させたもの。窓は外から投げられた匕首によって割られたと判断すると思いますよ」

実際はカブトが室内で投げた匕首だが、傍目には外から放り込まれたと考えてもおかしくはない。普通ならそう推理するかもな、と納得し掛けた再不斬だが、相手の口調が気に入らず、彼は眉を顰めた。

「いい加減、その下手な敬語止めろ。胸糞悪い」

「仕方ないじゃないですか。あの『霧隠れの鬼人』と言われる再不斬さんとの共同任務ですよ？」

再不斬の言葉に苦笑しながら彼は前髪を掻き上げる。蒼みがかった灰色の髪がさらりと風に靡いた。

「任務じゃねえ。ただの芝居だ。大体、テメエはナルトに借りを返

すため渋々協力してんだろーが。ミズキ」

名を呼ばれた彼は走る速度を速め、再不斬の隣に並ぶ。長い刑務所暮らして伸びた髪を鬱陶しそうに払いのけながら、ミズキは肩を竦めた。

「そりゃあ脱獄させてもらった恩があるしね。でも俺は元々ナルト君の協力者だったんだから渋々だなんてとんでもない。ある一件で木ノ葉嚴重警戒施設に収容されちゃったけど、それまでは木ノ葉の情報に彼に流してたんだから…。ま、刑務所暮らしも無駄にはならなかったしな」

ミズキの何か含みのある笑みを見て、胡散臭そうにふんと鼻を鳴らす再不斬。彼の陰悪な空気を感じ取ったのか、ミズキは笑みを引っ込めた。

ちらりと背後に視線を投げ、木ノ葉病院から優に距離を取ったと確認する。そして再び愛想笑いを浮かべ、言い繕うようにミズキは口を開いた。

「今回だって木ノ葉病院の内部に詳しくなければ、あのカブトとかいう青年を騙せないからね」

「【まげん魔幻・こじにあいす此处非の術】だったか…。あの野郎、見事に引っ掛かってくれたな」

現在の居場所を別の場所だと錯覚させる幻術——【まげん魔幻・こじにあいす此处非の術】。

この術をミズキは、木ノ葉病院を中心に、病院を取り囲む木々の区域に入った者に掛かるよう設定しておいた。勿論薬師カブトが来るであろう時間帯を見計らって。

対象者に掛けるのではなく特定の区域に入った者に掛かる、この【まげん魔幻・こじにあいす此处非の術】は、はがねコテツや神月イズモといった中忍レ

ベルの幻術。

故に、幻術知識を持つ者ならば簡単に破れる術なのだが、病室に侵入した際のカブトは柄にもなく冷静では無かった。

大蛇丸を出し抜けるかもしれないという高揚感と、大蛇丸に対する疚しさ。そういった複雑な思いを抱いていた彼は正に心ここに在らずであった。

だからこういった初歩中の初歩である【魔幻・此処非の術】にカブトはまんまと引っ掛かってしまったのだ。

サスケのいる病室だと思っていた所は、実はその一つ下の階。内装は同じだが、無人の病室である。そこでうちはサスケに変化したミズキが眠る振りをし、再不斬が作った水分身三体が木ノ葉の暗部を装う。

後は畑力カシに化けた再不斬が病室に飛び込めば、慎重なカブトは形勢不利だと察して逃亡するだろう。

以上のようにカブトの心理までもを利用した筋書きの脚本家はこの場にはいない。全ては中忍第二試験中、死の森で別れたナルトが仕組んだ事である。

再不斬・白に巻物収集を頼んだ後、彼はすぐさまミズキが收容されている木ノ葉嚴重警戒施設に向かった。そしてミズキの姿に変化した影分身に死んだよう見せ掛け、ミズキ本人を施設から脱走させたのだ。

彼が君麻呂達に伝えた「他にやること」とは、ミズキを脱獄させる事を指していたのである。

カブトによるサスケ襲撃をナルトはこの時既に読んでいた。そこで寸前の手筈をミズキに伝え、影分身のみを残し、本人は死の森に戻ったのである。その際、偶然にも大蛇丸とアンコが対峙している場所に居合わせたのだ。

巻物収集を終え、宿に向かった再不斬と白は、そこで脱獄したばかりのミズキと出会う。実際ナルトの影分身が彼の傍についていなければ、今頃ミズキの首と胴体は分かれていただろう。

カブトがサスケを襲撃した事がバレれば、木ノ葉の警備は厳しくなる。抜け忍である再不斬や白、ナルトにとってはいい迷惑だ。尤も顔が売れているのは再不斬だけなので他二人はそこまで困る事態ではない。しかしながら警戒が厳重になれば色々動きにくくなるのは確かである。

そこでカカシと闘った事のある再不斬と木ノ葉に詳しいミズキが今のような一芝居を打つ。

結果、木ノ葉の警戒は厳重にならず、自身の顔がカカシに見られたと思っているカブトは暫くは身を顰めるだろう。尤もナルトがサスケ暗殺を阻止したのは、もう一つ理由があるのだが。

「あんたがカカシさんに変化したのは、闘った事でもあったからか？一度拳を交えた相手の顔はよく憶えてるってヤツかい」

「…ふん。テメエだってアカデミー教師だったから、生徒だったうちはサスケに化けたんだろーが」

「元、だよ。今じゃ脱獄囚だ」

走る速度を落とし、生い茂った木の枝上に降り立ったミズキは人の良さそうな笑みを浮かべた。だがそれを再不斬はどこか食えない笑みだと思う。

好人物のようなその顔の裏に秘めている自身と同じ野心の匂い。それを同じ野心家である再不斬は敏感にも嗅ぎ取ったのだ。

「——そうだ。これ、ナルトくんに渡しといってもらえるかい？」

「あ？何だ、コレ……」

ふいにミズキから手渡されたモノを、再不斬は摘み上げるようにして受け取った。

それは一枚の紙切れ。

ただの紙にしか見えないそれを訝しげに睨んでいると、「ナルトくんなら解るよ」とミズキがにこやかに笑う。

「というわけで、俺も木ノ葉のお尋ね者なんでね。このへんでお暇いとまさせてもらっよ」

わざとらしく一礼したミズキが掻き消える。彼が消えた後には木の葉が数枚舞っていた。

渡された紙を薄目で見た後、それを懐に入れる再不斬。ミズキが消えた場所を暫し睨んでいた彼は、はたと空を仰いだ。

地平へと沈みゆく太陽。落陽は、まるで木ノ葉の危機を警告するかのようにに赤く燃えている。

まるで空に血をぶちまけたような緋色。その色に混ざる黄金色に、寸前の芝居を打たせた金髪少年の姿が思い浮かぶ。

「ナルトなら解る、か。知ったような口利きやがって……だが、」  
ニイと口元に弧を描き、再不斬は木の枝を蹴った。己の大事な首切り包丁を預けている白が待つ宿を目指し、駆ける足は心なしに軽快である。

昂る気を抑え切れず、彼は夕陽に向かって低く吼えた。

「面白くなってきたやがった……ッ!!」



## 十六 内通者（後書き）

木ノ葉嚴重警戒施設はアニメから。  
ですが、アニメオ리지ナルの登場人物——風神・雷神兄弟とは全く関係ありません。施設の名前だけ使わせてもらいました。ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0388w/>

---

渦巻く滄海 紅き空

2012年1月13日17時52分発行